

551  
37



始



川島露石著

一茶俳句新釋

東京 紅玉堂書店刊行



大正  
15. 2. 5  
内交

## 序の言葉

詩は説明し得られるものでない。たゞ感知し得られるものであらう。一茶の場合にあつても、從來その俳句に就いて言はれて來たやうな輕妙とか、洒脫とか、滑稽とかは、言はゞ一種の説明であつて、よく味つて見ればその輕妙は單純な輕妙でなく、その滑稽は單純に滑稽として片づけてしまへるやうな性質のものでもない。一茶その人は決して洒脫な詩人ではない。そこで一切の先入主となつたものから離れて、一茶を讀み直して見たいといふことが起つて來る。

一茶の生涯——殊にその江戸に於ける中年の放浪時代が世に知られるやうになつたのは、そんなに以前のことではない。それは彼の旅日記が発見せられてからこのかたのことである。ある意味から言へば、彼の死後一世紀をへだてた今日になつて、ほんとうにその人の書き遺したものを味つて見る時が來たとも言へる。

頃日、勝峯晋風君の紹介で、川島つゆ子さんがその新著『一茶俳句新釋』の稿を持參され、私に序を書けと言はれる。その道に造詣の深い人も多くある中で、俳句一つ作つたことのない私が斯ういふ著述の序を書くに適してゐるかどうかは、自分ながら疑はしい。川島つゆ子さんは本所に住み、つ

とに俳句に親しんだ人と聞いてゐる。昔の園女、羽紅などこゝに引合に出すまでもなく、婦人ながらに俳諧の愛に生き、この『一茶俳句新釋』のやうな好著を完成せられたのは床しい。私が今、自分の柄にもない序の言葉をここに書きつけて見るのも、特に一茶の遺著の紹介に縁故の深い勝峯君からの依頼があつたといふばかりではない。この新釋が世に公にされるまでの著者の苦心と準備とが何程のものとも言へないことを想ひ見るからである。もし俳句の世界から言へば一門外漢に過ぎない私などのこゝに書きつけることが、いくらかでもこの著者を世にすゝめることになり、廣い意味での詩の愛を分つことが出来るなら、それこそ自分としては望外の幸ひと言ふべきである。

思ふに、詩人としての一茶の歩いた道は、その寂しさは、世人の想像以上ではなかつたらうか。彼のやうに孤獨な生涯を送りつゞけた人なればこそ、あれほど子供の友達ともなり、虐げられたものゝ友達ともなり、貧しく愚かなものゝ友達ともなつたであらう。それにしても、一茶の俳句に見るやうなあのやすらかさは、何といふ得がたい境地だらう。

たよりなき風雲に身を責め、花鳥に情を勞するとは、芭蕉の書きのこしたものにも見える。芭蕉にはその執着と矛盾とがある。賢愚文質のひとしからざるをも、いづれか幻の栖でないものがあらうかと觀じたのは芭蕉だ。一茶の書きあらはした執着となると、もつとあからさまで、もつと生々しい。しかしその一事をもつて、全く氣質を異にし境涯を異にし時代を異にした二人の詩人を概括的に言つ

てしまふといふは、よくない。

芭蕉は特有な美を創造した詩人である。一茶もまた特有な美を創造した詩人である。一茶のやうに人間の煩惱を憚らず歌ひ出でたといふは、彼以前の俳人にも歌人にもないことであつて、その先人未發の美しい世界に獨白の俳諧を感知し得たところに、その特有な美を創造したところに、又、その境地をおのづから歌ひ出でたところに、まことの詩人らしさを見る。

川島つゆ子さんの『一茶俳句新釋』は、この一茶を読み直す心から生れて來たと言へよう。卷末に附録としてある一茶小傳を見ても、世にありふれた註釋書でなく、もつと親切な心から書かれたものであることを語つてゐる。この書が一茶を愛するものゝ好き伴侶であり、俳諧の初學者に取つても好き手引であることは疑ひを容れない。

大正十四年の冬

東京麻布飯倉にて。

島崎藤村

## 序

私の経験。それは二三の方言に就いてあるが、一茶の句を解釋する場合に、ひとり合點のいかに危険であるかを先づ語らせて頂かう。

さをしかやえひひして 舐る今朝の霜

「えひ」してが解らない。或人は海老であらう。鹿が其のからだを海老のやうにして、背中に置いた霜を舐るのだらう。といふ説が甚だうがつて居るやうで、しかも、私のむねにはしつくり來なかつた。その坐に居た或人はこれを聞いてからくくと笑つた。「ばかをいつては困る」その人は信濃の出身者である。前の或人はむつとして「ばか」といはれた侮辱に對して詰寄つた。後の或人は「いや、ばか〜しい」とすこし言葉を柔げながら「えひは一口にいへば助け合ふことさ。田植などに村の人が苗を植ゑつとする時にさういふので、信州ばかりでなく、關東地方にはあまねく通じる方言ですよ」と説明したので、前の或人は「そいつはどうも〜」とあたまを掻いて引さがつた。

思ふさま寝てはこをして 歸る雁

一茶の「まくり」の中に人々の顔を覗かせた此の句の「はこ」が問題になつた。「こいつは假名ちが

ひでせう。寢てはかうしての、かうをこを、と書いたのでせう』第一に謎をといいた人があつたが「どつこい待つた」といふ風に手を振つて『それはこじつけだ。はこつてあの事ですよ。それ、あの七番日記にへんな符號のついてるあの事です』第二の謎は人々の笑ひのうちに苦もなく解かれた。私は「はこ」が情事の方言であるならば、それに相違ないと思つたけれど、更に或人に話したらば、今度は「はか」とは罵らなかつたが『それは困る』と、ほんとに困つた顔付をして、『一茶をさう變體性慾者にばかり扱はれては困りますね』と前提を置いていふやう、『はこは屎ですよ。え、ばつこともいひましてね』それを聞いて私は膝をたゝいた。さうでせう。無條件でその説に約變します』といつた理由は、一茶の『株番』の云なしの花に就いての問答中に『彼の慈悲すれば、はこするとはそのこと也』とある其のはこが、屎であつてこそ、文意明瞭するからであつた。

おふくろがお福ねぢきる指南かな

「おらが春」にある句で、古板本を一見した者は知つてゐるやうに、『お福ねぢきる』と讀めるので私も疑ひなく『お福』として置いた。ところが信州では正月の供餅モチをすべて『お福手』といふさうで、この『お福ねぢきる』のねは『お福手』の手の草體の讀み誤りである事が判然した。たゞ其の供餅の大小を知り得ないので、信州へ行つたついでに聞くと、『お福手』といふのは大型の供餅をいふので、餅を両手で大きくまるめて、頃合ひのまるさになつた時、急に両手を搾めてすぼりとねぢきるのが、頗

る呼吸ものださうである。同じ信州でも地方によつては大小の別なく『お福手』といふらしいが、右の説明によれば、お袋の指南が甚だいき／＼した描寫になつて來る。

一茶はこんな方言を使つて、都會人の私をとき／＼困惑させるが、一茶みづからも他國の方言にはなやまされたと見えて、一冊の『方言類聚』といふ可きものを著作してゐる。

川島女史の『一茶俳句新釋』はそれらの方言に關しても、十分の考慮の拂はれて居るのはいふまでもないが、女史の文章の眞卒と、そして野性的な線の太さとが、一茶の句解に此の成功を收め得た事と思ふ。

大正十四年十二月二十六日

勝 峰 晋 風

## 自序

トタン屋根に直射する炎熱の下に、私はずつとこの稿を續けて來た。尤もそれは、もつと早く仕上げなければならなかつたのを、遅らせ遅らせして來た爲であつた。

私は初めからこの仕事は自分には可なり無理なことを知つて居た。然しこの仕事は自分に適當か不適當かといふやうなことは考へて見る暇がなかつた。私はいろ／＼の意味に於て、仄な光を見る心地で、この不馴な仕事に向つたのであつた。それに、私を仕事の方に引付ける第一のものは、作者の薄倖な運命境遇に對する同情や共鳴が、自分をよりよく助けるだらうと思ふ果敢ない希望であつた。

然し、仕事を持つことに依つて、次第に眞劍に彼の作品彼の履歴に觸れて行くに従つて、寧ろ彼の半面をなす缺陷は、陥穽のやうに私の前に横たはつて、私の前途を阻んだ。私はある時は殆んど絶望に近い心持を抱いた。少くとも一茶の郷里を訪うて歸る頃までは、自分の仕事に對して暗い氣持ちの中を彷徨して居た。それは、作者に對する愛なくして、斯ういふ仕事は一行も一ページも續けて行かぬ性質のものでなかつたから。

然し私は、やがて、自分の觀察が餘りに暗黒面に偏し過ぎて居たことに氣がついた。そして、今一段弱い心を振絞つて、一茶のよい方面、一茶の長所を探し出すことに努めやうとした。私の小さな努力は然し空しくなかつた。私は今は、よしんば今後一茶の性格履歴の上にかなる汚點を洗ひ出されようとも、その故に、私の心に住む一茶その人に對する愛と執着を容易に消されようとは思へない。いつか私にもそれだけの心の用意が出来上つて来た——一茶に對する管見は、卷末「一茶の都里へ」の中にいさゝか述べさせて貰つた——それで、私の與へられたる仕事は一茶の作品の評釋にあるが、私はこの機會に猶ほ讀者と共に一茶を語り、讀者と共に一茶その人を知りたい念願を強くする。従つて選句はなるべく多方面に渡つて、中には駄句と思はれるやうなものも敢て評釋に上せたことをお断りしておきたい。

初め私は評釋句に年代を附するつもりであつたが、一茶は再案重出をいとはず心のゆくまゝに書付けて行く人であつた爲めに、年代の明かな日記等に依るも、猶ほ當時の作か否かを疑問とする場合が少くない。然も原本の多くは散逸して居る一茶の作品の年代別の如きは、實際は篤志の研究家と雖も至難とする仕事であることを悟つた。まして見地の狭い私は、たゞ鑑賞者の参考のために出書名だけを附することに止めておいた。重出の分は、なるべく早い方の書名を記した。

「旅日記」(勝峰晋風氏校訂)は、一茶四十二歳の文化元年より同五年に渡る江戸放浪時代の句日記で、

江戸に於ける一茶の生活、及び一茶の藝術の圓熟境に至る階梯を傳へるものとして特殊の價值がある。

「七番日記」は、一茶四十八歳の文化七年より同十五年に至る句日記で、句數は七千有餘を數へる。

前半は放浪時代、後半は故郷に隱棲後の手記である。一茶の作風及び、日常記事感想等に依つて一茶の性格境遇を知るべく重要な意味を持つて居る。この間に一茶は結婚もし、子供もまうけ、又喪つて居る。

「おらが春」は、一茶五十七歳の文政二年の隨筆句日記で、前二書が人に見せる目的で記されたのでなかつたのに反して、これは一茶の藝術の圓熟境に於ける代表的著作である。苟くも一茶について語らんとする人は是非一讀の必要がある。本文を遺著の部に編した所以である。

「句帳」は、同じく文政二年起筆の一茶自筆の稿本を、岡野知十氏編次して四季に分つて、俳諧文庫「一茶大江丸全集」中に收められて居る。

「發句集」は、文政十二年一茶の三回忌に門人等に依つて出版されたもので、最も世に流布されて居る。其後嘉永元年増補出版された。故に文政版嘉永版と區別して呼ばれて居るが、本書に於ては煩瑣を避けて單に發句集と記しておく。

「父終焉記」は、一茶三十九歳の享和元年四月二十三日父彌五兵衛發病の當時より病没に至る一ヶ月間の看護日記で、卒讀に堪へぬ悲涙の文字である。拔萃して「おらが春」と共に遺著の部に編してお



く。一茶の作品にのみ接して来た讀者は、此處に、作品の上に現はれない一茶の暗鬱にして怯懦なる性格、然も愛情深き一人の人間の姿を見出されるであらう。

其他一茶の残した文通より、及び、有名な句で出書を明かにしないもの（私が）一二句は、一茶一代全集に據つた。

本書の刊行に至るまでには、半田良平先生の懇篤なる盡力、並に山中笑翁其他知己諸氏の教示助言に負ふところが多かつた。猶特に島崎藤村・勝峰晋風兩先生より序文を賜り、小泉勝爾先生が本書のために装幀の勞を快諾されし等、著者の望外の喜びとする處である。

本書の刊行に至るまでには、半田良平先生の懇篤なる盡力、並に山中笑翁其他知己諸氏の教示助言に負ふところが多かつた。猶特に島崎藤村、勝峰晋風兩先生より序文を賜り、小泉勝爾先生が本書のために装幀の勞を快諾されし等、著者の望外の喜びとするところである。

然し、本書を機縁として讀者諸君と共に一茶を語ることに依つて、今後吾々の前に、より眞實な一茶の面影の現はれて來るであらうことを、遠い樂しみとして筆を擱く。

大震災三週年のとし

江東のバラック街にて

川 島 つゆ

### 目次

#### 一茶俳句新釋

春の部	三
夏の部	廿
秋の部	三三
冬の部	一八五
雑の部	二五

#### 遺著の部

おらが春	一四
父終焉記	二六一

#### 附録

一 茶小傳……………三〇九

一 茶の郷里へ……………三二

序 序 装  
 序 序 幀

島崎藤村氏  
 勝峰晉風氏  
 小泉勝爾氏

評釋句目次

春の部

〔一〕	目出度さも中位なりおらが春	三
〔二〕	ぬかるみへ杖つツばつて初日哉	四
〔三〕	元日や上々吉の淺黄空	五
〔四〕	名代にわか水浴る鳥かな	六
〔五〕	這へ笑へ二つになるぞ今朝からは	七
〔六〕	蓬萊になんむくといふ子かな	八
〔七〕	書き賃のみかんみいく吉書かな	九
〔八〕	逃しなや水祝はるゝ五十掣	九
〔九〕	垢爪や齋の前もはづかしき	一〇
〔一〇〕	手拭で引かついだる若菜かな	二
〔一一〕	鳴く猫に赤ン目をして手まり哉	三



- 〔一二〕 門々の下駄の泥より春立ちぬ……………三
- 〔一三〕 柀にちよつと春立つ月夜かな……………三
- 〔一四〕 今春が来た様子なりたばこ盆……………四
- 〔一五〕 大聲や二十日過ぎての御萬歳……………五
- 〔一六〕 門前や杖でつくりし雪解川……………五
- 〔一七〕 鍋の尻干しならべたる雪解かな……………六
- 〔一八〕 雪とけて村一ぱいの子供哉……………七
- 〔一九〕 ひたすらに咲かうでもなし門の梅……………七
- 〔二〇〕 藪尻の賽銭箱や梅の花……………八
- 〔二一〕 畠打や手涕をねぢる梅の花……………九
- 〔二二〕 月の梅の酔のこんにやくのと今日も過ぎぬ……………一〇
- 〔二三〕 梅の花こゝを盗めとさす月か……………一〇
- 〔二四〕 鶯や泥足ぬぐふ梅の花……………一三
- 〔二五〕 鶯にあてがつておく垣根かな……………一三
- 〔二六〕 鯉の柄に鶯なくや小梅村……………一三

- 〔二七〕 犬の子の踏まへて眠る柳かな……………一三
- 〔二八〕 けろりくわんとして鴉と柳かな……………一四
- 〔二九〕 柳からもゝんぐあゝあと出る子哉……………一五
- 〔三〇〕 ほくくくと霞んで来るはどなたかな……………一六
- 〔三一〕 今日もく霞んで暮す小家かな……………一六
- 〔三二〕 迹供は霞引きけり加賀守……………一六
- 〔三三〕 笠でするさらばくやうす霞……………一六
- 〔三四〕 霞み行くや二親持ちし小すげ笠……………一六
- 〔三五〕 霞む日や夕山かけの笛の笛……………一六
- 〔三六〕 霞む日やしんかんとして大座敷……………一六
- 〔三七〕 我里はどう霞んでもいびつなり……………一六
- 〔三八〕 とく霞めとくく霞め放ち鳥……………一六
- 〔三九〕 猫の子や秤にかゝりつゝじやれる……………一六
- 〔四〇〕 小男鹿よ手拭貸さん角の跡……………一六
- 〔四一〕 かしましや江戸見た鴈の歸りやう……………一六

〔四二〕 五百崎や御舟をがんで歸る鴈……………三  
 〔四三〕 慈悲すれば糞をするなり雀の子……………三  
 〔四四〕 雀の子そこのけくお馬が通る……………三  
 〔四五〕 我と来て遊べや親のない雀……………三  
 〔四六〕 夕燕我には翌日あすのあてはなき……………四  
 〔四七〕 横乗の馬のつゞくや夕雲雀……………四  
 〔四八〕 蝶とんで我身も塵のたぐひ哉……………四  
 〔四九〕 蝶とぶや親鸞松も知つた顔……………四  
 〔五〇〕 葎からあんな小蝶の生れけり……………四  
 〔五一〕 ●大猫の尻尾でなぶる小蝶かな……………四  
 〔五二〕 門の蝶子が這へば飛びはへばとぶ……………四  
 〔五三〕 田に畑にてんく舞の小蝶かな……………四  
 〔五四〕 あたふたに蝶の出る日や金の番……………四  
 〔五五〕 それ虻に世話をやかすな明り窓……………四  
 〔五六〕 向々に蛙のいとこはとこ哉……………四

〔五七〕 悠然として山を見る蛙かな……………四  
 〔五八〕 陽炎や白の中から眞一筋……………四  
 〔五九〕 陽炎や掃捨芥の錢になる……………五  
 〔六〇〕 陽炎や寺へ行かれし杖の穴……………五  
 〔六一〕 小うるさい花が咲くとて寐釋迦哉……………五  
 〔六二〕 春雨や喰はれ残りの鴨が鳴く……………五  
 〔六三〕 春雨や鼠のなめる隅田川……………五  
 〔六四〕 ●臯よ面癖直せはるの雨……………五  
 〔六五〕 安堵して鼠も寐るよ春の雨……………五  
 〔六六〕 春の日や雪隠草履新しき……………五  
 〔六七〕 春の日のつるく迂る櫛かな……………五  
 〔六八〕 永の日を喰ふや喰はずや池の龜……………五  
 〔六九〕 春風に尻を吹かるゝ家根屋哉……………五  
 〔七〇〕 春の風おまんが布のなりに吹く……………五  
 〔七一〕 浅川や鍋すゝぐ手に春の月……………五

- 〔七二〕 つつぽんも時や作らん春の月……………五
- 〔七三〕 おらが世やそこらの草も餅になる……………六
- 〔七四〕 さくら／＼と唄はれし老木かな……………六
- 〔七五〕 櫻へと見えてじん／＼端折哉……………六
- 〔七六〕 斯う生きて居るも不思議ぞ花の蔭……………六
- 〔七七〕 勘忍をいたしにゆくや花の蔭……………六
- 〔七八〕 人聲にほつとしたやら夕櫻……………六
- 〔七九〕 此やうな末世を櫻だらけ哉……………六
- 〔八〇〕 下々に生れて夜もさくら哉……………六
- 〔八一〕 エタ寺の櫻まじ／＼咲きにけり……………六
- 〔八二〕 我國は草も櫻を咲きにけり……………六
- 〔八三〕 かるた程門の菜の花咲きにけり……………六
- 〔八四〕 の餅腹をこなしがてらの接穂かな……………六
- 〔八五〕 ゆさ／＼と春が行くぞよ野邊の草……………七
- 〔八六〕 早淋し朝顔時くといふ鳥……………七

夏の部

- 
- 〔八七〕 おもしろい夜は昔なり更衣……………七
- 〔八八〕 更衣よしなき草を引ぬきぬ……………七
- 〔八九〕 その門にあたま用心更衣……………七
- 〔九〇〕 春日野の鹿に嗅るゝ拾かな……………七
- 〔九一〕 はつ拾にくまれ盛りに早くなれ……………七
- 〔九二〕 是ほどのぼたんと仕方する子哉……………七
- 〔九三〕 てもさてもても福相の牡丹かな……………七
- 〔九四〕 芥子さげて群集の中を通りけり……………七
- 〔九五〕 卯の花の吉日もちし後架かな……………七
- 〔九六〕 かくれ家や死なば簾の青いうち……………七
- 〔九七〕 江戸住や二階窓から初轍……………七
- 〔九八〕 わか様が菖浦をしやぶる湯殿哉……………七
- 〔九九〕 この雨はのつ引ならしほとゝぎす……………八

- 〔一〇〇〕 歩きながら傘干せばほととぎす…………… 八
- 〔一〇一〕 是でこそ御時鳥松に月…………… 八
- 〔一〇二〕 時鳥蠅めらもよつく聞け…………… 八
- 〔一〇三〕 先住のつけわたりなりかんこ鳥…………… 八
- 〔一〇四〕 霧に乗る目つきして居る墓哉…………… 八
- 〔一〇五〕 蟾どのゝ妻や待らん子なくらん…………… 八
- 〔一〇六〕 蚊がちらりほらりこれから老が世ぞ…………… 八
- 〔一〇七〕 隙人や蚊が出たぐと觸れ歩く…………… 八
- 〔一〇八〕 閨の蚊のぶんとばかりに焼かれけり…………… 八
- 〔一〇九〕 宵越の豆腐明りに籤蚊かな…………… 八
- 〔一一〇〕 大雨の敷居にちよいと蚊やり哉…………… 八
- 〔一一一〕 蚊柱の穴から見ゆる都かな…………… 八
- 〔一一二〕 手をすりて蚊屋の小隅を借りにけり…………… 八
- 〔一一三〕 かはほりやさらば汝と兩國へ…………… 八
- 〔一一四〕 けふの日も棒ふり虫よ翌も又…………… 八

V

- 〔一一五〕 早少女や箸にからまる草の花…………… 九
- 〔一一六〕 起々の慾目引張る青田哉…………… 九
- 〔一一七〕 湯の瀧も同じ音なり五月雨…………… 九
- 〔一一八〕 五日雨も仕舞のはらりぐ哉…………… 九
- 〔一一九〕 入梅晴や二軒並んで煤拂…………… 九
- 〔一二〇〕 寐せつけし子の洗濯や夏の月…………… 九
- 〔一二一〕 なぐさみに藁を打つなり夏の月…………… 九
- 〔一二二〕 短夜の竹の風癖直りけり…………… 九
- 〔一二三〕 法談の手眞似も見えて夏木立…………… 九
- 〔一二四〕 赤い葉の榮耀に散るや夏木立…………… 九
- 〔一二五〕 麥秋や子を負ひながらいわし賣…………… 九
- 〔一二六〕 虫にまで尺とられけり此はしら…………… 九
- 〔一二七〕 さし柳螢飛ぶ夜となりにけり…………… 九
- 〔一二八〕 二三遍人をきよくつて行く螢…………… 九
- 〔一二九〕 大螢ゆらりぐと通りけり…………… 九

- 〔一三〇〕 初瓜を引とらまへて寐た子哉……………一〇六
- 〔一三一〕 人來たら蛙になれよ冷し瓜……………一〇七
- 〔一三二〕 鮓になる間と配るまくらかな……………一〇七
- 〔一三三〕 手にとれば歩きたくなる扇かな……………一〇八
- 〔一三四〕 寐謠の尻ぺたたゞく扇かな……………一〇八
- 〔一三五〕 大猫のどさりと寐たる團扇哉……………一〇九
- 〔一三六〕 あんよくくや母を日傘もち……………一一〇
- 〔一三七〕 蚤のあと數へながらに添乳かな……………一一〇
- 〔一三八〕 蚤の跡それも若きは美しき……………一一一
- 〔一三九〕 笠の蠅我より先へかけ入りぬ……………一一一
- 〔一四〇〕 縁の蠅手をするとこを打たれけり……………一一三
- 〔一四一〕 世がよくばも一つとまれ飯の蠅……………一一三
- 〔一四二〕 蠅打てば蝶もこそく立ちにけり……………一一四
- 〔一四三〕 蟬鳴くや我家も石になるやうに……………一一四
- 〔一四四〕 松の蟬どこまで鳴いて晝になる……………一一五

- 〔一四五〕 蟬鳴くやつくく赤い風車……………一一六
- 〔一四六〕 夕月や大肌ぬいでかたつぶり……………一二七
- 〔一四七〕 涼風の曲りくねつて來りけり……………一二七
- 〔一四八〕 涼風やちから一ばいきりくす……………一二八
- 〔一四九〕 涼しさや糊のかわかぬ小行燈……………一二九
- 〔一五〇〕 青草も錢だけ戦ぐ門涼み……………一二九
- 〔一五一〕 寐並んで遠夕立の評議かな……………一三〇
- 〔一五二〕 なほ暑し今來た山を寐て見れば……………一三三
- 〔一五三〕 蔭の葉にぼんと穴あく暑さ哉……………一三三
- 〔一五四〕 風あるをもつてたふとし雲の峰……………一三三
- 〔一五五〕 蟻の道雲の峰より續きけん……………一三三
- 〔一五六〕 丘の家や蓮に吹かれて夕茶漬……………一三四
- 〔一五七〕 蓮の葉にこの世の露は曲りけり……………一三四
- 〔一五八〕 母馬が番して吞す清水哉……………一三五
- 〔一五九〕 馬の子が口つん出すや杜若……………一三六



- 〔一六〇〕 故郷やよるもさはるも茨の花……………一三六
- 〔一六一〕 晝顔やぼつくと燃える石ころへ……………一三八
- 〔一六二〕 夕顔の花で涙かむおぼせ哉……………一三九

秋の部

- 〔一六三〕 露の玉つまんで見たる童かな……………一三三
- 〔一六四〕 甘からばさぞおらが露人の露……………一三三
- 〔一六五〕 白露にさぶとふみ込む鳥哉……………一三三
- 〔一六六〕 笛ふいて白露いはふ在所哉……………一三三
- 〔一六七〕 人間は露と答へよ合點か……………一三三
- 〔一六八〕 けさほどやこそりと落ちてある一葉……………一三五
- 〔一六九〕 たのもしや未だ薄暑き三日の月……………一三六
- 〔一七〇〕 禪に笛つきさして星むかひ……………一三六
- 〔一七一〕 有明や浅間の霧が膳を這ふ……………一三七
- 〔一七二〕 うす霧の引からまりし垣根哉……………一三八

- 〔一七三〕 夕霧や馬の覚えし橋の穴……………一三九
- 〔一七四〕 稻妻にへな／＼橋を渡りけり……………一三九
- 〔一七五〕 石川はくわらり稻妻さらり哉……………一四〇
- 〔一七六〕 秋の原知つたら何ぞ唄ふべき……………一四〇
- 〔一七七〕 秋風やむしりたがりし赤い花……………一四一
- 〔一七八〕 秋風や磁石にあてる故郷山……………一四二
- 〔一七九〕 秋風やあれも昔の美少年……………一四三
- 〔一八〇〕 秋風や壁のへまムシヨ入道……………一四三
- 〔一八一〕 秋風に歩いて逃る螢かな……………一四四
- 〔一八二〕 寐筵や野分を吹かす足のうら……………一四五
- 〔一八三〕 縁ばなや二文花火も夜の體……………一四五
- 〔一八四〕 虫鳴くやきのふは見えぬ壁の穴……………一四六
- 〔一八五〕 蝉のとぶや唐箕の埃先……………一四七
- 〔一八六〕 庵の夜や棚さがしするきり／＼す……………一四八
- 〔一八七〕 お祭に赤い出立のとんぼ哉……………一四八

- 〔一八八〕 づぶ濡にぬれてまじく／＼とんぼ哉……………一四九
- 〔一八九〕 仰向けに落ちて鳴きけり秋の蟬……………一五〇
- 〔一九〇〕 啼きながら蟲の流るゝ浮木哉……………一五〇
- 〔一九一〕 虫の尻を指して笑ひ佛哉……………一五一
- 〔一九二〕 朝顔や人の顔にはそつがある……………一五一
- 〔一九三〕 外聞に朝顔咲かす町家かな……………一五二
- 〔一九四〕 人知らぬ朝顔も朝な／＼哉……………一五三
- 〔一九五〕 朝顔や一霜添へてはつと咲く……………一五四
- 〔一九六〕 うか／＼と出水に逢ひし木槿かな……………一五五
- 〔一九七〕 寐る外に分別はなし花木槿……………一五五
- 〔一九八〕 むだ花に景色とられし瓢かな……………一五五
- 〔一九九〕 みそ萩や水につければ風の吹く……………一五七
- 〔二〇〇〕 きり／＼しやんとして咲く桔梗かな……………一五八
- 〔二〇一〕 なでしこや一つ咲いては露のため……………一五八
- 〔二〇二〕 草花や行きよい門のいく所……………一五九

- 〔二〇三〕 弟子尼の鬼灯植ゑておきにけり……………一六〇
- 〔二〇四〕 鬼灯を取つてつぶすや背中の子……………一六一
- 〔二〇五〕 一念佛申すだけ敷く芒かな……………一六一
- 〔二〇六〕 名月の御覧の通りくづ家かな……………一六一
- 〔二〇七〕 名月や膳へ這ひよる子があらば……………一六二
- 〔二〇八〕 翌の夜の月を請合ふ爺かな……………一六三
- 〔二〇九〕 酒つきてしんの座につく月見かな……………一六三
- 〔二一〇〕 深川や蠣殻山の秋の月……………一六四
- 〔二一一〕 秋の雨小さき角力通りけり……………一六五
- 〔二一二〕 一二三四と籥よむ聲や秋の暮……………一六五
- 〔二一三〕 をさな子や笑ふにつけて秋の暮……………一六六
- 〔二一四〕 吉原やさはさりながら秋の暮……………一六七
- 〔二一五〕 近づきの樂書見えて秋の暮……………一六八
- 〔二一六〕 浅ましや熟柿をしやぶるていたらく……………一六九
- 〔二一七〕 うそ寒や蚯蚓の唄も一夜づゝ……………一七〇

- 〔二一八〕 のらくらが遊び加減の夜寒かな……………一七〇
- 〔二一九〕 小便所こゝと馬よぶ夜寒かな……………一七一
- 〔二二〇〕 影法師に恥ぢよ夜寒のむだ歩き……………一七二
- 〔二二一〕 啄木鳥の止めて聞くかよ夕木魚……………一七三
- 〔二二二〕 田の雁や里の人数はけふも減る……………一七三
- 〔二二三〕 今少し雁を聞くとて蒲團かな……………一七四
- 〔二二四〕 鴈の聲勘忍袋きたりな……………一七五
- 〔二二五〕 寒いぞよ軒の蛸唐がらし……………一七五
- 〔二二六〕 散る芒寒くなるのが目に見ゆる……………一七六
- 〔二二七〕 山島や蕎麥の白さもぞつとする……………一七七
- 〔二二八〕 稻かけし夜より小藪は月夜哉……………一七七
- 〔二二九〕 嫉捨はあれに候とかゝし哉……………一七八
- 〔二三〇〕 茸狩のから手で戻るさわぎ哉……………一七八
- 〔三三一〕 日本の外が濱まで落穂かな……………一八〇
- 〔三三二〕 旅人の垣植にはさむ落穂かな……………一八〇

- 〔三三三〕 菊園や歩きながらの小盃……………一八一
- 〔三三四〕 入道の大鉢巻で菊の花……………一八二
- 〔三三五〕 負け菊をひとり見直す夕かな……………一八三
- 〔三三六〕 夕飯や醤油かけても菊の花……………一八三
- 〔三三七〕 ゆで栗や胡坐上手な小さい子……………一八四

冬の部

- 〔三三八〕 やあしばらく蝉だまれ初時雨……………一八五
- 〔三三九〕 ぼた餅の來べき空なり初時雨……………一八六
- 〔三四〇〕 寐筵にさつと時雨の明り哉……………一八七
- 〔三四一〕 人のためしぐれておはす佛哉……………一八七
- 〔三四二〕 重箱の錢四五文や夕時雨……………一八八
- 〔三四三〕 蛤のつひのけぶりや夕時雨……………一八九
- 〔三四四〕 木がらしや折介歸る寒さ橋……………一九〇
- 〔三四五〕 木がらしやからよびされし按摩坊……………一九〇

- 〔二四六〕 霜枯や鍋の墨かく小傾城……………一九一
- 〔二四七〕 水仙や垣にゆひこむ筑波山……………一九二
- 〔二四八〕 猫の子のちよいとおさへる木の葉哉……………一九三
- 〔二四九〕 櫛の葉の朝から散るや豆腐桶……………一九三
- 〔二五〇〕 落葉して日向に酔ひし小僧かな……………一九四
- 〔二五一〕 落葉して三月頃の垣根かな……………一九五
- 〔二五二〕 蕪ひよろひよる神のお立ちげな……………一九五
- 〔二五三〕 茶畑を通して呉れる十夜哉……………一九六
- 〔二五四〕 手序に煙管みがくやお取越……………一九七
- 〔二五五〕 杉箸で火をはさみけり夷講……………一九七
- 〔二五六〕 冬の梅目もあてられぬ月夜なり……………一九八
- 〔二五七〕 寒月に立つや仁王のからつ脛……………一九九
- 〔二五八〕 門口に来て氷るなり三井の鐘……………二〇〇
- 〔二五九〕 冬籠その夜に聞くや山の雨……………二〇〇
- 〔二六〇〕 五十にして冬籠さへならぬなり……………二〇一

- 〔二六一〕 能なしは罪も又なし冬ごもり……………二〇一
- 〔二六二〕 掠鳥と人に呼ばるゝ寒さかな……………二〇三
- 〔二六三〕 次の間の灯で膳につく寒さ哉……………二〇三
- 〔二六四〕 ひいき目に見てさへ寒きそぶり哉……………二〇四
- 〔二六五〕 玉霰よたかは月に歸るめり……………二〇六
- 〔二六六〕 初雪や縁から落ちし上草履……………二〇七
- 〔二六七〕 闇の夜の初雪らしやぼんのくぼ……………二〇七
- 〔二六八〕 初雪のふりすてゝある家尻かな……………二〇八
- 〔二六九〕 初雪や鳥もかまはぬ女郎花……………二〇九
- 〔二七〇〕 心からしなのゝ雪に降られけり……………二〇九
- 〔二七一〕 うまさうな雪がふうはりくと……………二一〇
- 〔二七二〕 ほちやくと雪にくるまる在所哉……………二一一
- 〔二七三〕 ちとたらぬ僕や隣の雪もはく……………二一二
- 〔二七四〕 雪ちるやおどけも云へぬ信濃空……………二一二
- 〔二七五〕 雪ちるやきのふは見えぬ借家札……………二一三

〔二七六〕 彼はといふも當座ぞ雪佛……………二四

〔二七七〕 雪汗のかゝる地びたに和尚顔……………二五

〔二七八〕 〇これがまあ終の柄か雪五尺……………二六

〔二七九〕 衽なりに吹込む雪や枕もと……………二七

〔二八〇〕 眞直な小便穴や門の雪……………二七

〔二八一〕 村千鳥そつと申せばはつと立つ……………二八

〔二八二〕 飯の湯のうれしくなるや散るみぞれ……………二八

〔二八三〕 野は枯れて何ぞ喰ひたき庵かな……………二九

〔二八四〕 五六匹馬干しておく枯野哉……………三〇

〔二八五〕 朝晴にはち／＼炭のきげん哉……………三一

〔二八六〕 宵々を見へりもするか炭俵……………三一

〔二八七〕 酒五文つがせてまたぐ火鉢哉……………三三

〔二八八〕 焼穴の日に／＼ふえる紙子かな……………三三

〔二八九〕 〇大根引大根で道を教へけり……………三四

〔二九〇〕 鳴く雀その大根も今引くぞ……………三四

〔二九一〕 大根引く拍子にころり小僧かな……………三五

〔二九二〕 行く人を皿で招くや薬喰……………三六

〔二九三〕 ふぐ喰はぬ人には見せな富士の山……………三六

〔二九四〕 長閑さや煤はいた夜の小行燈……………三七

〔二九五〕 お仲間にも猫も坐とるや年忘れ……………三八

〔二九六〕 獨身や上野歩いて年忘れ……………二八

〔二九七〕 はづかしやまかり出てとる江戸の年……………三九

〔二九八〕 お袋がお福手ちぎる指南かな……………三〇

〔二九九〕 ぶつゝけて餅に書くなり何貫目……………三一

〔三〇〇〕 神の灯や餅を定木に餅を切る……………三一

〔三〇一〕 そのあとは子供の聲や鬼やらひ……………三一

〔三〇二〕 下戸の立つたる藏もなし年の暮……………三二

雑の部

〔三〇三〕 月花や四十九年の無駄歩き……………三五

〇

〔三〇四〕 おのづから頭が下るなり神路山……………三六

〔三〇五〕 松蔭に寐て喰ふ六十餘州哉……………三六

評釋句目次 をはり

一 茶 俳 句 新 釋

春の部



「目出度さも中位なり。おらが春（おらが春）」

「おらが春」の巻頭にある句で、この句に依ておのづから巻名を成したものであることは明かである。

一茶晩年の人生觀とも見るべきもので、彼の芭蕉が「この道や行く人なしに秋の暮」に於て、透徹した寂寞境を鋭い旋律に現して居るに反して、これは寧ろ穩かに、懶げに「人世はこんなものだ」と云つて居るやうな氣がする。この句は又おのづから彼の生涯を語つて居るものでもある。奥信濃の地に小農の子として生れた彼は、數奇な運命に導れて長い放浪の人となつた。それは、貧苦と憎みと僻みと醜い争鬭との連続であつたやうにさへ思はれる。そして、五十歳を過ぎてから漸く故郷に死所を

定め、妻も迎へて、やれ／＼と思ふ間もなく、出来る子も出来る子も死んで行つた。實際堪らない運命が彼の生涯を呪つて居た。然し、若しも彼の墳墓の苔を拂つて彼の生涯を讚美する者があれば勿論、反對に彼の不幸に深刻な同情の涙をそゞろ者があつたら、一茶は矢張り小首を傾けるであらう。總ての人達、殊に自己を脱することの出来ない吾々平凡人が、生涯の坂も大方登り盡した時に振返つて見る人生に對する感じ、それが取りも直さずこの句の心持ではないのだらうか。

この句には理想がない。答もない。理想もなく答もないのが一茶の生涯であつた。そして、悲しいことに「吾々も」と云ひたいのである。

○

〔二〕ぬ。か。る。み。へ。杖。つ。つ。ば。つ。て。初。日。哉。（句帳）

初日を拜すといふ動作が既にゆつたりとした新年の氣分を象徴して居る。杖張るほどの老人が、元旦に疾く起出て戸外に立つて初日を浴びて居る。老人の足許は凍解けか舊臘の雨かにぬかつて居る。この場合に於ける「ぬかるみ」は、杖つツばつてといふ語と共に老人の身體を支へる足許の重さと、老人の身體を滑つて匂ひこぼれる朝日の輝かしさを言外に叙すために、大切な役目を勤めて居る。

尤も、坐五を「初日哉」と押へてあることも感銘を深くするものではあるが。

晩年中風を病んだ一茶が家にあつての吟と、一通りは解して見たい句である。が、一茶の故郷は冬季積雪五六尺といふ信中第一の雪の名所である。正月にぬかるみなど見たくもない筈である。一體一茶の句には「我」とか「おら」とかいふ自我が濃く出て居るために、何でも彼でも彼自身のことらしく解したくなるのであるが、この句などは單なる寫生と見ても面白い句である。一茶の句に限らず、總て俳句を鑑賞する場合には、豫め主観句とか客観句とか鑑別してかゝることは鑑賞の世界を狭くするものである。主観に依らず客観に依らず、或る感興の頂點をスバリを切離して獨立させたやうなものが、俳句として勝れた作品であることを忘れてはならない。

○

〔三〕元。日。や。上。々。吉。の。淺。黄。空。（發句集）

一茶の句を一寸覗いて見る人にとつて、物珍しく、割合に受けられる句である。然し、上々吉も淺黄空も一茶としては珍しい用語ではなく、「元日や」と置いた上五も説明に過ぎて居て何等の新味を認められない。たゞ、この句は元日の晴れをよるこぶ氣持を素直に叙してあるために、其點、新味はな



い代りに、へんな誇張や持廻りの嫌味から済はれて居る。

〔四〕 名代みしろだいにわか水浴みづあびる鳥かな（おらが春）

「年男つとむべき候といふものもあらざれば」と、前書がある。若水は元日に波む初水の謂であるが、此所では、元日の朝門先の小流れで鳥が水を浴びて居たといふ位の景色に解してよい。

但、この句の原案と見るべきものが、その前年の七番日記の中に、「名代の寒水浴る雀かな」又「名代の若水浴る雀かな」とある。それに依ると、寒水を若水、雀を鳥とこね廻した跡が見えて興醒めて来る。然し、さういふ理由の下に吟味する段になると、数多い一茶の作品の大半は價値を失ふことになるのである。實際、言々琢磨といふやうな通り一遍の讃辭を以てするには、一茶は餘りに句作に執して居た。或る一つの感興を捉へると、それを飽くまでも追究して、こね廻し打直してもものにしようとして居る。或場合には作り替や、首や手足のすげ替へのやうなことまでやつて居る。この事は、一見無造作に見える一茶の作品に少しく深入りする者に取つて、第一に味はされる失望である。これは無論一茶の性格から來て居るが、然し、豫め一茶のために辯護して置きたいことは、彼の背景をなす

當時の社會相である。彼の稍々意を得た文化文政度は、徳川期の中でも文化の爛熟に達した時代で、デカダンスの空氣の濃く流れて居る時であつた。一方俳壇を振返つて見ると、芭蕉逝いて既に百餘年、蕪村等の天明調の勃興の後を承けて、天保以後の墮落時代に向ふ中間に位して居る。その間にあつて、何と云つても一茶は我が俳諧史から奪ふことの出来ない特色ある作品を残して居るのである。私達は暫く「寫生萬能」を吹込まれなかつた以前の頭に戻つて、季題趣味、空想の世界に遊んで見ることも、一茶の句作態度を善意に解釋するための一つの方法であると思ふ。

尤も、この一面に於て、一茶には勝れた寫生句があり、彼自ら推敲の餘地を見出し得なかつたであらうほど、緊切した主觀世界を打出した佳句も數多く残されてあることを斷つておく。

〔五〕 這へ笑へ二つになるぞ今朝けさからは（おらが春）

7 「去年の五月生れたる娘に一人前の雜煮膳を据ゑて」と前書があつて、文政二年正月の吟である。長い放浪生活を終へて妻を恵まれ子を恵まれた一茶が、どんなに子供を愛したか、殆ど老後の生命を子供を愛することに打込んで居たやうにも見える。殊に文政元年に生れたさと女は初めての女の子では

あり、それまでに生れた子供が何れも生れるそばから死んで了つたので、さと女に於て初めて子供の育つて行くほんとうの楽しさ、ほんとうの可愛さを味つたやうである。然し、そのさと女も間もなく早世した。

○ [六] 蓬萊ほうらいになんむなんむくくといふ子こかなかな (おらが春)

「蓬萊」は蓬萊飾りの儀で、作り方は一定しないが、三寶に米を盛つて、その上に海老、熨斗、昆布、橙、勝栗などを飾るもので、喰ふを目的でなく、新年の祝意を表するための飾り物である。

ばたくたくといふ程の子が物珍しげに蓬萊の方へ寄つて行かうとするのを、「いけませんよ。ののさまですよ。」といふ風にたしなめると、子供も常とは様子の變つた式物に何やら敬虔の念を感じて、可愛い手を合せて南無々々と拜をする。さうした可憐な動作を叙したものであるが、一體日本の俗で、正月には佛臭い言葉なり動作なりを忌むものである。それを、大人が縁起をかついで飾り立てた蓬萊に向つて、子供は佛壇の前と同じやうに南無々々とやつて居る。其處に一種のアイロニーを感じたものと見るのも一種の解し方であらう。

○ [七] 書き賃かきぢんのみかんみかんみいみいくく吉書きちしょかなかな (句帳)

吉書は正月二日の書初めのこと。

「さあさ早く書きな、書いたらこれをやるよ。」と、大きな蜜柑を見せびらかしながら、騙しつ賺しつ、皆して手を取らぬばかりに、字配りにまで世話を焼いて、年齢相應の目出度い文字を書かせやうとする。食氣くひけと活動の權化のやうな子供は、家内中の監視の中に尻をもちくくさせながら筆を取りながらも、心は其處にない。一點一畫書く毎に眼は賭物の蜜柑の方に引張られて居るのである。中七の「みかんみいみいくく」に情景が活躍して居る。

いかにも寺小屋時代の芥子坊主の面影が彷彿とする。今の子供ならば、蜜柑位で容易に自我を曲げることをしてないだらうし、若しかすると書き賃を先に貰ふことを交渉するかも知れない。

○ [八] 逃にげしなしなや水祝みづいほはるはるいい五十いそ掣しやく (發句集)

「逃しな」のしなは「立ちしな」や「起きしな」と同様に、逃げる拍子にといふ程の意。

水祝は、新年早々、前の年嫁を買った男のところへ行つて水を浴せることで、押かけて來られるばかりではなく、新郎が年始廻りの先々などでも水をかけられる習慣があつたやうである。元來水をぶつかけるのが目的ではなく、他町村から新に入籍した者に水の所有權を與へるといふことに起因したもので、それが何時か變つて、元祿頃には嫁を買った男だけのことになつて了つたのださうである。

五十掣といふ言葉は、既に順當ならぬ人間の運命を暗示して居る。ある傷しさとくすぐつた、さを感じさせられる語である。一茶の履歴に照して、この句は彼自らのことらしく、事實左様解されて居るのである。それにしても少し平調過ぎると思ふが、然し、彼の晩年の氣恥しい記録と見ておく方が、先づ穩當であらう。「逃しな」といふ語が「五十掣」といふ言葉と相應して、特に恐縮した心持を現して居る。

〔九〕 垢爪あかづめや齋いっさの前まへもはづかはしきき (七番日記)

「人日」と前書がある。人日は正月七日のことである。

一茶自筆の日記などを見ると、驚くほど緻密な几帳面な性格が窺へるが、反對に、服装や居所については極端に無頓着な、否不精であつたらしい一茶のことであるから、定めて爪も延び次第、垢も溜つて居たことであらう。垢爪とあるので、摘みつゝある齋か、或は節供に調へられてある齋を物珍しさに一寸つまんで見ようとでもした利那の感じ、といふ風に一應は解せられるが、それにしては全體が平調で、端的の感じが無い。この句意は寧ろ、七種粥を祝ふ人日の改つた氣分の中にそぐはない、自分自身のむさくるしい姿に肩身狭く感じたものと見るべきで、さう解する時に初めて「人日」といふ前書がはつきりと生きて來る。此所のもは、齋いの前まへにも何なににも彼かれにもといふやうな意が含まれて居る。特に垢爪と齋を摘出して印象的な對照を見せたところは作者の手腕であり、才氣が利いて居る。

〔一〇〕 手拭てぬぐいで引ひかかつついいだだるる若菜わかしなかな (句帳)

若菜は正月七日に用ゐる七種の類を云ふ。

春淺い野に、節物の若菜を摘みに出た。都の人のするやうに籠等の用意があるでもなく、摘み溜めた草を有合せた手拭の端に引包んで、其儘布子半纏の肩にヒョイと打かけて、すたくと畦道を歸つ

て行く。早春田園の質朴な情景が寫されて居る。「引かついだる」と、やゝ誇張した言廻しも嫌味でなく、一脈の滑稽味がこの句に軽い味を持たせて居る。一茶の特色の出た佳句と思ふ。

○  
〔一一〕 鳴く。猫に。赤ン。目をして。手まり哉。(發句集)

猫はお腹がへつて居るのだらう。ニヤゴ／＼と鳴立てながら、脊を圓くして陽の當つて居る縁の障子の腰に摺り付いて見たり、よろけかゝるやうに子供の袂に絡りついたりして食物を求めぬ。然し子供は一向に構はない。何かまり吠を呟ひながらトン／＼トン／＼手毬をはづませて居る。猫は頻りと鳴續ける。餘りうるさいので、子供は一寸手を止めて猫の方を向いて、いたづらげにチョイと赤ン目をして見せて、又トン／＼つき續ける。

子供の世界に入込んで居る作者の罪のない微笑が感ぜられる。描寫は手に入つたものである。

○  
〔一二〕 門々の。下駄の。泥より。春立ちぬ。(七番日記)

「春が來た春が來た何處に來た。山に來た里に來た野にも來た。」この唄の持つ心の歡びを直ちに足許に移したやうなのが、この句の趣きである。

齊を云はず、霞を云はず、下駄の泥を見付けたところは流石に一茶である。何と云つても寒が明けると時候もゆるんで來て、今まで凍て閉ざれて居た大地もじめ／＼して來て、おのづから人の出入も繁くなつた門々の溝板や敷居や、言合せたやうに黒ツぽい下駄の泥でよごされて居る。然し、そのよごれも不快ではなく、やうやく長い冬から開放されかゝつた人の眼に或る微妙な楽しさを咬る、賑かな感じを與へるのである。郊外生活者の早春の歡び、といふやうなものがこの句の中に盛られてゐる。

「下駄の泥より春立ちぬ」と斷定的に云つたところは、一茶獨特の力強い表現法であり、自我が根張つて居る。

○  
〔一三〕 柵に。ちよつと。春立つ。月夜かな。(七番日記)

「年内立春」と前書がある。年内立春と云へば直ぐ古今集貫之の歌「年のうちに春は來にけり」とと

せをこそとやいはむことしとやいはむ」と、あれを思ひ出すのであるが、一樣に詩として見る時には、この句の方が遙に理窟を離れて實感を出して居る。

未だ冬の間でも、どうかすると水蒸氣の多いコッソリとした晩、夢のやうな朧月の照ることを私達はこの句から想起するであらう。實際は未だ師走の慌しさの中にありながらも、今宵は節分の豆撒き終へて、何處やら長閑に納つた門々の、さし柵には月さへ射して居る。其處にはほんの通りすがりながら、暫く、瑞々しい春の氣が和んで居るのである。

〔一四〕 今春が来た様子なりたばこ盆 (句帳)

立春の句である。

「せばくともお宿申さん今朝の春」といふ貞徳の句があるが、これは又、現に春様がおいでになつたといふのだから面白い。狭い家の中でも小綺麗に掃出して、よく掃除した煙草盆を、客待ち顔に座敷の真ん中にキチンと直してある様などが、眼に見えるではないか。春の建音——若しそんなものがあるならば、作者はそれに凝と聽入りつゝ、ふと眼を上げた瞬間に捕へた光景らしく思はれる。會心の

作であらう。

〔一五〕 大聲や廿日過ぎての御萬歳 (七番日記)

「へらへえ」と、風折烏帽子に大紋の直垂を着て門々を訪れて来る萬歳も、門松に對してこそふさはしいものである。それが、正月も廿日過ぎて世の中は次第に常態に復しつゝある時、然も遊び疲れの倦怠さへ添はる沈滞した空氣の中に、突拍子もなく大きな聲を出して鼓を打つて来る萬歳の不調和な滑稽さ。それを感じることに出来ない人には、この句の解釋は難しいのである。

〔一六〕 門前や杖でつくりし雪解川 (發句集)

必ずしも雪國でなくとも、「雪解」は春らしいよろこびを齎す言葉である。

15 庇の点滴にきら／＼しい日が輝いて、門先の積雪は刻々に消えて行く。飽和し切つた地面は一面にぶよ／＼として、雪解の水が行き場に迷つて居る。それを一寸杖の先で按排してやると、直ぐと可憐

な小流れが出来上るのである。さうした戯れにも似た事象の中に、私達は何となく自然の懷ろに抱かれる和やかさを感じることが出来る。萬心は是れ一心。一心は是れ萬法。といふやうなむつかしい理窟は後廻しとしても、兎に角氣持がいい。傷しいほど人事にかまけて了つた作者も、斯んな小さなところに、ホツとした休息を持つたらうと思はれるやうな作である。

○

〔一七〕 鍋の尻干しならべたる雪解かな (發句集)

この雪解は、前句と違つてほんとうの雪解川のことである。雪解で水嵩の増した流れで鍋を洗つて、流れのほとりにすらりと干し並べてある様である。家居に近く水の流れる山近い宿場の景色などが想像される。長い間虫けらのやうに引籠つて居た人達も、雪解の頃になると漸く身體ものびくとして來て、今まで煤け次第に放つておいた鍋などもはづして綺麗に洗つて見たくなる。その氣分。その景色。季節と密接な交渉を持つ人間生活を、僅に「雪解」と「鍋の尻」を配して能辯に物語つて居る。新たに句作に志す人などには屈竟な参考であると思ふ。

この句の初案と見るべきものに「十ばかり鍋うつむける雪解かな」といふのがある。比較して見る

# 欠

# 欠

一茶の想像の中に描かれた作畫といふことになる。然し、私達は暫く、この句を與へられたる一枚の繪として軽く見過しておかう。

○

〔二一〕 島打や手涕をねぢる梅の花 (旅日記)

「手鼻かむ音さへ梅のさかり哉」といふ芭蕉の句がある。比較して見ると、品格に於て格段の差のあることは致し方ないが、彼が冥想で行くところを、これは又飽くまでもきびくした寫實で行つて居るところに、おのづから一茶は一茶としての持場がある。

この句を敬文的に解すると、島を打つ人が、手涕をかむ時手にくつつけた涕を傍らの梅の花にねぢり着けるといふ、頗る穢い句意にも取れるが、さうではないと思ふ。「ねぢる」は「ねぢかむ」とでも譯したらよからう。ねぢると梅の花との間には、休止を置いて讀むべきである。畑打の鉞を片手に休ませながら、身體を少し前のめりにさせて、片方の腕をヒョイとねぢ上げて指先でチンとやる。あの恰好が奇妙に「ねぢる」といふ語に彷彿とする。そして、傍らの畔には梅の花が咲いて居たといふ、極くあり觸れた田家の小景を捉へたものである。

「畑打や」と、句切れにして、又「ねぢる」と切つてボンとやり放して、「梅の花」と名詞止にしてある叙法は可なり大膽だと思ふ。

○  
〔三三〕月。の。梅。の。酔。の。こ。ん。に。や。く。の。と。今。日。も。過。ぎ。ぬ。(發句集)

「酔のこんにやくの」といふ地口の語源を知らないが、普通「酔のこんにやくのと面倒なことばかり云つて居る」といふ風に使はれて居る。

月が覗き出た。圓くなつた。梅が咲いた。月が缺けた。何の彼のと、眼前のことにかゝづらつて居る間に今日も又一日過ぎて了つたと、作者は煩しいかゝづらひを月と梅とに托して、淡い疲れの中に一脈の哀愁を含んだ懶さを訴へて居る。季節は舊曆二月梅見月、二月と云へば、新舊共に、一年中でも最も倦怠に満ちた月頃である。それは、人事の方面から云へば、華やいだ正月氣分の反動であり、自然の方面から云へば、二月は來るべき陽春の準備のために大地は慎しやかな緘黙を守つて居るやうな時であるからだと思ふ。

何しろ、「酔のこんにやくの」といふやうな地口を使つて、これだけの氣分を出して居ることは、滅

多に他の追隨を許さぬ點である。

○  
〔三三〕梅。の。花。こ。ゝ。を。盜。め。と。さ。す。月。か。(おらが春)

梅の花と、一度句切つて讀むべきで、「梅の花のこゝを盜めとてさす月か」の意である。

さゝやかな垣などから乗出して居る梅の花に、ほんのりと月が射して居る。恰度手折るに頃合な枝ぶりであり場所柄でもある。「はゝあお月様。こゝの所を盜めとの粹か。」と、ふいとこぼれた獨り笑みが其儘句になつて居る。ぶらりと散歩に出た折の屋敷町の風情でもあらうか。いかにも人事に即した詩人の即興らしく思はれる。

○  
〔三四〕鶯。や。泥。足。ぬ。ぐ。ふ。梅。の。花。(七番日記)

中七の「泥足ぬぐふ」が突込み過ぎて居て嫌だと思ふ。然しながら、緑褐色の鶯が梅の花を踏んで枝から枝へと身輕に飛移りながら、折々足を摺り合すやうにする可憐な身振りが、「ぬぐふ」といふ語



に實によく寫されて居る。梅の花で泥足ぬぐふといふ思付も俗で嫌だが……兎に角詩として價值を認められないまでも、描寫の奇智に富む點に於て一概には捨て兼ねる作である。

○  
〔二五〕鶯にあてがつておく垣根かな（七番日記）

類句と見るべきものに「鶯の馳走に掃きし垣根かな」鶯のあてにして來る垣根かな」等がある。然し、三つの中では「あてがつておく」が放膽でいゝと思ふ。垣に來て頻りに鳴く鶯を聞きながら「お前はお前で勝手に啼きな」といふ風に、ゴロリと肘枕でもして居るらしい一茶の不精さが思はれる。強ひて云へば、作者と鶯との無關心な交渉ともいふべきものがこの句をふつくりと肉附けて、前出の二句に見る如き理に落ることから濟つて居る。

○  
〔二六〕銚の柄に鶯なくや小梅村（發句集）

竹眞の十二月の短冊の繪でも見るやうである。一寸した見つけ所と云ふまでで、大したものでは

ない。たゞ私達は今の小梅町邊が小梅村と呼ばれて居た昔の閑寂さを思ひ遣るよすがとして、この句に特殊の親しさを感じるのである。だが、同じ人の「銚の柄に鶯なくや梅が窪」とあるのを見ると、さうした興の半ばは失はれて了ふ。これは何れが先に詠まれたものとも判らない。

そして、云ひたくないことであるが、小梅村と云ひ梅が窪と云ひ、梅に鶯といふ陳腐な取合せの頭に殘るのも残念だ。

○  
〔二七〕犬の子の踏まへて眠る柳かな（發句集）

いたづら者の狗が、長々と地上に垂れ下つて居る柳の枝にさんぐじやれついで狂ひ廻つた果に、くたびれ込んで柳を踏んまへたまゝぐつすと寢込んで了つた。穩かな寢息を包む初々しい毛並に生ぬるい微風が通つて、そこらに小蝶なども飛んで居ることであらう。取材が取材だけに誰も惹付けられる作である。

この句は七番日記にある「犬の子の唾へて寢たる柳かな」の再案であるが、狗が柳を唾へて寢て居たといふ小さな見付け處から今一段感じを（内面的に）深めて「踏まへて眠る」といふ叙述に依つて、

悠々たる春日の雰圍氣を出して居る。これなどは總ての詩作家に取つて、よく／＼玩味してよい叙法用語の洗煉の一例であらうと思ふ。この二つの句を舌の上に乗せて見た感じ、讀後の感じの硬軟も味ふべきである。

○

〔二八〕 けろりくわんとして鴉と柳かな (發句集)

「けろりくわん」は、けろ／＼としてきよんとして居ると云つたやうな、周圍若しくは對象と無關心な状態を示した語である。ふつさりと垂れ下つた緑の柳と、剽悍な顔付をした眞黒々の鴉(この鴉が柳に止つて居るか、地上或は屋根等に止つて居るか、何れとして見るも勝手だ)との妙にそぐはない對照に於て、然もこの靜と動との間に七分三分の兼合と云つたやうな引かゝりを見付け出して居ることがこの句の生命である。その引かゝりがふいと切れたら、それこそ空々寂々な世の中が残されさうに思はれる。それほど作者の感覺はこの二つの對象に向つて集中されて居るのである。

扱、詮索立ては好ましくないが、この句にも「けろりくわんとして雁と柳かな」といふ類句がある。恐らくこれが作者の實見なのであらうが、若水の句の場合に於ける雀と鴉との如く、雁よりも一層印

象の鮮かな鴉を持つて來て、作者の頭の中で對照させたものであらう。然し、それだからと云つて、この句の場合などには作者の實感でないとは言切れないのである。ついでに、この句を芭蕉の「枯枝に鴉のとまりけり秋の暮」といふ澁い句と比較して鑑賞して見るのも面白い。おのづから兩者の間の特異な行き方を會得する便宜ともならう。

○

〔二九〕 柳からもゝんぐあゝと出る子哉 (おらが春)

髪をぶつ裂いて、両手でお化けをして「もゝんぐわあゝ化けえ」とやる。尤も現今の子供はそんな古臭い眞似をしないが。

この句は一茶の特色とする子供の世界を叙してある以外に、背景をなす柳のこんもりとした姿の出で居ることが手柄である。斯んな造作なさうな句であるが、この句も初案「もゝんぐあゝと出る子哉」とあつて、相當に苦心した跡が見える。一代に何萬といふほど句を吐いた一茶だが、所謂彼の持句とするまでには、何れにも嚴密な洗煉の篩がかけられて居るのである。

○

〔三〇〕ほくくくと霞んで来るはどなたかな（二代全集）

時と距離とに遠近の差はあるが、これと同じ場所らしい句に「誰それと知れて霞むや門の原」といふがある。この方がハッキリと場所を示して居て、理智的の説明が勝つて居る。然し私は「どなたかな」の方にもつと広い背景と、全體としての潤ひがあると思ふ。門島でも打つて居る人が、ふと鉄の手を止めて、遙の畦道を此方に向つて歩いて来る着服れた人の姿をほんやりと眺めてども居るらしい春景色が想像される。

上五「ほくく」とは、一句の中心點をなす人物の姿態、特に歩き振りを如實に描き出して、同時に、兎もすれば散漫にならうとする一句の感じを確りと纏めて居る。中七の「霞んで来る」も、巧いものだと思ふ。全體にふつくと丸味を持つた佳句だ。

〔三一〕けふもく霞んで暮す小家かな（發句集）

前句と主客を轉倒させたやうな句である。

「今日もく」は、殊に眼につく一茶の慣用語である。

今日もく鳥の番なり角力好

今日もく秋雨すなり片山家

今日もく凧引かゝる榎かな

今日もく絲引すつて蜻蛉哉

今日もく竹見る火桶哉

一寸思ひ出すだけでもこの位ある。

然し「霞んで暮す小家かな」が前出の數句に勝つて居る點は、「今日もく」といふ重語が、おのづから、單調な安穩な生活のリズムと一致して居る點にある。其處には、いかにも小さい、然も悠久な人間のいとなみが倦むことなく繰返されて居るのだ。昨日も今日も、今日も明日も、明日もあさつてもといふやうな悠々とした氣分が一句を貫いて居る。

然し、この句から受ける直接の印象は、家も人も、人の動作までもボツと霞んだ、胡粉繪を見るやうなおぼろさである。

〔三三〕 迹<sup>を</sup>供<sup>は</sup>霞<sup>引</sup>き<sup>けり</sup>加<sup>賀</sup>守<sup>（句帳）</sup>

迹<sup>を</sup>供<sup>は</sup>には霞<sup>引</sup>き<sup>けり</sup>の意である。

今更に大名行列の仰山さを喋々するでもないが、先づ先拂ひの警蹕に續いて、先箱、先鎗、鐵砲、弓、牽馬、具足、徒士、籠、徒士、臺傘、立傘、鎗、調度、といふやうな順序に並んで、數百人の人數で長さは堂々數丁に及ぶ。然し、籠迹になるに従つて儀衛の尊嚴は崩れて、最後の合羽籠、雨具、荷物の人足共などは、列を亂して氣任せに歩いて居たものであらう。

路傍に跪いて行列を拜する人達の前を、お籠は通り過ぎて了つても、未だ迹供の衆は遙か後方にあつて、薄くかすみかゝる中に、赤く塗られた合羽籠や荷物の桐油紙などがチラ／＼して居る様である。一茶の郷里信州柏原驛は、昔時加賀侯參觀交代の通路に當つて居たから、斯ういふ景色も目なれたものであつたらう。この外「梅鉢の大提灯や霞から」などもある。

句の出來榮えは兎に角、風俗詩として特殊の價值がある。

〔三三〕 笠<sup>で</sup>ず<sup>る</sup>さ<sup>ら</sup>ば<sup>く</sup>や<sup>う</sup>す<sup>霞</sup>（後句集）

「輕井澤」と前書がある。

今はあの邊を隧道で越して了ふので、昔の跡を辿つて見ることは一寸憶劫だが、春淺い頃、朽葉色の山肌 芽出しの雜木が薄小豆色に霞んで、水淺黄の天に連つて居る景色を汽車の窓から覗いて見ただけでも、その疎らな木の間越しに、峠の上で笠を振つて別れを惜しんで居る旅人の姿を容易に想起することが出来る。別離と云つても、いかにも春先らしい長閑な氣分が漂つて居る。

この句などは前書があつて活きる句で、若し前書がなくて、平地の景色にでも解して了へば、わざとらしいつまらない句になつて了ふ。

〔三四〕 霞<sup>み</sup>行<sup>く</sup>や<sup>二</sup>親<sup>持</sup>ち<sup>し</sup>小<sup>す</sup>げ<sup>笠</sup>（旅日記）

文化元年三月、即ち江戸放浪時代の吟である。「中村二竹古郷に赴けば、本郷追分までおくる」と、前書がある。二竹はどういふ人であつたか今調査が届いて居ないが、文化元年から五年へかけての日

記の中に、屢々二竹の名が見える。「二竹來ル」とか、「二竹と淺草觀音に籠る」とか。そして、同じ元年の八月の句には「二竹しなのへかへる」と前書してあるから、無論同郷の人であつたと思ふ。小すげ等とあるので一寸少年らしくも思はれるが、小は元來美稱であるし、殊に一茶は頻りと小の字を使ひたがつたから、これは重く見なくてよい。兎に角一茶とは特殊の親しみのあつた人で、故郷には未だ二親の待つて居る人であつたのだらう。

國に行かんとして心すゝますと書いて居る一茶。「故郷やよるもさはるも茨の花」と詠んで居る一茶が、自分の身に引替へて、いそぐと故郷をさして行くやうな人の後姿を遙かに見送りながら、美みと、寂寥と、郷土に對する深い愛執との疊まり合つて來る氣持が、前書と相俟つて、「二親持ちし」といふ語に可なり露骨に表示されて居る。

上五「霞み行くや」の字餘りも、この場合意を強めることに役立つて居る。

○  
〔三五〕霞む日や夕山かけの飴の笛（旅日記）

道具澤山の句であるが、然し取集めの道具ではなく、捕ふべきところは確りと捕へて、春の夕暮の

氣分は十分に出て居る。

この句を吟誦して居ると、何とはなしに、櫻散る伊豆半島あたりの靜かに懶い夕暮に、ひた／＼と温泉に浸りながら味つた甘い悲しみのやうなものが回想されて來る。だが、一茶の句として特に云々するがほどのものはないと思ふ。

○  
〔三六〕霞む日やしんかんとして大座敷（おらが春）

「霞む日や」と、上五を概念で覆うて、扱て又立戻つて來て、概念の中にしみ／＼と浸り込んで居るやうな作である。甘い潤ひを含んだ寂しさ。靜けさ。……大寺と見るも大家の廣間と見るも問題ではない。作者の捉へて居るものは、氣も遠くなるばかりの春の晝の靜けさである。

此所まで來ると、一茶も或所に行着いて居る、無形のものも捕へ得て居るといふ感じを深くする。生涯を自然と旅に任せて居たやうな漂泊の詩人芭蕉も、人事にかまけ世路難に惑ひながらも一意に俳道に執して居た一茶も、期せずして一つ流れに合して、此所で一寸顔を合せて居るやうな氣がする。前の「夕山かけ」の句などと比較して鑑賞して貰ひたい。其處には、作者を圓熟の境に導くための、

可なり長い年月の流れの跡を感じさせられるであらう。

○  
〔三七〕 我里は どう霞んでもいびつなり (七番日記)

一茶の郷里信州柏原は、昔時の北國往還を挟んだ一小邑である。従つて、町並は細長く、南北にゆがんで居る。昔は中山八宿(牟禮より越後新井に至る八宿。即、牟禮、柏原、野尻、關川、二俣、關山、二本木、新井)の一として、加賀侯參観更替の折の宿營本陣所在地ではあり、貨物の集散繁く、般賑を極めたもので、北國文華を誇つた土地である。町はづれにある諏訪神社には常設舞臺がかゝつて居たほどで、雅客文人等の常時逗留するものも多かつた。それ等は總て多感の子一茶を無形に刺戟して、後年の彼の運命に大きな影響を與へたことは勿論である。

今は寂れた一小驛に過ぎない。たゞ昔ながらに雪深い黒姫妙高飯綱の三山が西に聳えて、くすんだ家並の中央を貫く細流の端の美事な松が枝が昔を語つて居るばかりである。

○  
〔三八〕 とく霞めとくく霞め放ち鳥 (おらが春)

籠飼の鳥か、捕へた鳥か、乃至は供養のための放鳥か、何れにしても放つてやるからには、又人に捕へられたくないと思ふのが人情である。「早く飛べ早く飛べ。早く霞んで了へ早く霞んで了へ。」と、鳥の行衛と共に願望の引摺られて行く思ひが、得意の重語に依つて、時間的經過を以て現はされて居ることがこの句の特色である。

高くく、遙かに霞みかゝる碧空に豆ほどになつて消えて行く小鳥の姿。その小鳥の姿が、現に眼界を刻々遠のきつゝあるかの如くに印象させる。巧みといふよりも、情愛の溢れた作である。

○  
〔三九〕 猫の子や秤にかゝりつゝじやれる (おらが春)

猫の子が親の乳を離れて他所へ貰はれて行くのは、大てい生後六十日目位で、二百五十匁ほどある。それから半月に三十匁、五十匁、百匁といふ風にめきくと肥えて行つて、約五ヶ月を経て五百匁ほどになる間が一番可愛らしい。その間、時々秤にかけて見るのは楽しみなものである。然し、いたづ

ら盛りの猫さんを秤つて見るのは容易なものでない。うまく秤の皿に乗つて呉れたかと思ふと、分銅にちよつかいを出して轉げ落ちる。秤の紐に絡み着く。うつかりして居ると秤棹を釣して居る腕を引搔かれたり、喰ひつかれたりする。

さうした情景を、極めて平明に叙してある。然し、この平明な表現に行くまでには、長い修練の時を経て居ることは、「桃の門猫を秤にかけるといふ類句のあることでも分る。それから殆ど十數年も経て、やうやくこの平坦な、然しながら的確な掴み方の出来る境地に達して居るのである。

〔四〇〕 小男鹿よ手拭貸さん角の跡（發句集）

七番日記には「小男鹿に」とある。

前の猫の子の句よりも數年前、一茶の脂の乗つて居た時代の作である。春の末から夏にかけて、成長し盡した鹿の角は自ら落ちる。そして、跡には瘤のやうな二つの隆起を残すばかりの、間の抜けた、恥しげな男鹿の姿を云つたものである。

私はこの句を非常に面白いと思つて居た時代があつた。事實このおどけと、愛情さへ含んだ奇想は、

誰にでもよろこばれさうな作である。作者自身も、少くともこの句の出来た當座は餘程得意として居たものらしく、圖に乗つて、同時頃の作に「化けるなら手拭かさん猫の戀」といふのがあつた。

然し、私は今は斯ういふ句を餘りよいとは思へなくなつた。要するに作り物であるやうな氣がする。嫌とは言切れないまでも、私はたゞ作者の奇想に對して軽い微笑を以て應へることに止めておかう。

〔四一〕 か。し。ま。し。や。江。戸。見。た。雁。の。歸。り。や。う。（七番日記）

前書に「板橋」とある。

板橋は昔から遊女屋などもあつて相當に賑つた宿であつたらしいが、云ふまでもなく彼處は江戸のはづれである。彼處まで來ると、江戸に入る人も江戸を出た人も、江戸といふものが一つの概念となつて浮んで來るやうな土地である。その板橋にあつて、今江戸の方から北を指して遙々と野を越えて歸る雁の鳴連れて行くのを見送る時、恰も雁共が江戸の話語り合つてゝも行くかのやうに感ぜられるのは、平常から動物に對して特殊の親しみを持つ一茶ならずともである。野に墾した宿場の何處やら鄙びた家並に、旅人と歸雁をあしらつた道中圖會の景色なども思ひ浮べられる。

旅日記に「行くはく江戸見た雁か見た雁か」とあるのが原案らしくも思はれるが、比較して見ると、單に技巧の點ばかりではなく、作句態度に著しく潤ひと落着きが加つて居る。

○  
〔四二〕 五百崎や御舟をがんで歸る雁 (發句集)

前書に「閏二月二十九日といふ日、雨も漸おこたりければ、朝とく頭陀袋首にかけて、足ついで例の角田堤にかゝる。東はほのくしらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに上のならせ給ふにや、川のおもてに天地丸赤々とうかめて、田中は新に道を作り、みぞ堀はことく板をわたして、おのく御遊を待つと見えたり。誠に無心の草木に至る迄、春風に伏しつゝ、めでたき御代をあふぐとぞ覺え侍る」とある。

五百崎は今の向島の古名である。上は無論將軍家を指したもので、折柄歸雁の季節であつた。身邊のことにひどく不平家で拗者であつた一茶も、決して大きな不平家ではなく、寧ろ時代に順應した一個の良民、若しくは遊民であつたことが、この一文に依つても頷かれやう。

○  
〔四三〕 慈悲すれば糞をするなり雀の子 (發句集)

一茶のふくれた顔を想起せしめる。一茶はよく向ッ腹を立てた——それは彼の臆病のために多くの場合内發に終つた——その痼癪は屢々作品の上に投げられて居る。世の中は要するに慈悲すれば糞をする雀の子である。然し、それを一段と高いところに立つて見下すことの出来る一茶ではなかつた。それをするには、一茶は餘りに狹量であり正直であり、情熱家でさへあつた。この句も決して諧謔の意味でうたはれて居るのでないことは、この愛嬌のない投付けたやうな調子が證明して居る。然し相手が雀の子であれば、これ以上突かゝり場もなかつたのである。

○  
〔四四〕 雀の子そこのけくお馬が通る (おらが眷)

子供や小動物に對して深い同情を見せて居るのが一茶の作品の一特色であることは、既に知らるゝ如くである。子供や小動物に對する時、初めて警戒を解いて、安心して對象に解け込んで居るやうに見える。従つてそれ等の句の中に秀逸が多い。この句は、畦道などに雀の子が三々五々下り立つて居



る中を、馬曳いて行く人の親しげな氣持。或は、傍觀して居る人の稍々はら／＼した氣持が感ぜられる。ひとりでに聲の上に轉び出たかと思はれるほど圓熟した調子のよい句である。雀の子に對してお馬といふ言葉もふさはしく、可愛らしい。

〔四五〕 我と來て遊べや親のない雀（おらが春）

一茶六歳の折の口吟として有名な句である。現に「おらが春」の中に

親のない子はどこでも知れる、爪を唾へて門に立つ。と子供らに唄はるゝも心細く、大かたの人交りもせずして、うらの島に木萱など積みたる片陰に踊りて長の日を暮しぬ。我身ながらも哀なりけり。

我と來て遊べや親のない雀

六歳 彌太郎

と白書して居る。

然し、私が彼の郷里を訪ふた際に、土地の一研究家の口づから、「おらが春」と殆ど體裁を同じくする同じ文政二年自筆の若水帳の中に、「六歳の頃を思ひ出て」と記されてあるといふことを注意された

のであつた。それで、一茶遺墨の寫眞帖に幸ひその條があつたので、非常に注意して見ると、確に「六歳の頃を思ひ出て」或は「忍びて」と讀み得る文字を見出し得たのであつた。それにしては特に彌太郎と署名してあることは意を得ないが。とにかく六歳の口吟といふことは怪しくなつた譯である。

で、このことの眞偽の斷定は今暫く置くとして、今は私一個の意見を述べさせて貰ふことにする。私は一茶が六歳にしてこの吟があつたとしても、それはあり得ることとして必ずしも不審とはしない。然し、文事に縁の遠い百姓（尤も彼の父親の辭世といふものが傳へられては居るが）の子として、いかに後年勝れた天分を發揮し得た人としても、これは事實でない方が、より自然に思はれるのである。それに、かの鬼貫が八歳の吟と傳へられる「來い／＼と呼べど螢が飛んで行く」の頗る童謡風であるに比して、一茶のこれはひどく老成なせて居ると思ふ。

若水帳の原本を見ないので斷言することは憚られるが、殆ど同じ體裁と云つても、私はどうも若水帳の方が「おらが春」の草稿であるらしく思はれるのである。それで、氣儘に筆を取つて居るうちに幼時のことを思ひ出て、その頃の氣持ちになつて一句ものして、特に昔懐しく彌太郎と署名したものとと思はれる。それを更に「おらが春」に轉寫する際に、作者の心を掠めた誘惑のために、故意に「の頃を思ひ出て」或は「忍びて」を削除したものではなかつたらうか。それは、晩年に及んで彼の名が

相當全國的となるに従つて、彼も亦彼自らの生立を一寸ばかり飾つて見たくはなかつたか。若し左様だとしたら、それは寧ろ涙のこぼれるほどか弱い人間性の發露であると云ひたい。その程度の色氣なれば充分持合せて居た一茶であつた。

私はたゞそんな風に考へられるのである。然し、このことについては猶大方の研究家の意見に俟ちたいと思ふ。

○

〔四六〕 夕<sup>ゆふ</sup>燕<sup>つばめ</sup>我<sup>われ</sup>には翌<sup>あす</sup>日<sup>ひ</sup>のあてはなき (旅日記)

これはウソではあるまい。江戸住の殊に窮迫して居た時代の吟である。弟子と名のつく僅少の人達の稀な仕送りと、行脚に出た折に貰ひ溜めたわらし錢でも小遣として居たやうな一茶には、翌日のあての全くないやうなことも珍しくなかつたらう。その頃の日記を見ると、本所五ツ目に住んで居た一茶が、へつた腹を抱へて淺草藏前の隨齋(夏目成美)の臺所まで朝飯を食べに行つたと思はれるやうな記事も散見して居る。

明朝起きて腹をこしらへるあてもない呆然とした心の前に、夕燕が忙しさに出つ入りつ活動して

居る様をうつとりと眺めながら、作者は燕に對して稍々羨しさをさへ感じて居る。嘉永版發句集には、坐五「あてもなし」となつて居るが、私はやはり江戸日記にあるまゝを採用したい。「あてはなき」の方が、頼りなく思ひ迫つた氣持が出て居る。

○

〔四七〕 横<sup>よこ</sup>乘<sup>り</sup>の馬<sup>うま</sup>のつゞくや夕<sup>ゆふ</sup>雲<sup>ぐも</sup>雀<sup>すずめ</sup> (おらが春)

春の農事に馬を使用するのは、多く田をおこすことゝ、田に水が入つてから代<sup>しろ</sup>かく時にも使はれるさうである。一日の耕作に疲れて、然し快い労働のあとのゆつたりした氣持で、農夫達が裸馬に横乗りして三々伍々家路を指して行く。道のほとりの麥畑には、塙をとゝのへる雲雀が姦しく鳴連れ飛交うて居る。落方の陽は長閑に馬上の人の頬被りを染めて居ることであらう。「つゞくや」とあるので、場所の廣さを想像させる。遠く秩父甲信の連山に圍れる武藏野か、善光寺平<sup>たかみ</sup>でもあらうか。晩年に入るに従つて、取材も調子も次第に街氣を離れて、斯うした穩かな客觀世界を示した句も多く残して居る。

○

〔四八〕蝶とんで我身も塵のたぐひ哉（七番日記）

放浪時代の終りに近い吟である。意味の上にか調子の上にか、必ず皮肉か滑稽味を含んで居るやうな所謂一茶調に馴れたあとで突然この句に接すると、一寸まごつくやうな気がする。この句はさうした特異や特調にかゝづらはない、一人の人の漏した重い溜息を聞くやうな吟である。

木にも草にも陽光が満ちて、やがて蝶も飛ぶ日が来ると、寒い間はさまざまにも思はなかつた自分の身の圍りの貧しさ見窄しさが殊更に目立つて来る。襟垢が溜つて居る。膝の焼焦しが目につく。破れ疊が目障りになつて来る。誰つくろつて呉れる人があるではなし、常は獨り住の方が香氣でいゝなどと考へても居るが、さすがに春先の浮々と艶を持った女の聲を聞きなどすると、自分が全く人間的色彩の外に葬られてある心地がして、「あゝ己のやうなものは虫や鳥にも劣つて居るのだ。ごみくたに等しいものだ。」といふ風に考へられて来る。老いて貧しい獨身者の偽らぬ述懐であらう。

〔四九〕蝶とぶや親鸞松も知つた顔（文通）

「善先寺御堂」と前書がある。

親鸞松は、見眞大師が建暦二年三月より一百日の間善充寺へ參籠の砌、附近の朝日山の松を採つて手向けられたことに起因して、俗に親鸞松と呼ばれて居る。現今は年四回挿替へられるとかいふことである。

大花瓶に挿された直立した松が枝ではあるが、廣大な堂内の然も薄暗い處にあるので、案内がないとうつかり見過して了ひさうである。その親鸞松をめぐつてひらくと蝶が飛んで居る。それだけで堂外の春光の麗かさも思ひ遣られる。そのやうに因縁深い松である故に、他國から來た參詣人が一々説明を聞かされて居るやうな松である故に、蝶の態度に、ふと「知つた顔」といふ可笑味を誘はれたのである。秀句といふほどのこともないが、一寸した情景が動いて居る。

〔五〇〕葎からあんな小蝶の生れけり（おらが春）

43 葎が何科の植物でと質す前に、先づ葎といふ語から直接受ける感じは、「八重むぐら茂れる宿」と云つたやうな、いぶせく生ひ茂つた感じである。作者の言はうとしたのも恐らくそれであらう。

足の踏場もなく一むら茂つた叢の中から、ふいと小蝶が飛出した。眞實それが其處から生れ出たものか如何か問題ではない。恰度生れ出たやうに突然と舞立つたのである。その不意の小蝶の美に打たれて、瞬間、作者は自然界の驚異に目醒めて居る。「あんな小蝶の生れけり」と、飽くまでも主観で押して行くところに一茶の特色が見られるが、然し、このやうに對自然の率直な叙述は、一茶としては珍しいものである。私達も屢々斯ういふ感じに遭遇することはあるが、このやうに正面から單純化された手法を取することは、容易さうで、其實作者の態度が餘程坐つて居なければならぬ。此所まで來ると、一茶の小手先の技巧はすっかり抜け切つて居る。

○

〔五二〕大猫の尻尾でなぶる小蝶かな（おらが春）

大猫といふものは、のさり／＼として、いかにも圖々しい感じを與へるものである。小蝶が側近く飛んで來てもチツトも騒がず、時折太い尻尾を懶げに動かして追拂ふやうにして居る。それが恰度小蝶をちらして居るやうに見えるのである。小蝶は近寄ることも出來ず、さりとて逃げもせず、猫をめぐつてむら／＼と飛び廻つて居る。一幅の俳畫といふよりも一層濃厚な、春の晝のぼつとりとした氣

分が出て居る。但、これが一茶の句であるだけに、「大猫」「小猫」の取合せが一寸氣になるのは、餘りに神經過敏過ぎるかも知れない。

○

〔五二〕門の蝶子が這へば飛びはへばとぶ（發句集）

門先の若草の上に筵でもあてがつて、子供を勝手に這ひすり廻らせておく様であらう。子供の鈍い動作を侮つて悠々として居る蝶。可愛い瞳を蝶に注いで一心に這摺つて行く子。その反覆される動作を、得意の重語を以て巧に表現して居る。田園趣味の豊かな作である。

此所で一寸注意させられることは、「はへばとぶ」と、坐五で止めてあることである。「這へば飛びはへばとび」と云へば、宛然川柳調となる。放膽に似て實は用語に細心な注意を怠らなかつた一茶は又、決して俳句としての格をはづして居ない。さういふところにも彼の性格の一面が窺へるのである。

○

〔五三〕田に畑にてん／＼舞の小蝶かな（發句集）

「てんく舞」と「てんてこ舞」とは同じやうな言葉でありながら、てんてこ舞が慌てた様を示すに反して、てんく舞はいかにもよろこばしげな表情を示して居る。歡びに堪へず踊り狂ふ様である。この句は原案「夢に菜に」とあつたのを、後に「田に畑に」と直してある。夢に菜にと小細工を弄するよりも、田に畑にと大らかに叙してある方が、群れ狂ふ小蝶の姿を一層鮮かに印象させる。何れにしてもこの中七で活きた句である。

○  
〔五四〕 あたふたに蝶の出る日や金の番 (旅日記)

年中陽の目を見ない冷ツこい店藏の中に帳場を据ゑて、算盤とにらめくらをして、時々眼鏡越しにじろくくと若い者の様子を監視して居るやうな親父顔が面白く聯想される。戸外には陽春の氣が満ちて、陽炎の立つ天水桶の周圍にも紺の暖簾にも、今生れたばかりの小蝶がむらくくと舞ひ狂つて居る。

「どうだこのいゝ陽氣に。面白くもない。くすぶつて金の番ばかりして居る馬鹿な奴め。死んで持つて行きあしまいし。」

さういふ一茶の獨語を聞くやうな氣がする。

あたふたといふ副詞を「あたふたに」と名詞格に使つてあることは、一見無造作に大膽らしく見えるが、試みにこの五文字を「あたふたと」と「あたふたに」と、兩様に置替へて吟じて見られる。自ら作者が細心の注意を以て一字一句を疎かにしなかつた苦心の跡に思ひ至られるであらう。「あたふたに」と云つて、初めて背景の廣さがあり、金の番がくつきりと浮び出して來る。

○  
〔五五〕 それ蛇に世話をやかすな明り窓 (發句集)

明り窓は、普通室内へ光線を取るために高いところなどに設けられてある小窓を云ふ。室内のほの暗さに戸惑つた蛇は、明り窓をめかけて一散に飛んで行つて、窓障子に突當つてバタ／＼やつて居る。「それ／＼それ、早く明けてやれ。蛇がまごついて居るぢやないか。」

口小言を云ひながら、尻の重い女達を追立てゝでも居るやうな或日の一茶が思はれる。

47 「やかすな——明り窓」と、直接意味の連絡はない。「それ蛇に世話をやかすな」までが作者の主観で、坐五へ行つて「明り窓」と客觀的に場所を示して、同時に主観の動きを説明して居る。俳句に於ける

特殊な坐五の置方の一例である。

○  
〔五六〕 向々に蛙のいとはと哉 (七番日記)

田に水が入つて、蛙の出盛る頃、べた／＼と並んでガチ／＼鳴連れて居る様であらう。蛙の数を現すために、「いとこはとこ」といふ種属の繁榮を思はせる語を持つて來たのは、餘程考へての上らしい。然し、それがいかにも蛙のそれらしい消息を傳へて居ることは面白い。例へば「蝸牛のいとはとこ」とか「燕のいとはとこ」とかいふ言葉を考へて見ると時に、私達は滑稽を通り越した馬鹿々々しさを感じさせられるのである。巧な表現は、どうしても作者の練磨された感覚から出立しなければならぬ。上五「向々に」も、一句の情景を極める上に器用に働いて居る。

○  
〔五七〕 悠然として山を見る蛙かな (おらが春)

「おらが春」その他に見えて居る。「おらが春」にはやゝ長い前文があるが略しておく。

これは一茶の持句として特に秀逸といふでもないが、必ず選に漏すことも出来ない佳作の部である。一茶は蛙を多く扱つて居るが、蛙の姿を寫したのものとしてはこの句に止めをさしてよからう。鑑賞者は勝手な山を描いて、作者と共に悠々とした蛙の姿を觀じて呉れれば充分である。私はたゞ、黒姫飯綱妙高の三山の肩間に聳える彼の郷里の方の道端の景色などを想像に入れて見るのである。

○  
〔五八〕 陽炎や白の中から眞一筋 (七番日記)

「眞一筋」といふ坐五に非常な力の籠つた作である。使ひつゝある白か、これから使はうとして濕らせてある白か、それよりも、軒下などに出し放しにして昨夜の雨に濡した白といふやうな感じがひつたりとする。輝かしい春の朝日がカツと照込んで、白の中から立登る水蒸氣が一團となつて、圓柱のやうに眼の前に搖めき登つて居る。神経の弱い者は眼の昏みさうな、はげしい陽春の氣象が感ぜられる。

一體、陽炎は自由な聯想を誘ふよい季題であるが、このやうに太い線で陽炎そのものを率直に表現してある句は珍しいのである。

○  
〔五九〕陽炎や掃捨芥の錢になる（句帳）

お上品な人はこの句を卑しいと云つて笑ふだらう。一茶は要するに俗人として終始した人である。特に超越を誇つた人でもない。

掃捨芥から思懸けない何文かの錢を得て、折柄、むらくと陽炎ふのぼせ上るやうな陽春の氣の中に、自らの豊かな氣分を享樂して居る。錢！此所では錢の用途に關係なく、吾々と深い因縁を持つ錢そのものに對する單純な愛着が語られて居る。掃捨芥まで錢になつたといふこと。それは恐らく、花に對するよりも小鳥に對するよりも、直接一茶の心を、一寸の間豊かに楽しくさせたに違ひない。錢！左様だ私達は自ら拒絶しても拒絶しても、どんなにその錢に愛着して居ることか。一茶はたゞ、正直に、憶面なく、私達の心を語つて居るに過ぎない。

○  
〔六〇〕陽炎や寺へ行かれし杖の穴（句帳）

雨上りか、凍解か、濕つた道の邊にぼつくりくと杖の跡がついて居る。よい時候で、あたりの若草には幽かな陽炎さへ立つて居る。氣任せにその杖の跡を辿つて見ると、恰度寺の方へ向つて居るのである。

「は、あ誰か寺詣りに行かれたナ。」

と、思ひ懸けない發見に、ひとりでクスリと笑つて見たいやうな、面白がつた氣分である。一茶は一面斯うした子供らしさを死ぬまで持続けた人でもあつた。一句に描かれて居る景情以外に、作者の態度がいかに長閑な春らしさを物語つて居ることも面白い。

○  
〔六一〕小うるさい花が咲くとて寢釋迦哉（おらが春）

涅槃像を詠んだものである。

51  
人世に對してひどく弱虫で臆病であつた一茶も、彼の住む唯一の世界とする藝術——藝術といふ上品振つた言葉さへ彼にはふさはしくない氣がする。寧ろ作句の世界と云つた方が適當かも知れない——に於ては、随分腕白で皮肉で、蔭辨慶の反抗家でもあつた。それが何時か、世人の所謂一茶の特色

を成したもので、この句などは其特色を最もよく發揮して居る。この句は然し、さういふ見地に立つて見るばかりではなく、單に作品として離して見ても相當に價値がある。それは、この句を見てから涅槃像に對する時には氣が付かれるであらうが、あの、ゴロリと横になつたお釋迦様の寢姿は、涅槃といふ神祕的な感じよりも、どうかすると一寸した小休みといふ感じの方が強くするものである。「小うるさい」は、作者の感情を直ちに對象に移入したままである。作者の主觀と鋭い觀察眼とが、其處にカチリと火花を散して居る。舊套な概念に囚れて居ないところがこの句の生命であらう。

○  
〔六二〕 春。雨。や。喰。は。れ。残。り。の。鴨。が。鳴。く。 (七番日記)

しとくと降る春雨に濡れて、溝堀などの鴨が佗しげに鳴連れて居る。その鴨は昨日よりも減つた。明日は又今日よりも減らされて行くといふやうな運命にある食用の鴨なのである。そのことが、靜かな春雨と和して、作者の心に淡い哀愁を呼んで居る。哀愁を感じながらも、その哀愁を一つ踏返して、「喰はれ残り」といふやうな放膽な語を持つて來て、洒脫諧謔を標榜する本來の面目を失つて居ないところに一茶の特色がある。

○  
センチメンタリテイは意地張りの一茶の取りたがらないものであつた。

○  
〔六三〕 春。雨。や。鼠。の。な。め。る。隅。田。川。 (發句集)

この句を見ると、震災前まで屢々渡船で往來して居た、向河岸の明治病院寄りの穢い石垣の崩れから鼠が出て來て、隣の辨當屋の臺所口から流れ出す飯粒などを汀に漁つて居たのを見たことを思ひ出す。鼠が隅田川を嘗めると云つたのは諧謔に富む作者の奇智で、物の大小を取合せて滑稽味、或ひは或る氣分を現すことは作者の好んで用ゐた手段である。奇智とは云へ、一寸景色の見える面白い句であるが、この句も初め「春風や鼠のなめる隅田川」とあつたのを、後に「春雨や」と改めたのである。斯う並べて見るとやはり作爲の跡が鼻について嫌になつて來る。尤も、春風よりも春雨の方が一句の情景はグツと引立つて來るのではあるが。

○  
〔六四〕 鼻。よ。面。辯。な。を。せ。は。る。の。雨。 (七番日記)



「鳩いけんして曰く」と、前書がある。

七番日記が活字として刊行される時、装幀を受持たれた齋藤松洲氏は、この句意を取つて、同日記の表紙に、ぼた餅のやうな恰好をした梟と、小さかしげな鳩と向ひ合つて木の枝に止つて居る繪を描いて居られる。

前書がなくとも面白いには面白いが、何と云つてもこの句のうま味は鳩と梟との對照にある。鳩と梟と、各々の姿なり性格なりを巧みに捉へてあるところに、おのづからなる可笑味がある。作者もこの句を興がつて、自畫自讃の幅物などを残して居る。

○

〔六五〕 安堵して鼠も寝るよ春の雨 (發句集)

「春甫新宅賀」と前書がある。春甫は村松氏。柏原の近村長沼の人で、俳諧寺十哲の一人である。安政五年八十七歳まで生きて居て、一茶の二十七回忌までも懇ろにいとんで居る。春甫は又書をよくした人で、現今傳つて居る最も信を置くに足りる一茶の肖像もこの人の筆に成つたものである。取立てよいふほどの作でもないが、新宅祝の句としては穩かな出來ばえである。

この句について思ひ出すことは、曾て隣家の少女が「しんとして鼠も寝たか春の雨」といふ句を示したことがある。少女は當時一茶について何の智識も持たなかつた。作意の偶然の符合は別に珍しいことでもないが、この一例を見ても、一茶の藝術がそれほど吾々に近く、親しみ易いものであるといふことが思はれるのである。

○

〔六六〕 春の日や雪隠草履新しき (旅日記)

句法は平凡だが、特殊な取材の中に春の日の健康な歡びが脈打つて居る。便所の草履が新しかつたといふたつたそれだけのことが、それほど人間をよろこばすものであらうか。それは詩人にばかり恵まれてある幸福であつたのだらうか。否、私達の魂は何時の間にか餘りに厚皮になり過ぎて居た。この句は吾々の硬ばつた魂に與へる一服の清凉劑である。

○

〔六七〕 春の日のおつるくむる櫛かな (七番日記)

櫛は佛花で、然も有毒性であるために墓地のやうなところのみ多く見かけるが、然し武蔵野などを歩いて居ると、稀に櫛の垣をして居る家などもある。つゝましかかな白花を葉陰に含んで、椿の葉よりも長く柔かく、つや／＼とした緑葉が微風にべら／＼と揺れて、春の日さしの流れ止らないやうな情趣を、どうして斯ううまく擱んだものだらうと感服させられる。

作者の静かな観想の世界に連れられて、身も心も永い／＼春の日の中に浸つて行くやうな悠長さを覚えさせられる。

○  
〔六八〕 永の。日。を。喰。ふ。や。喰。は。ず。や。池。の。龜。 (七番日記)

江戸時代の終り頃の吟である。不忍の池の龜が人に菓子をねだつて居る様を見て詠んだもので、嘉永版發句集にはそのことが前書してある。

一茶の境遇を思ふと、この句も一寸した諧謔として見過して了へない気がする。何につけても先づ喰ふことに思ひ至らねばならなかつたほど、江戸時代の彼の生活には安定といふものがなかつたのであつた。一茶時代の不忍池畔は、茶店、揚弓場、講釋場等軒を並べて繁昌した市民行樂の地であつた。

その池の端の仲町あたりの粹な家並を背景にして、見窄しく瘦せた男がふらりと立つて、皮肉な微笑を浮かべながら汀の龜の子に見入つて居たであらう姿が想像される。だが、長閑な江戸の春だ。

○  
〔六九〕 春。風。に。尻。を。吹。か。る。ゝ。家。根。屋。哉。 (七番日記)

草葺家根の家根屋さん。やゝ烈しい東南風に尻を帆立てゝ、一心に屋根葺く手をすゝめて居る。尻ばかりが正面いつばいに、活動の大寫しのやうに印象される。作者の着眼の飘逸さ。現今なれば一つ童謡で行つて見たいところであらうが。

○  
〔七〇〕 春。の。風。お。まん。が。布。の。なり。に。吹。く。 (發句集)

發句集には前書はないが、中村六郎氏校訂の一茶選集には「高い山から谷底見れば」とある。無論眞蹟に據られたものと思はれる。

柏崎名物三階節といふ唄に

高い山から谷見れば おまん

おまんが可愛いや染分け襷で布晒す

三階節を私は親しく聞いたことはないが、可なり全国的に喧傳されて居るさうで、優艶にして野趣のある本調子ものださうである。踊は上品の中に飄逸洒脱の趣きがあるといふ。一茶の郷里は越後堺のことゆゑ、無論古くから傳はつて居たことと思ふ。

扱、句意は同じ一茶の「晒布霞の足しに聳えけり」と略々同景で、晒布を中心として扱つてあることも同じだが、特殊な小唄から脱化させて、然も春風が布のなりに吹くといふ子供らしい言廻しは、作者がよい心持ちで詩的感興に酔はされて居たことを思はせる。さほどよい句とも思はないが、春風に吹撓められくする晒布の遠景は見えて居る。兎に角、小唄を巧に活して長閑な春景色を叙してある點は、二重の成功と云ふべきであらう。

○

〔七一〕 浅川や鍋すゝぐ手に春の月 (旅日記)

一茶としての特色も出て居ない。調にも着想の上にも何等の奇もない。然し私は趣味の上からこの

句を捨兼ねるのである。

さらく流れる小流れ——小流れで鍋を洗ふと云へば無論田家の景である。繩を解かれた芽出しの桑の影も賑かに、おぼろに照る月影が物洗ふ女の白い手許まで届いて居る。桑畑をめぐる細流——物洗ふ女——紅い帯——私の愛好する武藏野の風景がこの平凡な調の中に彷彿として来る。この平凡な調の、然し野を語るにはふさはしい。

○

〔七二〕 すづぽんも時や作らん春の月 (おらが春)

前書に「水江春色」とある。

この句を無稽のものとして一概に退けて了ふ人は、未だほんとうに氣分といふものゝ解せない人だと思ふ。この句の解釋の前に「龜鳴く」といふ季題について一言しておく必要がある。昔から月明の夜には龜が鳴くと言傳へられて居る。實際は鳴かないのださうだが、その點は「みゝず鳴く」蓑虫鳴く」などゝ同様に誤り傳へられたものと思はれる。尤も「龜鳴く」は漢詩から出て居ると聞いたが、今私には解らない。馬琴の俳諧歳時記には、夫木集「川越のをちの田中の夕闇に何ぞと聞けば龜のな

くなり「爲家」と、古歌を引用してある。今でも舊派の運坐の席などには折々持ち出されて人を困らせて居る。然し、おぼろ月に對して龜鳴くといふ季題は、何とはなしにそれらしい、暢やかな感じの伴ふものである。實際にないものを第六感に感じていゝ氣になつて居るところは、俳人、寧ろ日本人特有のお目出度さかも知れないが。

それで、この句は龜の同種族で、然も龜とは反對に慍悍なすつぽんを捉へて來て「時や作らん」と大きく出たところは、たしかに奇想である。同時に、油を流したやうな水邊にあつて、まんまるい春月に對した作者の胸の擴がるやうな氣分も説明なしに感じて貰へる筈である。

○

〔七三〕 お。ら。が。世。や。そ。こ。ら。の。草。も。餅。に。な。る。 (七番日記)

人事に即した、執拗な狭量な詩人一茶も、一面樂天的な自然人であつた。然し、自然を讚美するにしても、飽までも自己を中心とした御自慢であるところに、この人の特色がある。

長い陰氣な冬を経て、若芽若草の萌出る春を待ち得た農民の心の歡びが脈打つて居る。特に一茶のやうに窮迫した都市生活を送つて來た者には、自然の恵みも自然の歡びも一段と深く印せられた筈で

ある。そこら中の土から食べ物湧いて出ると思ふことは、就中彼の心を樂しましめたらう。不自由を知る者のみが満足の歡びも知る。恰度、焼出されて見て初めて食べ物ほんとうの有難さを知ることの出來たやうに。

○

〔七四〕 さ。く。ら。く。と。唄。は。れ。し。老。木。か。な。 (おらが春)

一茶特有の擬人法である。

「此奴も騒がれた櫻だつたに。」と、氣さくな調子で片付けて居る。

この句は、句意そのものよりも、歌曲から取つた上十二字に作者の興味の多く繋がれて居ることは勿論である。

貧しくはあつても、歌舞音曲等に何でも御座れの趣味を持つて居たらしい一茶は、長唄の「道成寺」或は「手習子」の中の文句「さくらくくと唄はれて」を、小耳に挟んで居たものであらう。或は、當時、外に流行唄のやうなものでもあつたかも知れないが。

因に「道成寺」は寶曆三年の作曲。「手習子」は寛政四年の作曲である。

○  
〔七五〕 櫻へ。と。見えて。じんぐ。端折哉。（おらが春）

おのづから野趣が溢れて居る。

じんぐ、端折は、着物の裾を高く帯の結目に挟む端折り方。「櫻へと見えて」とある上八字が、じんぐ端折の人物を現すために實にしつくりとして居る。江戸なれば上野へとか向島へとか云ふところであるが、たゞ「櫻へ」と云つてあるので、派手な花見の行樂の地でなく、一寸した花の名所か名木でも指して行くのであることが思はれる。折目のついた手織布子に新しい手拭でもさげて、じんぐ端折して少し前屈みに急いで行く老爺。それを見送つて居る農夫の姿なども眼に見えるやうである。

○  
〔七六〕 斯う。生きて。居る。も。不思議。ぞ。花の。蔭。（七番日記）

極めて美しいものに對する時、極めて賑かな周囲を持つ時、人の心には反動とも見るべき微妙な哀感が流れて来る。「あゝ今年も生きて居て斯うして花を見ることが出来た。」といふやうな安ツぽい感傷

的な気分とも違ふ。この句はもつと深い、人間性の深處に觸れて居る。

無自覺に宿命に押流されて行く吾々人間も、時として赤裸々な自分自身を見出すことがある。作者は偶々爛漫たる花明りの下にイんで、ふと現實に眼醒めて、自己の存在の不思議、今日まで生續けて來た偶然の運命の不思議さまで胸を打たれて、更に夢を重ねて行く氣持ちで自分自身を見廻して居る。「不思議ぞ」といふ突然な表現も、巧まずして人の心に迫つて來る。

瞑想の世界に交流する作者の魂の深さにしみぐとさせられる句だ。私は、一茶を皮肉と諧謔の權化のやうに解して居る一部の人々の前に、この句を薦めたいと思ふ。

○  
〔七七〕 勘忍を。いたしに。ゆく。や。花の。蔭。（七番日記）

63  
いゝ加減には見過せない句である。腹立つ心をじつと押へ付けて、先づ一つ花でも見て來ようと思へるやうな餘裕の出て來るまでには、人間もそれぐの修行を経なければならぬ。怒つた後の氣まづさ。争つた後の心寂しさも、充分に嚙分けて知る人である。然し、發せられない憤りを胸に秘めて、我から慰めようとして花を仰いで居る人の心持ちは、何といふ淋しさであらう。永劫に相會ふことの

出来ない心と心との交渉。人間の孤獨。人間の寂しき。稍々とほけた顔をして居ることの句の裏に、餘りに苦しい人間の涙の秘められて居ることを思ふ。

○  
〔七八〕 人聲にほつとし。たやら。夕櫻 (七番日記)

七番日記にある句だが、その他の眞蹟に依ると、いろく〜と前書を附したり、坐五が「ちる櫻」となつて居たりするが、此所では日記にあるまゝを採用する。

この櫻は所謂花見場所の花ではなく、一本か、せいぐ〜三本も静かな處に咲いて居る櫻であらう。この「ほつと」は、小娘が恥しがつて「ぼつと」するといふ、あの「ほつと」である。巧みな擬人法である。がやく〜と近付いて來る人聲を聞いて、ぼつと上氣したやうに、その人聲に交つて行く人の眼の前に、あたりの夕闇を破つてほつかりと浮び出た花の姿である。何といふ巧妙な、濃艶な叙法であらう。概念の力を借りずに、これだけの氣分をこれ程ハッキリと纏め得て居る作者の腕前には、敬服の外ない。

○  
〔七九〕 此やうな末世を櫻だらけ哉 (七番日記)

「だらけ」といふ語一つで生きて居る句であるが、兎に角、大膽な用語である。一體「だらけ」といふ言葉は、「血だらけ」とか「芥だらけ」とか、不快な仰々しさを示すことに用ひ馴れて居るが、それだけ、美しい櫻の方に持つて行つた時に、放膽な印象を深め得るのである。殊に「だらけ哉」と、不拘束に言放つたところは一寸眞似られない。

末世といふ語は、爛熟した文化の頂點にある徳川末期の、花見酒に酔ひしれて居たであらうやうな當時の社會相を穿つて居るやうな氣もする。作者はどの程度の氣持ちでこの末世といふ言葉を使つて居るのか、解し方に依つては案外ヒリ、としたものゝ感ぜられる作である。

○  
〔八〇〕 下々に生れて夜もさくら哉 (七番日記)

七番日記には、この句の前に可なり長い文章がある。

春の朝方、品のよい老法師が木の根に腰かけて、相手欲しげに煙草を喫ひながら、あたりの櫻をの

どかに眺め廻して居る。其處へ今起きたばかりの達磨らしい女が唾へ揚子でぶらり／＼とやつて来る。すると又、恰度其處へ肥たごをかついだ兄イ連が來かゝつて、女をからかつて行過ぎやうとすると、女は負けぬ氣になつて口汚く罵り返す。然しそれもこれも皆木の間の春景色となつたといふ文意で、直接この句の前書ではないが、その文意を受けて、この句の氣分が一層はつきりして来る。即ち、一茶は在るがまゝの世相を肯定して居る。そして、下々に生れたお蔭様で、夜までゆつくり花が眺められますといふのである。

然し、この句意を一段突込むと、其處には封建時代、就中江戸末期特有の倦怠した氣分が漲つて居ると思ふ。宿命的な階級制度の下にあつて、「下々に生れて夜もさくら哉」は、せめてもの諦めであり、はかない反感でもある。それは決して一茶一人のものでなく、發せられぬ反感であるだけ、一層深刻に時代の底を貫く陰鬱な一つの氣分の流れを成して居たと思ふ。今から思へば實に馬鹿々々しかつたやうな、町家の人達の許されたる範圍内に於ける派手競べなども、總てこの氣分に胚胎して居たと云つても、敢て詭言ではなからう。

〔八一〕 エ。タ。寺。の。櫻。ま。じ。く。咲。き。に。け。り。 (七番日記)

「まじく」は、子供が上ヲ目つかひをしてもじく／＼して居る様などを思ひ出させる。爛漫と咲誇らず、不愉快にいじけた様に咲く意である。

対象は多くの場合主觀の反映となる。土に執し故郷に執して、家半分田一枚を、十數年が／＼りて訴訟にかけても繼母と異母弟に對して争はうとして居たやうな一茶である。殊に眞面目であると同時に頑固な信州人である百年前の詩人一茶は、やはり固定した差別觀念の持主であつたに違ひない。然し、一方常に弱い者虐げられたる者の味方、といふよりも、弱い者虐げられたる者に自分の心持ちを托して居たやうな一茶である。大正の今日まで生かしておいて、水平社問題等に就て意見を吐かせて見たらばどんなものであつたらうか。然し、私は思ふ。傳統の血を多分に受繼いで居る土の子一茶は、彼自らの持つ憐愍や同情心を裏切つて、恐らく左様いふ問題に關しては極く沒情漢のカチン／＼親爺であつたらうと。そして、一茶は自分のさうした心持ちに對して痛みをさへ感ずることがなかつたであらう。一茶は確かにさうした烈しい矛盾に生きる人であつた。

## 〔八二〕 我。國。は。草。も。櫻。を。咲。き。に。け。り。(發句集)

前書に「櫻草といふ題をとりて」とある。この句は研究家に依つて非常に價値付けられた句である。故東松露香氏は、我國の所謂大和魂は獨り櫻花に比せらるゝ武人のみの有にあらず、例へば櫻草にも儔ふべき百姓町人といへども皆この心を有せりの寓意と見て、かの「敷島のやまと心を人とはど」の國風に比して、より以上の意義ありとまで極力讚美して居られるが、私はそんなに重い意味で作られたとは思はない。

生一本な感情家の一茶は、又無邪氣な愛國者でもあつた。然し、當時の愛國心といふものがどんなものであつたか。要するに、彼の句に見る「神國の松をいとなめおろしや舟」程度のもので、それも特に一茶に限らず、露人の偵視等に依つて多少刺戟されつゝあつた當時の民衆に共通した敵愾心であつたのだらうと思ふ。従つてこの句も反撥的の愛國心の現れとも見られるが、大體罪のないお國自慢である。この句を指して直ちに彼の國家的觀念の發現など、四角張つて云はれたら、地下の一茶はまごつくであらう。

## 〔八三〕 か。る。た。程。門。の。菜。の。花。咲。き。に。け。り。(七番日記)

可愛い景色である。

同じ一茶の「苗代は庵のかざりに青みけり」と、殆ど同景の着想ではあるが、この「かるた」といふ思ひ付きを、作者はひどく興がつたものであらう。面白味もね、うちも要するに其處にある。

## 〔八四〕 餅。腹。を。こ。な。し。が。て。ら。の。接。穂。か。な。(おらが春)

單に作品の上から見ても、一茶の晩年は、若い頃に見たやうな僻みや偏狹から次第に遠ざかつて、人世に對し自然に對して、餘裕ある微笑を向けるやうな態度を見せて居る。

好物の餅に満腹して、やゝ重い氣分を抱いて「どりや一つ」といふ風に庭に下り立つて接木でもして見ようとする——春日遅々として、奥信濃の地、黒姫飯綱の山々の雪も最早残り少なくなつて居たことであらう——思ふことなげな老境である。此處では一茶も一個の好々爺になり切つて居る。



## 〔八五〕 ゆさくくと春が行くぞよ野邊の草（七番日記）

一寸氣のつかないやうな句であるが、一茶の鋭い感覚が、自然に對しても深い處に觸れて居た跡が見える。

「ゆさく〜」は、頭重げに茂つて居る草が、野一面に風（強い風ではない）に揉まれて居る様で、一日野に出て見た一茶は、其處にすつかり用意されて居る夏と、春との交流を目のあたり見たのである。私達はこの句を通して、風にゆすられながら、強い日に照らされて白い葉裏を翻して居る草の輝きや、やゝ足早やに飛ぶ夏近い雲や、足許から登る草の温氣のやうなものまで仄に感じ得る。「ゆさく〜と春が行く」の叙法は、さすがに老手である。

○

## 〔八六〕 早淋し朝顔時くといふ島（發句集）

今まで遊で呆けて居た人が、ふと興醒めて、俄に白けた顔を振向けられたやうな感じがする。「早淋し」と、大被せな上五も、端的な感じが追つて居ていゝ。花時を中心として、世の中は春のさわめき

の中に卷込まれて居る。その花も未だ散り終らない先に、彼岸でも濟むと、最早朝顔を時く支度をす。親しく時かうとする動作を見たのもよい。或は、垣隣りなどから「此處へ朝顔を時きませう」といふやうな聲でも聞いたとしてもよい。朝顔と云へば、既に初秋の冷やかさを思ひ遣られる（現代では朝顔を夏の花の代表のやうに扱つて居るが、昔から秋の七草の中に數へられて居ることは人の知る如くである。無理な人工を施さずに放つておけば、事實朝顔の盛りは秋である）その時作者はハツとした淋しさを感じたのである。光陰の速かさを感ずるのは反つて斯んな一寸した場合に多いものである。一茶のやうに長い間無定見な活き方をして居た者は、折にふれて斯うした感じも鋭かつたらうと思ふ。

この島は所謂花島で、今の流行語に従へば花壇の謂であらう。

## 夏の部

○  
〔八七〕 おも。しろい。夜は。昔なり。更衣（發句集）

「更衣」は、俳諧に於ては夏季にのみ扱はれて居る。春の衣を脱いで夏の衣に替へることである。昔の儀禮では、四月朔日より給を用ひ、端子の日より單衣に替へることに定められてあつた。

「從<sub>ニ</sub>安永六年<sub>一</sub>出<sub>ニ</sub>舊里<sub>一</sub>而漂泊卅六年也。日數一萬五千九百六十日。千辛萬苦一日無<sub>ニ</sub>心樂<sub>一</sub>不知<sub>レ</sub>己而終成<sub>ニ</sub>白頭翁<sub>一</sub>。」と、嘆いて居る一茶も、年中喰ふや喰はずの日ばかり續いて居た譯でもなかつた。彼の放浪時代の日記を見ると、×日 雨、味噌。×日 隨齋朝食。といふやうな佗しい文字に次いで、田舎廻りをして小遣錢を貰ひ溜めて來たやうな時には、極つて、能狂言や芝居を見に行つて居る。殊に彼の思出の舞臺を成すものは、化政度の江戸を中心として居る。冥想の中に弦歌を聴く。仄かな女

の匂を嗅ぐ。時折々の行樂。うまい物——

淋しくとも、一面氣樂な、不拘束な若い日の追憶が、初給の軽い氣分の中に一脈の哀愁を曳いて作者の胸に蘇つて來るのであつた。悲しみを云はず、洗練された叙法に依つて、老懶、青春を悼む思がしみぐと迫つて居る。「昔なり」と、中七で切つてあることも詠嘆を深めて居る。私の好きな句である。

○  
〔八八〕 更衣（七番日記）よしなき草を引ぬきぬ

成功しなかつた句である。七番日記の初めの方にある句で、「更衣よしなき虫を殺すなり」「更衣よしなき草を引ぬきぬ」と、いろ／＼に試みた迹は見えるが、結局満足したものは得られなかつたやうである。

然し、作者の云はうとして居る心持だけはよく分ると思ふ。衣を更へた爽かさに自ら浮々として、稍々輕佻とも云ふべきそわ／＼した氣持。それを周圍の何物にか托して見ねば居られないやうな、輕さと、淡い焦慮の絡り合つた氣持。其處を掴んで見ようとつとめた作者の努力だけは買つてよいと思

○  
〔八九〕 その門にあたま用心更衣（おらが春）

更衣の明るい気分を巧に捉へて居る。潜り戸の低いむさい住居へ、親しい同士三四人も打揃つて心置きな談笑の果に、歸つて行く人見送る人の間に交された雑談の一つのやうでもある。

「あたま用心」と、中七が名詞止で、坐五の「衣更」が浮いて居るために、自然飄逸な気分を出して居る。誰にでも覚えられ易い、所謂人好きのする句である。

○  
〔九〇〕 春日野の鹿に嗅るゝ裕かな（發句集）

これも一般によろこばれる句である。

青草の春日野を行く人の姿を見かけて、木の間などから鹿が出かけて来て、食物をねだるためにうそくと嗅寄つて来る。春日野といふ言葉が既にクラシカルな響きを持つために、一句の情景が極め

て優雅なものになつて居る。然しこの句にあつては、裕を嗅るゝといふ思付の方が勝つて居るために、背景はたゞ背景として錦繪のやうな美しさを持つだけで、生々とした感じはない。

一體人口に膾炙する作品と云へば、多くの場合、一寸したヤマがあつて、作品の持つ景なり情なりが手間ひまなく人の心に流れ込んで行く特質を持つて居る。其點この句も民衆的である。但、この句を一概にけなさうといふのではない。

○  
〔九一〕 はつ。裕に。く。まれ。盛り。に。早。く。な。れ。（七番日記）

「千太郎に申す」と、前書がある。千太郎は一茶の次男で夭折した。

初給を着た軽々しい可愛げな子供の姿に行末を頼む親心が、春の部の「這へ笑へ」以上に直接な形式を取つて、強い願望となつて現れて居る。

一茶もこの時は未だ長男一人失つたばかりで、次の子に對することであるから、子供の生育についてもあふなげのない希望を持つて居たらうと思はれる。返すくも一茶の老後の不幸には同情を禁じ得ない。

○〔九二〕是ほどのぼたん。と仕方する子哉（發句集）

眼をクリ／＼させて、精一杯の手真似で牡丹の大きさを報告して居る。北原白秋氏あたりの可憐な童論の中にも出て来さうな子供である。子供の動作を通して牡丹の華麗さを想像させる二重の叙法も、調が洗練されて居るために少しも無理なく頭に入つて来る。牡丹の花に對して「仕方」といふ語も、一寸思付けない巧みさである。

○〔九三〕でもさでもても福相の牡丹かな（發句集）

貞室の「これは／＼とばかり花の吉野山」と相似た行き方ではあるが、華麗な牡丹の花に對する驚異、牡丹の特質を、福相といふ發想法で確りと押へてあるために、吉野山の句ほど人の想像に手據ることが少く。

然し、斯ういふ句は總て、一步の差で卑俗な獨りよがり、に墮し易い危険性を持つて居る。

○〔九四〕芥子さげて群集の中を通りけり（發句集）

この句で最も注意しなければならないことは、この句が確かに芥子の花の句だといふことである。梅の花でも菊の花でも、其他のどんな花を持つて來ても、決してこの句の生命は傳へられない筈である。濃艶でデリケートな芥子の花の持つ感じは、恰度首の細い肺病の美人を見るやうな感じである。吹けば飛びさうにゆらめく花びら——その芥子の花をさげて群集の中を通抜けて行くはら／＼とした氣持。同時に、美しい花を持つて行くことに據る仄かな晴がましさまでも感ぜさせられる。

斯うした情景は、人事の描寫に根を据えた餘程感覺の鋭敏な作家でないと、一寸極め得ない境地だと思ふ。

○〔九五〕卯の花の吉日もちし後架かな（發句集）

四月八日に甘茶で墨を摺つて、「千早ふる卯月八日は吉日よかみさげ虫をせいはいぞする」といふ歌

を書いて厠の中に張つて置くと、厠の虫を防ぐといふ迷信的の行事は、随分廣く行はれて居たし、現今も猶地方に依つては残つて居る。

甘茶で歌を書いて張付けるほどの餘裕があれば、其日は特に念入りに掃除もされようし、舊曆のとゆゑ折から卯の花の盛りで、厠にも一景氣添はうといふものである。句意は「卯の花の咲く頃恵まれた日を持つた厠であることよ」の意。この「吉日」は、歌の中から引張つてある語であるが、明るくさばくした其日の氣分がよく出て居る。失はれて行く年中行事の懐しさを、私達は此種の作品を通してのみ味ひ得る。

○  
〔九六〕 か。く。れ。家。や。死。な。ば。簾。の。青。い。う。ち。 (發句集)

青簾の氣分をや、誇張して嘆美した句である。

要するに、安價な氣分の満足といふ謗は免れまいが、この句の中には、何となく「南無阿彌陀佛」と云つて居るやうな安心があつて、無理にこね上げられたやうな嫌味は感ぜられない。ホツと大息を吐いて、これでいゝのだと云つて居るやうである。これはこれで、このまゝで一つの場所を持つて居

る句だと思ふ。

○  
〔九七〕 江。戸。住。や。二。階。窓。か。ら。初。幟。 (句帳)

市井の一描寫である。

百何十年前でも、江戸は斯んなだつたのかと思ふ。尤も、震災前まで残つて居た馬喰町邊の古い屋並を見ても頷かれることではあるが、これは明治時代へ持つて來てそつくり通用する句である。今も昔も自然と縁の遠い都市生活にあつては、軒に葺かれた一束の葉菖蒲、二階窓から斜に突出された幟に、畫然とした季節の推移が語られるのである。作者は田舎出であつた爲に、斯うした市井の小景を特に印象的に捉へ得て居るのだと思ふ。これも一つの風俗詩である。

○  
〔九八〕 わ。か。様。が。菖。蒲。を。し。や。ぶ。る。湯。殿。哉。 (七番日記)

季節は菖蒲湯である。

若様といふやうな階級的な言葉に對する感じ方は、封建時代の人の頭になつて見ないとほんとうには解らないと思ふ。菖蒲湯に入つて居る子供を見て軽く戯れたものか、或は、多分隨齊あたりの富裕な家庭の有様でも垣間見て、それ以上の上流の子供の生活にまで想像をすゝめたものであらう。若様も下様の子供同様、無邪氣に湯槽の中の菖蒲をしやぶつて居るといふところに、軽いアイロニーを感じせさせる。一體可愛い句なのであるが、斯んなところにも、階級思想の無力な反逆者の意地悪さがチラリと顔を出して居る。無論江戸時代の吟である。

○  
〔九九〕この雨はのつ引ならじほとゝぎす (七番日記)

初夏の日の暮方から降出した小雨であらう。この詠へ向の雨の降るに於ては、最早のつ引ならじ「サアどうぞだ〜」ときめ付けて居る調子である。これでは折角だが時鳥も氣持よく啼けまいと思ふ。心耳を澄しても容易に妙趣に徹し得ないやうな時鳥の句を、元來世話物師の一茶に望むことは、望む方が無理かも知れない。

この句は、時鳥は待たるゝものといふ因襲意識に出發して、「のつ引ならじ」——否應云はせぬとい

ふ地口行燈にも等しい思付きの理屈でこたね上げてある。これ等は寧ろ一茶の悪い方面を代表して居る作だと思ふ。思付きを外にしては、時鳥の句として濟はれて居ない。小手先の技巧に氣を取られて見得を切つて居る間に、肝心の時鳥は雲のあなたに飛び去つて居るといふ形である。

○  
〔100〕歩きながら傘干せばほとゝぎす (句帳)

さすがに一茶らしい掴み方をして居る。雨支度をして出ても、其内に又止んで了ふ。降つたり照つたり、梅雨頃のやゝ物狂ほしい天候である。雲の斷れ目から悪暑い陽がカツと照込むので、目を除けながら干しながら、傘をさして行くと、「キャ〜ツ」と一聲、頭上を掠め過ぎるものがあつた。「あツほとゝぎす」と、傘をかたげて見返る頃には、最早影も見えない。「歩きながら傘干せば」と、一気に正直に言放つたところはいゝ。下手に技巧を凝せば芝居染みて了ふ句であるが。

「干せば」と中絶して「ほとゝぎす」と受けた急激な調子は、這般の印象を明かにして居る。一茶の句と云ふばかりではなく、多くの時鳥の句を見渡しても、この句なぞは、時鳥を手近な人事に結んだ妙句と云つてよゝ。

〔101〕是でこそ御時鳥松に月（發句集）

私は餘り感心しないが、所謂一茶の持句として可なり有名である。

句意は、松に月が出て居て非常に美はしい景色のところへ、折も折とて時鳥が啼いたので、眼前の景色が一層も二層も引立つて見えたといふので、これでこそ御時鳥だ、御時鳥様だと有難がつたのである。御時鳥の御の字に嘆賞の意をそっくり托したところがこの句の働きである。然し即興の言放しと見てこそ、言葉の綾で救はれる句であるが、私には左様も思へない。同じ作者の早い頃の作にも、「龜井天神宮」と題して、「御櫻御梅の花松の月」といふのがあつて、其處から思付いて巧まれたものだと思ふ。

一茶以後の俳調の墮落は、斯んなところからも脈を曳いて居る。

〔102〕時鳥蠅虫めらもよづく聞け（おらが春）

「鎮西八郎爲朝人磔うつ所に」と、前書がある。畫讚であらう。

芭蕉以前の談林調の鼓吹者で、謡曲調を多く試みた宗因の作に「時鳥いかに鬼神も確かに聞け」といふのがある。これは謡曲田村の末段「いかに鬼神もたしかに聞け」を其儘借用したものであるが、一茶の場合はたゞこの句から暗示を得て居るまでで、彼の縦横の才氣は、殆ど原句の滓渣を留めて居ない。時鳥と蠅虫の取合せなり比喩なりが、輕妙を極めて居る。

但「蠅虫」といふ言葉は、私達には少し耳遠いやうに思はれる。此處では是非「蛆虫」と云ひたいが、蠅虫の方が當時の慣用であつたのか、それとも、一茶の用語上の潔癖から、蛆虫のやうに直接穢い感じを與へずに、然も小人輩を現すに適當した蠅虫といふ言葉を選んだものかも知れない。

〔103〕先住のつけわたりなりかんこ鳥（發句集）

かんこ鳥は一名羯鼓鳥とも呼ばれて、夏時深山・幽境に鳴く鳥である。「カツ、ポウ」「カツ、ポウ」と、間を置いて規則正しく鳴く聲は、澄んだ空気をゆるがして、峰から峰に呼交す山姫の鼓のやうに高らかに響き渡る。靜かに聽いて居ると、ひとりでは涙するほど深い寂しさを誘はれる鳥である。

「先住のつけわたり」は 前の住職からの傳承、即ち代々附き物の意で、おのづからなる山寺の幽寂境を、人事の方面から逆手に説明して居る。一茶の屢々試る描法である。

〔一〇四〕霧に乘る目つきして居る墓哉（句帳）

私は初めこの句をどう讀んでよいか解らなかつた。然し一茶の郷里の方では墓のことを「ひいき」とも呼ぶさうで、別に「ひいき」と假名で書いてある句も見える。斯んな點は、随分遠慮のない使ひ方をして居ると思ふ。

太とくしい墓の形態を寫すために、これほど印象的な叙し方をして居る作が外にあらうとも思へない。私達はこの句から、實物を見る以上に、墓の特質をはつきりと觀取させられる。然し、この句、並に「雲を吐く口つきしたり墓」等の發想については、多少據り處がないでもない。彼の草双紙の自來也豪傑物語は、場所を信濃越後に取り、發端自來也が妙高山に於て蝦蟇の術を譲り受けるところから、後に黒姫山の大蛇丸の山寨を攻める等、總て一茶の郷里から指呼の地に題材を求めて居る。今猶妙高の麓つばめ温泉附近には、傳説にふさはしい陰森な箇所が多くあるさうである。尤も、この句は

傳説を語つて居るのではないが、なるほど其處らから暗示を受けたものらしく思はれる。

〔一〇五〕蟾どのの妻や待らん子なくらん（句帳）

萬葉集山上憶良の歌「憶良らは今はまからむ子なくらむそのかの母も吾を待つらむぞ」から轉化させて居る。

人を喰つて居ると、苦笑して葬り去つて了ふには、この句は餘りに蟾の特質形態を確りと捉へて居る。見て居る人の方で終には痛を起さずには居られないやうなどつしりとした構へ。やう／＼のことで動き出したかと思へば、猶人もなげに鈍重な手足をのつさり／＼とやつて居る……作者はふと、蟾の歸つて行く先を考へて見たのであらう。作者の奇智の、圓熟の境に於て磨き出された作だと思ふ。恐れ入りましたと云ひたい氣がする。

〔一〇六〕蚊がちらりほらりこれから老が世ぞ（おらが春）



いかにも楽しさうである。蚊といふもの、私達にはたゞ厭はしいものとしか考へられて居なかつたやうな蚊といふものが、この句を通して見ると、實に無くてはならぬ夏の景物の一つであるといふことを教へられる。うしろ手を組んで軒端の空を眺めてゝも居るらしい、作者の晩年の静かな氣持が感ぜられる。この句は無論故郷に住みついてからの吟であらう。

一茶の郷里は「おのれ住める郷は、おく信濃黒姫山のだら／＼下りの小隅なれば、雪は夏消えて、霜は秋降るものから」と、云つて居る通り、冬の初めから、暖國の春の終る頃まで雪と縁の絶えない土地柄である。山國に於ては、夏は最も自然の恩恵を蒙る時である。あゝこれからほんとの夏だなといふ感じ、殊に冬の間の辛い記憶を引摺る老人達が夏に直面する氣持は、さぞ楽しからうと思はれる。たゞその楽しさを、蚊を引出して現したところに一茶の一茶らしい詩境がある。「ちらりほらり」といふ語も、此處に使はれると非常に情景を活かして來る。

○

〔一〇七〕 隙人<sup>ひまじん</sup>や蚊が出た／＼と觸れ歩く。(發句集)

「ヨウ八さん。ゆふべは蚊が出たね。」と云つた調子で、いかにも事件らしく次から次へと觸れ歩いて

居る。

「ファン隙人が……」と鼻の先で小馬鹿にして居るやうな作者の嘲笑が感ぜられる。

然し、僅のことを珍しがつてそわ／＼して居る江戸ツ子型の人物や、當時の世間相も彷彿として面白い。そして、この人物はやはり前の句に見る心持と同じやうに、蚊に對して一種の懐しみを感じて居るのである。忝氣な時代の人達にあつては特に楽しみの一つであつた夜涼みや、其他何々。夏の夜の楽しい情景が、初出の蚊と關聯して仄かに意識に上つて來ようと云ふものである。

前の句と共に、私は蚊に對する一つの見方を教へられたことをよるこぶ。

○

〔一〇八〕 閨の蚊のぶんとばかりに焼かれけり。(おらが春)

「蚊を焼くや褒姒が閨の私語」といふ其角の句から脈を引いて居るやうな氣がする。一茶は其角の五元集なども耽讀して居た。然しこの句には何等の銜氣も構圖もなく、蚊を焼くそのことに感覺が集中されて居るために、少しも厭味といふものが感ぜられない。カンテラを手にして、<sup>ふとも</sup>腿まで露はにして居る女房を想像して見ても、例へば、その側にいきたなく甌を置いて居る男の姿を想像するとしても、

それ以上の何物もない。一句はたゞ、ぶんと鳴く蚊。ハツと動くカンテラの手。否、カンテラを持つ白い手を想像の中に描かしむるだけの餘裕さへない。蚊が鳴いた。焼かれた。といふ刹那の現象だけで一句が緊張して居る。いゝ意味から云つても悪い意味から云つても、複雑した傾向を持つ一茶の句の中にあつて、斯うした單純な緊張味のある句は珍しいものである。

〔一〇九〕宵越の豆腐明りに藪蚊かな (發句集)

鋭い見付け方をして居る。

宵越の豆腐は、昨夜から取置ききの豆腐のこと。小桶の水の中にでも入れてあるのであらう。豆腐の明るさを慕ふて、その上に藪蚊が群れて居る。然し此處では、曉方の薄暗の中に豆腐の白さだけが作者の眼にハツキリと映じた爲に、其處らに漫然と飛んで居た蚊も、特に豆腐を中心として意識された譯である。細く、鋭く、曉の靜寂を破る藪蚊のうなりもおのづと意識される。何となく、木深い庫裏といふやうな趣きがある。

「豆腐明り」は卵の花明りや月明りといふ和歌的用語と對照されて奇抜である。

〔一一〇〕大雨の敷居にちよいと蚊やり哉 (句帳)

何でもない句である。フン左様かとほゝゑまれる句である。サツと大雨がして来て、軒先に居た蚊まで逃込んで來るので、薄暗い室内は急にうるさくなつて來た。それで、戸口の蚊を防ぐために蚊やりを一寸敷居の上に乗せて、自分は端近に蹲つて明るい雨のしぶきでも眺めて居る。

然し、何でもない日常生活の中から常に興味を見出して行くことは、作者の不斷の精進に依ることだ、一茶のやうに根強い性格を持った人でないとなかく續かないと思ふ。一茶は實に、鋭い感受性を絶えず蜘蛛のやうに身邊に働かせて居た人であつた。それだけに、吾々の生活に即した多くの作を残して居る。

〔一一一〕蚊柱の穴から見ゆる都かな (七番日記)

ごろりと寝そべつて、軒の蚊柱を眺めながら、人間世界を小馬鹿にした氣持でニタリ／＼とやつて

居るやうな、作者の皮肉な興<sup>き</sup>がり<sup>が</sup>が面白く感ぜられる。尤も、作品を解するに當つて、作者そのものにのみこだはり過ぎることは正しい見方でないが、同時に、斯んな句は作者の性格境遇を度外しては全く味の無いものになつて了ふ。

この句は、季吟の「地主<sup>ちしゅ</sup>からは木の間の花の都かな」を母體として居ると思はれる。地主は地主權現を指して居る。古句をもぢつてあると見る時に、一層製作動機の剽輕な氣分が確かめられる。

○  
〔一二二〕 手<sup>て</sup>を<sup>を</sup>す<sup>す</sup>り<sup>り</sup>て<sup>て</sup>蚊<sup>蚊</sup>屋<sup>屋</sup>の<sup>の</sup>小<sup>小</sup>隅<sup>隅</sup>を<sup>を</sup>借<sup>借</sup>り<sup>り</sup>に<sup>に</sup>け<sup>け</sup>り<sup>り</sup> (句帳)

斯ういふ句が、藝術としての價値を云々されるに足るものかどうか疑はしいと思ふ。

「手をすりて」は、揉手の意。どうぞ／＼と小腰をかゞめる卑屈な身振である。これは一茶の自傳の一部であるには相違ない。旅から旅、他人から他人の中へ身を寄せて居た卅六年の漂泊の間には、蚊屋の小隅に手足も押し兼ねて明すやうな夜もあつたらう。然し、作者の實生活を知らうとする要求以外には、私達はこの句から何の詩的感興も受けない。私達は同じ人間であることから、同情よりも、寧ろこの句から齎されるものは恥しさと、不快な慘しさである。どうぞもう聞かせて呉れるなど云ひ

たい氣がする。

○  
〔一二三〕 か<sup>か</sup>は<sup>は</sup>ほ<sup>ほ</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ば<sup>ば</sup>汝<sup>汝</sup>と<sup>と</sup>兩<sup>兩</sup>國<sup>國</sup>へ<sup>へ</sup> (七番日記)

浴衣氣分の夜の兩國橋は、今も猶、殊に江東に住む者に取つては十分魅力を持つ場所である。脹れ上つて来る満潮に、對岸の灯影が靜かに揺いで、青い灯を點じた傳馬船が音もなく滑つて行く。川上は模糊として、遠く廣告塔の明滅するばかり、恰度湖を見るやうな感じである。時には躍出し舞臺のやうな龜清柳光亭あたりの樓上に雛妓の影がさして、弦歌の聲の流れて來るのも夏の夜めかしい。然し、江戸時代の兩國はそれとは違ふ。各種の飲食物は元より、芝居講釋手品物眞似、床場までも備つて居て、小遣錢さへあれば兩國は夜も晝も中分ない民衆的歡樂境であつた。橋畔に並ぶ茶店からは若い女が客を呼んで居る。夜は藪を抱えた「よたか」も出て來る。

91  
一通り兩國橋の繁榮を考慮に置けば、この句は譯なく解せる。恰度蝙蝠の出かける頃の、暮方のそそれ氣分である。然し、この句は鑑賞者が一つの氣分を作つて迎へ入れて呉れないかぎり、それ自身價値のないもので、作者はたゞ氣分の暗示を與へて居るに過ぎない。斯ういふ句は、得て概念のお

化けとなり易い傾きを持つて居る。

○  
〔一一四〕け。ふ。の。日。も。棒。ふ。り。虫。よ。翌。も。又。(おらが春)

棒ふり虫は子子のこと。前書に「日々懈怠不<sub>レ</sub>惜寸陰」とある。

一茶の生涯を通じた氣持がよく出て居ると思ふ。呑氣な時代だつたとは云へ、一茶には定業といふものがなかつた。人馴染の悪い一茶は、俳諧師として人に取入ることも下手であつたらうし、一部の如く宗匠として門戸を張るだけの世才も無論なかつた。恰度今云ふプロ文士の格で、今日は今日、明日は明日と、覺束ない氣持で暮して居たのが一茶であつた。生涯安住といふものがなく、然も安住して居たやうなのが一茶であつた。その安定不安定な氣持が、坐五の「翌も又」によく語られて居る。

これも「おらが春」の中にある句で、この句の頭註に朱文公の勸學文を引いてあるが、詩の慨嘆に對してこの句の飄逸さは、よく一茶の面目を彷彿させると同時に、詩人對俳人の俳人らしさが示されて居る。一體俳人といふものは「べらぼう」なもので、その「べらぼう」は恐らく日本人特有のもの

で、迷惑でも、私達の血の中にも多少とも「べらぼう」の分け前の流れて居ることも否定出来な。この「べらぼう」の解せない限りは、學者知識が寄つてたかつて、文法にあてはめて見ても、文學論で量つて見ても、禪で尺を取つて見ても、俳諧といふものゝほんとうの味には觸れ得ない筈である。芭蕉にしても同じことで、芭蕉の發句だけは四角四面な理解眼を以て透視し得るとしても、一度芭蕉の連句に行つて見れば、其處にグツとくだけた芭蕉の面影を見出すであらう。芭蕉も「べらぼう」のお仲間には漏れぬ。新しい言葉に従へば「ルーズ」とでも云はうか。

○  
〔一一五〕早。少。女。や。箸。に。か。ら。ま。る。草。の。花。(おらが春)

植ゑかけた早苗に風の薫る田の畔の空地に、打寄つて晝餐を開く。各々が草の中に腰を下して、大きな握り飯を抱え込んで、お菜はひじきと豆の煮たのもであらうか。小ざつぱりした田植の仕着せ着物に紅い襷をした娘が、お菜の方へ手を延さうとする拍子に、娘の箸へ草の花が絡りついた。草の花は、此處では特に美しくもない雑草の花の謂である。

田園詩の一章として野趣津々とも評したいが、私にはどうもこの句から生々しいものが感ぜられな

い。この句には景色は見えて居るが感情の流れがない。一茶ほどの人が、これほどの題材を捉へて斯んなにかさくした詠み振りをして居るのは、恐らく、野趣を掴まうとする意企を先立て、作句した爲に、観察が観察に終つて了つたのではなかつたかと思はれる。

〔一一六〕 起々<sup>おろろ</sup>の慾目引張る青田哉 (おらが春)

一番草を取り終る頃から、一日々々と目に見えて延び進んで行く青田。日照込めば照込むだけ、肥料に氣を付ければ氣を付けたゞけ、ぐんぐんと黒味を帯びて来る青田。朝毎に、眼を醒せば先づ不用意におのが青田の方へ注意を牽かれる。左様した農民の心持は、殆ど無我と云つてよい。農民ならでは知ることの出来ない純眞な愉快境であらう。

慾目以上の氣持を敢て慾目と云つてあるところは、調子をグイと引下げて、其處に特殊な強味を持たせる一茶の持味である。青田を苦もなく擬人化して「引張る」と、能動的に扱つてある處にも一茶の特色がハツキリと出て居る。繰返し繰返さるゝ農夫の動作なり心持なりが、實に巧に表現されて居る。

〔一一七〕 湯の瀧も同じ音なり五月雨 (句帳)

とうくと降りしきる雨音に、單調な湯瀧の音の和して聞えて来る五月雨の湯宿の佗しさ。

前書はなくとも、温泉滞在中の吟であることは明かである。一茶の郷里の近くには温泉が多いため、彼の晩年は、門人希杖其秋父子を有する湯田中温泉をはじめ、時折其處此處と入湯を試みて居る。この句は何處とも限らない。骨の心まで腐らされて行きさうな五月雨の鬱陶しさを扱つたものであるが、中七の「同じ音なり」が、少しく理に墮ちて居て、作者の望んだであらうほどの効果をあげて居ない。由來、即興詩人としての素質を多分に有する一茶が、永續した氣分を扱つたものゝ中に、比較的柔句の認められぬのは無理ならぬことである。

〔一一八〕 五月雨も仕舞ひのはらり哉 (おらが春)

あがらうとしてあがり兼ねて居る五月雨の終り頃の天象である。重く覆ひ被さつて居た空も何處か

らともなく動いて、一方には雲切れがして、今にも陽の射して来さうな明るさを見せて居る。時候は急に蒸し／＼して来る。それでも猶未練げに低迷して居る雨雲は、思切りの悪い雨を時折はらり／＼と降らせて居る。然し、利かない小言のやうに、人間はもう雨などにお構ひなくすつかり晴氣分になつて居るのである。

天象を心あるらしく扱つて居るところ、又左様感ぜさせるところは一茶の手腕である。「はらり／＼」といふ宛らの調子は、天象を呑んでかゝつて居るやうな餘裕を見せて居る。老巧と云ふべきであらう。

○

〔二一九〕入梅晴や二軒並んで煤拂（おらが春）

二軒家といふことを頻りに云つて見たかつたらしく、

春立つや二軒つなぎの片住居

五月雨や二軒して見る草の花

二軒家や二軒餅つく秋の雨

等がある。

弟仙六と棟を割つて住んで居て、久しいいさかひの後のやうでもなく、朝夕睦しく行通ひして居たらしかつた故かも知れないが、それは如何でもよい。

これから眞夏を迎へようとする梅雨晴れのカラリとした空の下で、隣合せの家で氣を揃へて大掃除をやつて居る。大きな自然と小さな人事との、其處に、何とも云へない親しい繋りを見せて居る。なるほど一茶のよろこびさうな題材である。

○

〔二二〇〕寐せつけし子の洗濯や夏の月（發句集）

平凡な人世の姿である。

作者も觀賞者も、複雑から單純へ、動から靜へと動いて行くのが普通の順序であるが、一茶も亦自然のリズムに従つて居る。彼の晩年の作には、往年の奇才を何處に潜めたかと思はれるほど、一見平々凡々な作を多く見る。然も、單純化せば單純化すほど、平凡となればなるほど、吾々に近いものを残して居るのが、人事の描寫に終始した作者の特色である。

水のやうに漲る月光の下に、やう／＼子供に寐かした女は、小せわしく、然し、僅の暇を得た

ゆつたりとした氣持で洗濯して居る。じやぶくじやぶくといふ單調なリズムが澄切つた夜氣を透して聞えて来る。大自然の下の、それは何といふ小さな人間の姿であらう。然も、餘りに吾々に近いためにうつかりして居たやうな、人間生活の底を流れる敬虔な感じ、美しいものを、吾々の眼に近く展げて見せて居る。

○  
〔二二二〕なぐさみに藁を打つなり夏の月（おらが春）

身の引締るやうな秋の月とも違つて、天地一杯に悠々と照り渡つて居る夏の月に對して、たゞ見て居るばかりでは何となく物足りなく思はれるやうな、どこやらボンとした感じを捉へて居る。

然し「なぐさみに藁を打つなり」と、丁寧に斷つてあるところは、やはり主觀にこだはり過ぎる臭味を脱して居ない。どうかすると、自らを畫中の人と見ようとする意圖があるかにさへ感ぜさせられる。天保調の嫌味は既にこんなところにも胚胎して居る。

此處で一寸考へさせられることは、若しこの境地へ芭蕉を置いたらばといふことである。芭蕉ならばもつと飄々とした氣分を出す筈である。要するに一茶は何處までも地上を這つた人であつた。眞に

風狂といふ言葉は一茶には適さない。

○  
〔二二三〕短夜の竹の風癖直りけり（旅日記）

もさくと風に揉まれて、竹の葉と葉と絡り合つて、先の方がうなだれかゝつて居た景色を作者は眼に残して居た。それが、明け易いしらく明けにふと見ると、夜の間にスツキリと癖が直つて、曉の薄霧の中に多分に露を含んで、爽快そのものゝやうにすくくと立並んで居る。これは竹藪でなく、庭の隅などに一むら植ゑられてある竹と見たい。「短夜の竹の風癖」といふ言廻しは、非常に舌觸りよくこなれて居る。句意は「短い夜に竹の風癖が直つた」の意であるが、「短夜の」の文字に、作者の眼に残つて居た景色と、眼前の景色とを聯絡させる時間的經過が含まれて居て、單なる寫生でなく、瞑想の深味がある。或る段階にある句で、晩年には反て斯うした行き方をした作を見出せない。

兎に角、人事の描寫を得意とする一茶にも、一面自然詩人として亦ゆたかな天分の恵まれて居たことを思はせる。

〔一二三〕 法談の手真似も見えて夏木立（發句集）

蕉門の去來の句「涼しさの野山に滿つる念佛かな」を、眼で行つたやうな趣きがある。

木の間から遙に寺の本堂の透いて見える様と見てもよい。壇上に立つ僧侶の法衣から現れる顔と手先だけがほの白く見えて、法話の調子につれてその手先が上つたり下つたりして居る。聴衆は水を打つたやうに静まり返つて居る三昧境である。「手真似も見えて」の中七に依つて、軽い客觀描寫となつて居る。

宗教的な主觀を交へずして、宗教上の場面（シーン）のハッキリと描かれてあることは珍しい。非常に爽やかな涼味の感ぜられる作である。

〔一二四〕 赤い葉の榮耀に散るや夏木立（おらが春）

「榮耀に散る」は、贅澤に散るといふ程の意。

夏木立の中に散る赤い葉と云へば病葉で、理窟から云へば淋しい方の聯想を誘ふ性質のものである。

が、作者の因れない主觀（寧ろ科學にこだはらない香氣さ）と、言葉の威力に依つて、暗綠色の夏木立を縫つてひらくと舞ひかゝる赤い葉の美しさが宛らに印象される。この「榮耀に散る」に、一句の焦點が極つて居る。

此處では既に技巧を超えて、言葉が念寫の形式を以て現されて居ると思ふ。作者の詩境の羨むべきものがある。

〔一二五〕 麥秋や子を負ひながらいわし賣（おらが春）

「越後女旅かけて商ひする哀さを」と、前書してある。

麥秋は夏の題である。前年の冬蒔いた麥が恰も夏時熟するので、この名がある。これと同じやうな謂れで、「竹の春」「竹の秋」も、竹の葉の盛衰に依つて、季節の春秋と反對に名づけられた季題である。

扱麥秋と云へば、舊曆五月の節を挟んだ梅雨近い頃で、やゝ濕りを含んだ土からむんぐと熱氣の立登るやうな季節である。赤く熟れた麥の中を、飛白の着物に黒い肩當をしてつまをり笠を被つた越



後女が、子を負うた上に天秤棒をかついで、それも傷み易い生鱒を荷つて急いで行く姿は、生活苦の喘ぎそのものである。然もこの句から受ける感じは、單に生優しい哀れさではなく、鬱勃とした初夏の自然を背景とした人間の惨しい力強さが示されて居る。斯ういふところから詩を擲んで居る作者は、さすがに凡俗の俳諧者流から超脱した地歩を占めて居たと思ふ。

今も越後女は遠く旅商ひにいそむが、殊に、昔柏原邊では多く越後から食料品の供給を仰いたもので、斯ういふ女達が年中、若布、昆布、鱒、鹽鮭などを持つて訪れたさうである。

○

〔二二六〕 虫にまで尺とられけり此はしら。(おらが春)

前書に「幽栖」とある。

前書に説明されて居る通り、非常に静かな氣分を扱つたもので、しみんと心の澄んで行くやうな環境を偶々一疋の尺とり虫に依つて、具象化して居る。一本の柱を、何の目的とも知られず克明に尺取つて行く可憐な虫の姿を、凝と見守つて居る一人の人間の姿を思ふ時には、微笑を含んだ寂しさを感ぜさせられずにはおかない。

だが、元々斯うした主觀を主とした氣分を扱つた作は、作者と氣分の交流を俟つて初めて解せらるゝもので、この句に於ける「虫にまで」の如く、感動を強うる語は反て邪魔になるものである。其點、未だく幽邃な環境を語るべく、しかく一茶は垢ぬけて居なかつたとも云へば云はれる。

○

〔二二七〕 さし柳螢飛ぶ夜となりけり。(七番日記)

一茶としての特色を云々される句ではないが、正風俳諧の所謂細みを傳へて居る。さし柳は挿木の柳で、たゞこれだけの言葉で、すらりとした小さな柳の姿が想像される。閑素な柳に對して「あゝ今年も既に螢とぶ夜となつた」といふ軽い詠嘆もわざとらしくない。初螢の清澄な可憐な感じと、さし柳の若く頼りなげな風情とは自然の調和を成して居る。自然の調和を見出すことは作者の詩的天分に依る。一茶の特色は寧ろ不調和な物の中に調和を見出すといふやうなところにあるのだが、「我が死後は蕉風を學べ」と、弟子達に言聞せて居たやうな彼に、時としてこのすらりとした作風のあることも怪しむに足りない。

この句の持つ感じが、長い間作者の心を惹いて居たと見えて、類句と見るべきものに

螢よぶ夜のれうとやさし柳  
 六月のゆふべをあてやさし柳  
 六月の月のさせとやさし柳

これ等は然し習作に過ぎない。「さし柳螢とぶ夜」に至つて、初めて作者の前に閑雅な俳境が拓けて居る。

○  
 「二二八」二。三。遍。人。を。き。よ。く。つ。て。行。く。螢。 (おらが春)

「きよくつて」は即ち曲るの意で、ゑぐるとかしやくるとか云ふのと同語義である。

螢が闇に大きく弧を描いて、二度三度人の眼の前を掠めておきながら、其儘スーッと飛んで行つて了ふ風情である。

同じ情景を扱つたものに、

とぶ螢その手は喰はぬくくとや

といふのがある。この方が軽味と滑稽味を持つ所謂一茶調を備へて居るが、然し「二三遍」の方が遊

戯氣分を離れて鋭い寫生を試みて居る。

「きよくつて」は、多分一茶の新造語であらう。何といふ直接に迫る巧な用語であらう。

○  
 「二二九」大。螢。ゆ。ら。り。く。と。通。り。け。り。 (おらが春)

詩作は要するに對象と言葉との交渉、對象と文字との交渉である。言葉の洗煉も文字の選擇も、對象の生命を掴まうとする努力を外にしては存しない筈である。

「大螢」といふ印象的な上五に對して、重味と翳ほひを表示する中七の「ゆらりく」は、實によく利いて居る。由來一茶は、俗語の副詞の使用法については獨特の妙を得て居る。そして、若しもこの坐五の「通りけり」を、飛んで行くとか、飛びにけりとかいふ軽い語と置替へて見たら如何だらう。

俳句を以て自己の持つ唯一の文藝として精進して來た人でなければ、斯うしたびつたりとした表現はむづかしいと思ふ。

〔1110〕初瓜を引とらまへて寐た子哉（おらが春）

「引とらまへて」といふ一つ踏ん張つた力強い言葉を持つて来て、瓜を抱えて寐た子の姿態、健康な子供の紅い頬べたまで彷彿させる。初瓜——初真桑であらう——をよるこんで、さんざ弄んだ果にその瓜を抱えて寐て了つたと云へば、その子の背景をなす生活状態も略々見當がつく。「引とらまへて」は、同時に、子供の境遇を語つて居る語でもある。斯ういふところに方言或は俗言の抜きさしならぬ用途がある。いつも細心な洗煉の結果とは云へ、用語の選擇については、作者は確かに恵まれた天分を持つて居る。この點では一茶を天才と呼んでいゝと思ふ。

一體、文藝の作家を評するに當つて、輕々しく天才といふ語を用ゐるのは、私は或場合作者の努力に對する侮辱だとも思つて居る。一茶のやうに一代に何萬といふほど句を吐き、永く詠誦するに足る多くの作を残して居る作家でも、彼の苦澁、懊惱の跡を辿ると、めつたに天才俳人といふ言葉は使へなくなるのである。

〔1111〕人來たら蛙になれよ冷し瓜（發句集）

錢などを大切にしまつておくと、蛙になつて了ふといふことを云はれて、私の小さい頃なぞよく老人達からからかはれたものである。だが、こゝでは、青く縞の入つた真桑瓜などのぼかん〜と浮いて居る様が、どうやら本物の蛙を聯想させたものであらう。浅ら井にでも放り込んである様と見たい。「人が來たら取られない先に蛙になつて了へよ」と、これから瓜をむいて喰はうと思ふ楽しい氣分で、瓜に向つて輕くほゝゑみかけて居る。

このやうに不用意に出來た句は、又不用意に受入れられて氣持がよい。尤も、絶えず用意の出來上つて居た上の不用意であることは言ふまでもない。

〔1112〕鮮になる間と配るまくら哉（發句集）

この鮮は現今云ふ押鮮のことで、鮮桶に飯を詰めて其上に一端薄鹽にした魚などを置き、更に鹽、酢等をかけて、壓しを置いて馴れるのを待つのである。

隙な男達のころ／＼して居た昔の床場かなぞの気分である。

「鮎の出来る間横になうて話さうぢやないか」よからう」てなことで、順々に枕を配つて行く。ホイキタ、ホイと、受渡してども居るやうな、呑気なチヨン髻時代でなければ見られない圖である。

○  
〔一三三〕手にとれば歩きたくなる扇かな（發句集）

未だ初扇の物珍しい頃であらう。扇も手にとるなり無造作に開いてばさ／＼やるやうになれば、こんなにかく興じた気分は出ない筈である。

この句も謂はゞ扇といふ季題を中心とした趣味感に過ぎないが、然も季題趣味に囚れず、蠱惑に満ちた初夏の憧れ心地のすんなりと出て居ることは愛誦するに足りる。

○  
〔一三四〕寐。譚。の。尻。べ。た。た。く。扇。か。な（句帳）

三百年の太平に馴れた江戸末期の人物を一人拔出して、目に近く見る心地がする。チヨン髻の鬢を

光らせて、肘枕の片手でベタリ／＼と尻べたを打ちながら「その時義經ちつとも騒がす、その時義經ちつとも騒がす……」といふ風に、眼をつぶつていゝ氣持になつて居る。それでも、扇であるだけに譚は殊勝である。但、譚といふも聞きかじり程度の人物でがなあらう。十七文字をたつぷりと活かし得た濃厚な描寫である。

○  
〔一三五〕大猫のどさりと寐たる團扇哉（七番日記）

雀や蛙と共に、一茶はよく猫を叙して、叙し得て居る。

猫といふものは感覚の鋭敏な動物で、木綿の坐ぶとんと絹布の坐ぶとんと置いてあれば、必ず絹布の上に上り込む。何にもなければ、たとへ新聞紙でも團扇でも、其處にある物の上に陣取るのが習性である。「どさりと寐たる」に、大猫の憎々しい態度が見えて居る。乗つて居る團扇の柄をグイーと引抜いて、一つ叩いてやりたいといふ調子である。

〔一三六〕 あんよ。く。く。や。母。を。日。傘。も。ち。 (句帳)

美しい風俗畫を見る心地である。母と子供の一つになつた愉樂の世界。それはこの世に於ける最も美しいものであるかも知れない。

「母を日傘もち」のをは、老巧である。母を日傘もちにして歩くの意で、このをの一字に依つて、身體をくねらせて日傘をさしかけて行く母。母の手にすがつてよちくちと歩いて居る子供の姿が、不可分離に描き出されて居る。試みにをの代りにはの字を置替へて見ると、其處に何分の隙の出て來ることを否み得ない。一句の死命を制するほど恐ろしい力を持つたをの一字である。

これが晩年の作であることは偶然でなく。

〔一三七〕 蚤のあと。數へなからに。添乳かな。 (發句集)

母の乳房にすがりながら、腹がけ一つで手足をバタ／＼させて居る子供。手枕をして乳房を嘸ませながら「オ、斯んなに螿されてまア。」といふ風に、蚤のあとを搔いてやりながら一つ二つと數へて居

る母。母ととの交渉が涙ぐましいまで眞實に迫つて居る。

自分達もそんなにして育てられて來たのだといふことを思遣らせる。

〔一三八〕 蚤の跡。それも。若きは。美しき。 (發句集)

俳句としては珍しい官能描寫である。男か女かといふやうな穿鑿はそも／＼末のことである。方一寸の皮膚でも、官能の中に再現し得れば充分である。濃やかに白く、彈力を持つた肌に、ボツリと紅梅のつぼみのやうに脹れ上つた蚤の跡の可愛くあてやかなこと。然し、現代人は或はこの句に性的の解釋まで施さねば氣が濟まぬかも知れぬ。

斯ういふ句を見ると、一茶の全感覺は、常に獲物を待つて張り切つて居たやうに思はれる。

〔一三九〕 笠の蠅。我より。先へ。かけ入りぬ。 (句帳)

前書に「歸庵」とある。

これは漂泊時代の行脚から歸つて來たのではない。庵には懐しい人が待つて居るのである。一茶の書残したのを見ると、時には八つ當りの憎しみ罵りとも變じて居るが、それだけに又、妻に對してなど並々ならぬ濃厚な愛情が示されて居る。この句はたゞ作者の心を蠅に托したに過ぎないやうな氣がする。久方振りに旅から歸つて來る一茶の心は、身體より先に我家に行着いて居るのである。待ちかねたよろこばしい氣持が、おのづから、坐五「かけ入りぬ」の急迫した調を成して居る。この句の前書は利いて居る。

○  
〔一四〇〕 縁の蠅手をするところを打たれけり (句帳)

「やれ打つな蠅が手をすり足をする」の方が一般に受けられて居て、作者自身も得意として居たやうであるが、私はたゞ自分の好みからこの句を採る。

蠅は屢々前足を摺り合すやうにする。あれは掃除をするのださうだが。その對外の注意のゆるんだ瞬間にパタリと打たれた。この句は作者の特色とする軽味とか滑稽味とかに煩はされず、至純な、緻密な寫生で行つて居るところが頼もしい。

作者の持味とか特色とか云つても、詮じて見れば、或ところまで行着くまでの作者の癖を指したもので、従つて、鑑賞者までその癖にこだはつて、豫め鑑賞の標準をきめてかゝる必要はない筈である。

○  
〔一四一〕 世がよくばも一つとまれ飯の蠅 (おらが春)

メガホンで「蠅取デー」の宣傳をやる今日の世の中には到底通用しない句である。「世がよくば」は、「ことしや世がよい豊年で……」といふ唄もある位で、此處では、具合がよかつたら位の意である。

一體、一茶の屈せられたる愛情が、變則に小兒や小動物の上に強く動いて行つたことは事新しく云ふまでもないが、それが随分極端に、常識外にまで踏出して居る。

飛下手の蚤のかはゆさまさりけり

蚤どもがさぞ夜永だろ淋しかる

盃に蚤およぐぞよく

彼岸とて袖に這はする虱かな

まだく幾らでもあつた。斯ういふ句を見ると、一茶は私達とは大分違つた世界を持つて居たことが思はれる。それと共に、その日常が随分むさくるしかつたらうといふことも想像されるのである。

○〔一四二〕 蠅打てば蝶もこそく立ちにけり (一代全集)

全然主観の移入であるが、パタリと蠅を打つと、其處らあたりに居た蝶が、俺のことではなさうだが如何やら薄氣味悪いといふ風で、逃げるやうな逃げないやうな曖昧した調子でふらふらと飛んで行く様が、直ちに對者の頭の中に再現されるところに、この句の味がある。

この句に限らず、一茶は主観を極端に客観描寫に利用し得た人だとも云へる。

○〔一四三〕 蟬鳴くや我家も石になるやうに (七番日記)

油蟬にせよミンくにせよ、自分の家の近くの梢にでも鳴立てられた日には、頭の鉢を鐵輪で締付けられるやうな堪らなさを感ぜさせられる。然し、油蟬が最も普通の種類ではあり、朝から晩までジ

イくジイく殆どメロディなしに鳴續けて居る點に於て、私は此所に選出する三句は何れも油蟬を扱つたものと解する。

家ぐるみ、自分まで石になつて行きさうな感じは同感である。然し「石になる」といふやうな言葉は、今でこそ格別珍しげもなく使はれるが、百年前の作家としては随分思切つた、獨創的な發想法だつたのだらうと思はれる。

○〔一四四〕 松の蟬どこまで鳴いて晝になる (おらが春)

前句のやうに感じだけを器用に現してあるのとも違つて、この句はもつと時間的に、氣分を深く突込んで居る。

特に「松の蟬」と斷つてあることも、木立の中に擢んでた松に鳴く蟬の、それだけに一層壓せられるやうな堪らなさを如實に感ぜさせる。どこまで……一體いつまで鳴いて居る氣だらう……

「どこまで鳴いて晝になる」は、巧妙な言廻しである。暑さにだらけ切つた身體を、午前中の日永さに持扱つて居る體である。たゞ暑さにだらけたと云ふばかりでなく、何かしら、内面的に惱しいもの

が潜んで居る。ギリ／＼と心身を煎付けられるやうな苦痛は助からないと思ふが、それだけ現代人に迫るところの多い作である。

○  
〔一四五〕 蟬鳴くやつく／＼赤い風車 (句帳)

前二句とは きを異にして、聴覺と視覺とのつながりを捉へて居る。

風車といふものは既に過去の遺物となりつゝあるが、十字或はキの字の白木の軸へ赤い千代紙で作られた車が幾つもついて居て、風が吹くとくる／＼廻るやうに出来て居る簡単な玩具である。赤ん坊のある家では、よく天井裏など 釣されてあつたことを思出す。

脂汗を絞られるやうに、引切りなしに鳴立てられる蟬の壓迫感から無意識に逃れようとする眼の先に、ピタリと映つた風車の赤さ。その赤さが頭の蕊まで沁透るほどあくどく感ぜられたのである。非常に執苦しい感じではあるが、然も、作者の鋭い感覺を通して、不思議に、色と音との調和した世界がある。なるほど日盛りに鳴くジイ／＼蟬の聲を色に現したら、あくどい紅でもあらうか。

○

〔一四六〕 夕月や大肌ぬいでかたつぶり (七番日記)

たつぶりと打水をした庭に、ほのかに夕月のさしのぼる頃、一日の早魃に縮こんで居た蝸牛が、ニョツキリと角を立て、グーイと胸の奥？まで露して、垣の濕りなどを這つて行く姿。

「何等の巧妙！」と云ひたくなる。

然し、斯ういふ派手な句振りは次第に私の趣味から遠ざかつて行く。だが、一茶は斯ういふ句に可なり得意を感じて居たのだつたらうと思はれる。後年の私達の見地から、彼の内面にまで立入つて、悲哀、痛恨を感じ得るやうな作は、寧ろ彼の得意としたものではなかつたのかも知れない。

○

〔一四七〕 涼風の曲りくねつて來りけり (七動日記)

「裏店に住居して」或は「裏長屋のつきあたりに住す」と、前書がある。江戸放浪時代の一記録である。

「曲りくねつて」は一寸皮肉だが、貧しさに住しながら貧しさを享樂して居るやうな、所謂俳人らし



いのほゝんな面影が見える。一茶は随分泣言も云つて居るが、米櫃に米があつて、少し小遣錢でもある間は、矢張りいゝ氣になつて寐轉んでも居た人だつたのだらうと思はれる。この句を私はそれほど哀れッぽい句だとは思はない。

○ 「一四八」 涼風やちから一ぱいきりぐす (七番日記)

きりぐすとこほろぎとの呼び方については、古來混じて居て、今のきりぐすを昔はこほろぎと云ひ、昔のこほろぎを今きりぐすと云ふとも傳へられて居るが、この句は理窟なしに、私達が現在きりぐすと呼んで居る「ギキース チョン」の、一際高い聲を聞く。サツと吹來る涼風のたるみに乗るやうに、腹一杯の力を籠めて「ギキース チョン」とやる。

一茶の句としては稀に見るカラリとした感じで、思ふことを吐出して了つたあとの、胸のスツとすくやうな氣持がする。愉快な句である。

○

○ 「一四九」 涼しさや糊のかわかぬ小行燈 (發句集)

「新家賀」と前書がある。

前書を見ると、時宜に適した詠み振りに作者の才氣が見えるが、前書はあつてもなくても、濡れた行燈に灯の入つた薄暮の、眼を細めさせるやうな涼しさがこの句の生命である。

一茶と同時代の大阪の俳人で、彼と交友も浅くなかつた有名な大江丸の作に、「行燈の糊につたふや冬の蠅」といふのがある。人事詩人として伯仲の間にあるとさへ評されて居る兩雄が、同じく行燈の糊を取材として、一は濃厚に、一は瀟洒に、人情の機微に觸れて居る點に、偶然の符合を見るのも奇である。

○

○ 「一五〇」 青草も錢だけ戦ぐ門涼み (おらが春)

「江戸住居」と前書してある。

石の上の住居と云はれる市井の生活の急所を突いて居る。門涼みの料に、一日の炎熱に苦しめられ

た眼の保養に、一つ二つ宛並べられてある縁目物の鉢物なども、今のことにすれば十銭は十銭だけ、廿銭は廿銭だけの大きなり美しさを示して居るといふので、例の皮肉な觀察ではあるが、これは寧ろ、自身都會の生活苦を味つた作者の眼に映じた、都會生活の裏を流れる悲哀をうたつたものと解したい。同じ一茶の作に「錢なしは青草も見ず門涼み」といふのもあるが、略々同想ではあつても、「錢だけ戦ぐ」の方が鋭い摺み方をして居る。

○  
〔一五二〕 寐。並。んで。遠。夕。立。の。評。議。か。な。 (おらが春)

農家の晝休み時でもあらうか。薄曇りして急に涼しい風が吹出して來た。オヤと思つて気がついて見ると、遠くの方の空は今夕立がして居ると見えて、一團の雨雲が暗澹として垂下つて、幽に稻妻の走るのさへ見えて居る。

「あれは何處だんべえなあ、川向ふかな。」

「アーニ、今ツと近かんべえ。南河原だんべえ。」

廣い座敷にゴロ／＼と寐そべつて居る男達は、てんでに頬杖をつきながら夕立の評議をやつて居る。

言外に見渡しの廣さの見えるて居ることは面白い。

純客觀に扱つてあるために(よしや作者がその人物の一人であらうとも)非常に呑氣な情趣が出て居る。

○  
〔一五三〕 な。を。暑。し。今。來。た。山。を。寐。て。見。れ。ば。 (おらが春)

「田中河原如意湯に晝浴みして」と、前書がある。

田中河原は、柏原から東南を指して山越しに湯田中へ行く途中の、函山峠を越えたところにある温泉地の名で、如意湯は野天の温泉ださうである。

ヤレ／＼といふ氣持で湯槽の中に手足を延しながらも、目の前に今越えて來た山の聳えて居るのを見ると、盛夏の山越えの苦痛が更に蘇つて來て、湯に浸つて居る肌からジツと汗のふき出して來るやうな堪らない暑苦しきである。

それだけのことで、何の奇もないと云へばそれまでであるが、この率直な叙述の前には動かし難い眞實さがある。

〔一五〕 路の葉にぼんと穴あく暑さ哉 (發句集)

虫害のために路の葉に穴があいたのであらう。少し氣をつけて見ればよく出逢ふ景色で、別段新しい見つけ處といふでもないが、たゞ、眼前の景色をそのまま、何のこだわりもなく氣分の中に取り入れて居ることは、矢鱈には真似られない境地であらう。

路の葉に穴のあいて居るのを見ても暑苦しいとか何とか説明したいものであるが、理窟なしに、目の景色にホツと氣分を吐かけて居る。そして又理窟なしに作者の氣分がそっくり受入れられる。長い修練に依つて達し得た句境ではあるが、斯ういふ句を見ると、私達の持つ不完全な言葉の多數が寧ろ呪はしくなる。

○  
〔一五四〕 風あるをもつてたふとし雲の峰 (おらが春)

蒼空の彼方に、雪白な山のやうにむくくと立つ雲の峰。それが若し固定したもの、動かないもの

ならば、私達の眼にペンキ塗の背景のやうに味なく映るであらう。試に、偉大なる雲の峰に對して深く眼を止めて見ると、動くでもなく動かないでもなく、殆ど静止状態にありながら、然も絶えず形を變へて、崩れ、擴り、尖り、或は離れて行く。その動くといふ説明を避けて「風あるをもつて」といふやうな間接な辭句を置いた作者の句作用意は味ふべきである。

但、後に氣のついたことであるが、實悟教開卷第一に、「山高きが故に尊からず木あるを以て尊しとなす」とある。この句の發想は、この實悟教の文句から暗示を得て居るらしい。

○  
〔一五五〕 蟻の道雲の峰より續きけん (おらが春)

私はこの句から非常に悠長な、寧ろ氣だるい氣分を受取る。

例へば、作者は青草の上にもどつさり、と腰を下して、遙の野の果てに立つ雲の峰にうつとりと見入つて居る。その眼を靜かに靜かに足許の草地に移すと、其處には、雲の峰と作者の視界を繋いで、倦むことない蟻の列が續いて居る。炎天の蟻の列は、時として人の心を焦燥に、時として空想に導いて行く。「續きけん」といふ推量と詠嘆を含む坐五は、蟻の列と共に曳かれて行く眞夏の夢を思はせる。

作者の夢は暫く蟻となつて、遙に野を越えて雲の峰の中にまでさ迷つて居る。然し、發想動機の微弱な故か、人の心を共に夢に引入れて行くだけの力はない。

○  
〔一五六〕 丘の。家や。蓮に。吹かれて。夕茶漬。 (發句集)

初案「誰が家や」とある。

一茶を煩はすまでもなく、少し俳句に身を入れた人なれば直きに出來さうに思はれる句だが、さすがに中七の働きは凡手でない。すがすがしい水郷の描寫である。

○  
〔一五七〕 蓮の。葉に。この。世の。露は。曲り。けり。 (おらが春)

物事を一つひねくつて見たい、所謂繼子一茶の癖が出て居る。粒々置く蓮の葉の露の、二粒三粒ころくくと相寄る拍子に、曲玉のやうないびつ形が出來上る。

「フン、露の玉まで曲つて御座るは。」

そんな風に思ひながら、煙草でも吸ひながら苦笑して居るやうな一茶の角張つた顔が思はれる。だが、好きにはなれない句だ。

○  
〔一五八〕 母馬が。番して。吞す。清水哉。 (おらが春)

「小金原」と前書がある。放牧を詠んだ句である。

私は曾て鹽原に遊んだ際、手綱を曳かれて行く牝馬のあとから子馬のついて行くのを見たことがあるが、無邪氣な子馬が彼方へつつかゝり、此方へつつかゝり、道草を食つて居ると、その度び母馬が心配して、紐で打たれても動かずに居るのであつた。そのことを思ひ起すと、この句も決して拵へでなく、作者の見たまゝの感じを素直に叙したものであることが判る。

然し、馬の姿にばかり執して背景が閑却されてあるために、前書を除いては野馬としての感じも充分でなく、全體として句が生きて居ない。たゞ擬人の面白さだけで喧傳されて居る句である。

## 〔一五九〕馬の子が口つん出すや杜若（發句集）

前句に比較すると非常に印象が鮮かである。輕快そのものゝやうな馬の子が、デリケートな首筋を延して、叢の中に一もと咲いて居る杜若を一寸吟味するやうに嗅いで見る。「つん出す」といふ言葉に、いかにも他意なげに尖つた鼻づらをチョイとつき出す馬の子の動作が見えるやうである。杜若といふ對象も、若々しい馬の姿と對照されて、フレッシュな印象を深める。癖のない寫生句である。

○

## 〔一六〇〕故郷やよるもさはるも茨の花（七番日記）

この句は元來偶意であつて、従つてこの茨の花は棘の意味にのみ扱はれてある。周圍に對する憎惡怨恨の最も露骨に表示された作である。

斯ういふ句は抹殺して了ふ方が作者のために忠實なやり方かとも思ふが、七番日記にあるばかりでなく、麗々と扇面に書したものでまで残されて居る。その前書に「柱ともたれし名主嘉左衛門といふ人

に、あが佛の書一紙いつはり取られしものから、魚の水に放れ、盲の杖もがれし心地して、頼む木蔭も雨降れば、一夜やどるよすがだもなく、六十里來りて、墓より直ちに六十里外の東へ踏み出しぬ。」とあつて、特に「まゝ子一茶」と署名して居る。

一茶と異母弟仙六との遺産争ひは享和元年五月父彌五兵衛病歿の當時より始つて、文化十年一茶五十一歳にして郷里へ引退の運びに至るまで、前後十三年間續いて居た。其間にあつて、名主嘉左衛門等は兩者の間に立つて調停を試み、文化五年十一月に、一先づ遺産全部（と云つても餘り豊かならぬ家屋田畑山林等）を折半することに取極めて、その約定書を取換さしむると同時に、一茶所持の父の遺言書を名主の手に預つて了つたものであらう。「あが佛の書一紙」とは、その遺言狀を指して居る。然るに其後も異母弟繼母等は約束を履行せず、越えて翌々年即ち文化七年五月一茶が歸省した時には、待遇も非常に冷やかで、一茶は我が家に宿することも出來ず、暮參したばかりで、他家に一泊して其儘江戸に引返した。その時の憤怒の餘り成つたのがこの吟である。

一體、一茶の生前は餘り郷黨に容れられなかつたやうである。旅にばかりあつて、殊に、自活の道も覺束ないやうな風來人の一茶が、よしんば相當に名聲を博するに至つてからでも、猶郷黨の間に重んぜられなかつたといふことは察するに餘りある。然しこの間の消息を窺ふためには、今は大方彼自

身の残した記録に頼るのみである。

私は生一本でむら氣で、その上案外見え坊であつた彼の記録の總てを其儘に承認することは出来ない。繼母に對する反感でも左様である。元より一茶の繼母は無教育で貪慾な一個の農民の妻に過ぎなかつたらう。然し、事々にあれほど激しい呪ひの言葉を浴せなくともよかつたらうと思ふ。特に父の終焉日記などを見ると、血で血を洗ふ淺ましさに、悲痛を通り越した悪感をさへ禁じ得ない。よしんば理解あり教養ある婦人にしても、一茶のやうに天才的の鋭い感情を持つひぬくれ根性の繼子を持つたことは禍である。私は女性として、繼子のために悪名を流す一茶の母のためにも一掬の涙を惜しめないものである。

私は柏原へ行つた時、一茶の異母弟の遺族、及び名主嘉左衛門の宅も堂々と現存して居るのを見て、一種の氣の毒さを禁じ得なかつた。

○  
〔一六一〕 晝顔やほつぽと燃える石ころへ。(おらが春)

「淺間山」と前書がある。

淺間山道晝顔咲いて石に泌み込む通り雨

會て新聞の讀者文藝欄で見た俚諺正調を記憶して居るが、恰度同じ場所を扱つたものである。然し、この句は場所の輪廓を前書の方にはみ出させて、「ほつぽと燃える」といふ極めて直接的な、印象的な叙法を取つてあるために、非常に力強いものとなつて居る。樹蔭もない、水もない、淺間山麓の熱氣をさながらにこの句は吐いて居る。然も、坐五「石ころへ」は、熱砂を這ふ晝顔の惨しい生への執着を描いて、一句を一層粘り強いものにして居る。作者の性格に根ざした深刻な表現である。

○  
〔一六二〕 夕顔の花で涙かむおばい哉。(おらが春)

夕顔の花のふんだんにあることを示したもので、野趣のある取材であるが、この句も一つの思ひ付きに執した作例である。

朝顔の花で涙かむ女かな  
夕顔の花で涙かむ娘かな

何れも七番日記にあつて、明かに作爲の跡を語つて居る。

私は斯ういふ穿鑿を作者のために氣の毒に思ふ。少くとも作品の上で作者をよく傳へるためには、私は七番日記なぞ世に出なかつた方がよかつたと思つて居る。然し、作者をほんとうに理解するため、又、本質以上に見られて居ることが眞の意味に於ける幸福でないといふことなぞを思ひ返すと、僅に、作者のために慰められもする。

## 秋の部

〔一六三〕 露の玉つまんで見たる童かな（おらが春）

「奴さん馬鹿におとなしいが何をして居るのかな」と思つて注意して見ると、やうやく獨り歩きの出來る位になつた子供は今、しつとりと露の置いた叢に向つて何か考へ込んで居る。何をするかと思ふと、やがて、こわく側へ寄つて、葉末に圓く脹れ上つて居る露の玉をソツとつまんで見た。見て居る人の顔に、莞爾として微笑が湧く。

〔一六四〕 甘からばさぞおらが露人の露（句帳）

卑しげな思ひ付きを遠慮もなく打出して居るところが一茶である。句意は、若しも露が甘いものならば、さぞ俺がのだ汝われがのだと喧嘩をするだらうといふので、句意を通して、露の置渡す野と、其處に營まれた人間生活との賑かな繋りが感ぜられる。そして、うまさうな露の玉の粒々が聯想の中に活わがされて來ることも面白い。

この句の句意は、何よりも眼前の景趣から引出される子供らしい感じを其儘にうたつて居るところにある。そして、作者の感じを通して吾々の中に眠つて居る子供心と呼び醒さされることに、猶詩として存在の場所がある。これと似た行き方をして居ても、「初雪やこれが鹽なら大まうけ」とかいふ誰やらの口すさびを、藝術品として認める人はあるまい。

○  
〔六五〕 白。露。に。さ。ぶ。と。ふ。み。込。む。鳥。哉。 (七番日記)

朝の景色である。水分に飽満した草原一面は、今や極度の輝しさと、一寸觸れられても破られて了ふであらう深い沈黙の中にある。と、その時何處からともなく鳥がばさ／＼と飛んで來た。「あゝッ」と思ふ間もなく、鳥は一向お構ひなくさんぶと叢の中に飛び込んで了つた。その「あッ」と思ふ刹那

の感じが、「さぶ」といふ語にハッキリ響いて居る。一茶の感覺の鋭さを思はせる。

さぶと飛び込むと云はずに「ふみ込む」と云つてあることも、擬人法に馴れて居る一茶の慣用法として不思議はないかも知れないが、「白露」から受ける張切つた脆い美しい感じを、飛び込むといふやうな粗野な語に依つて荒されまいとする周到な注意が窺はれる。「さぶと」に、叢の深さと露の重さが感ぜられ、「ふみ込む」に、鳥のからだのヒョイと浮び上るやうな軽味がある。靈妙な辭句の配置に驚かれる。妙句と云ふべきであらう。

○  
〔一六六〕 笛。ふ。いて。白。露。い。は。ふ。在。所。哉。 (七番日記)

この句を靜かに讀み碎いて、冥想すると、非常に賑かな聽覺と視界が同時に展けて來る。何よりもよろこばしいことは、この上五、中七、坐五のしつくりとした繋りである。「笛ふいて」に、既に一句が踊つて居る。「白露いはふ」とある中七に依つて、露もたわ／＼に申し分なく出來た田の面を想像させる。

盆前の踊の仕度に、夜な／＼若衆達が打寄つて其處此處で笛の稽古をして居る。



ピー／＼ピーヒヤララ ピーヒヤラピーヒヤラ ピーヒヤラ

鄙びた音律が、白露の置渡す野面を傳うて豊年の表象のやうに響いて来る。肌に心地よい風の吹く頃である。

○  
〔一六七〕 人。間。は。露。と。答。へ。よ。合。點。か。 (發句集)

「男女私にちぎりて夜ひそかに逃げ行くを教訓して」と、前書がある。

白玉か何ぞと人の問ひし時つゆとこたへて消なましものを

これは伊勢物語にある歌で、或男がひそかに高貴の女性を盗み出して野路を行く時、背に負はれた女は、道芝におく露の玉の光るのを見て「何か」と問うた。やがて女を奪はれて了つた時、男の嘆いて詠んだ歌である。

句意は 物語にあるやうにドチを踏ますに首尾よく逃げ終せよの意である。本歌から脱化させた手際は頗る鮮かである。

この句の主人公は知 よしもないが、一茶は隣村野尻の門人關之と某家の下女との戀を取持つて、

折々二人を草庵に招き寄せて逢瀬を楽しませたといふ逸話が傳つて居る。現に「七番日記」文化十一年五月四日の記事に「今夜關之契下女於草庵欲爲同枕有障殘書關之歸野尻而後下女不來」とあるのを見ても事實であつたらしい。對人關係に於て可なり氣むづかしかつたらしい一茶が、一面に於て斯うした逸話を残して居ることは、興味ある問題である。

○  
〔一六八〕 け。さ。ほ。ど。や。こ。そ。り。と。落。ち。て。あ。る。一。葉。 (七番日記)

一葉は多くの場合桐一葉を意味して居る。

ガラリと雨戸を明けて、朝顔でも眺めながら庭下駄を引摺つて居ると、ふと足許に桐の一葉が落ちてあつた。一葉落ちて天下の秋を知る桐一葉には大袈裟な叙詞が多く用ゐられて居るが「こそりと落ちてある」は、いかにもしめやかな朝じめりの土に、知らぬ間に落葉して居たことを思はせる。「けさほどや」は、おのづから事新しい秋の朝の感じを出して居る。

一寸見は飄輕な調子であるが、よく玩味して行くうちに、いつか諧謔の裏に行く作者のしんみりとした心持ちが感ぜられて来る。

○ 「一六九」 たのもしや未だ薄暑き三日の月 (發句集)

ネルを着ては少し汗ばむほどの、肌の香の強く立つやうな宵である。

暑いうちは口癖のやうに早く涼しくなればと言ひ暮しながら、早くも秋の聲を聞くと、それから先の一年の下り坂を控へて俄に心細く、さんく憎んだ暑さまで何とはなしに物懐しくなつて来る。ほのかな三日月に對して、「たのもしや」とはかない念願を寄せて居るところは愚かしい人情である。こんなところに、私達はほんとうに作者と共にある心地がする。作者は常に凡人として凡人の心をうたつた詩人であつたのだ。

○ 「一七〇」 禪に笛つきさして星むかひ (發句集)

「星むかひ」は、相逢ふ兩星を迎へるの意。

夜を籠めて遊び興じる七夕の夜、吹きさした笛の手を止めて、無造作に禪につきさして、がつしり

とした腕を組んだ裸形の男が屹と星合の空を仰いで居る。男を中心として、銀河の中天にかゝる暗碧の星空と、足許から續く野もせの、秋冷の氣の津々たるを覺える。頗る原始的な剛健な風趣である。然し、原始的とか男性美とかいふ特殊の觀念を構成して居なかつた昔の人としては、この句も大した意味で詠まれたのではなく、たゞ眼前の景情に興味を引かれたのであらう。それだけに、巧まれたらしい迹のないことは嬉しい。インデゴの濃いテンペラ畫を見るやうである。

○ 「一七一」 有明や淺間の霧が膳を這ふ (七番日記)

一茶が江戸から郷里への往復に、幾度か足跡を残したであらう淺間山麓、殊に荒涼たる淺間山のだら／＼登りの眼前に迫る追分邊の旅籠の朝と見る時に、一層一句の情景がハツキリして来る。

「有明」と云つて時間を現し「淺間」と「膳」で場所を示し「這ふ」といふ動詞で景色を活躍させてあるところは、寸分隙のない叙法である。一般によるこばれる代表的の作である。然し、精巧な織物を見るやうに、餘りに／＼行届き過ぎて居る技巧のために、幾分雄大な景趣をそがれて居る。これより少し後の作に「山霧のさつさと抜る座敷哉」といふのがあるが、私の好みに任せれば、私は寧ろ

後者の粗削りの豪放を採りたい。

○ 「二七二」 うす霧の引からまりし垣根哉 (七番日記)

高原或は山路のしよんぼりとした家居が思はれる。一筋引捨てたやうに、垣根に霧の澱んで居る様である。

私はこの霧が、お箸を持つて行つてくると巻付けたら嬉しい塊りになりさうな、あの電気飴のやうな気がする。「引からまりし」といふ言葉から来る感じは、實際あの電気飴のふくよかさと粘ツこさを思はせる。それ故に又捨てがたい趣きのある句である。

私の想像の遊戯を許して頂きたい。

○ 「二七」 夕霧や馬の覚えし橋の穴 (おらが春)

濛々と煙る夕霧の中に、淙々と流れる川音を聞く。輪廓だけ茫と顯れて居る木橋にさしかゝる小荷

駄を想像して見る。その馬は常にそのあたりを行きかひ馴れて居るのである。橋板に穴のあいて居るところに來ると、馬は一寸立止つて、危うげに前足を爪立て、扱上手に除けて通つて行く。それが、馬子の注意と關係なく、馬自身極めて自然に行動して居るのである。

悠々とした景、情の動き、共に申し分ない佳句である。

○ 「二七四」 稻妻にへな〜橋を渡りけり (句帳)

やゝ初秋の神経質に揉めて居る空合から、折々キラリ〜と稻妻が走る。この稻妻は晝若しくは暮方である。二十日前後の荒を待つ頃でもあらう。野川に渡した一枚橋か。キラリ〜と胸を射すやうな稻妻に脅される氣持と、へな〜した足許の危うさとの合した一寸緊切した氣分が出て居る。

この句に於ては、特に感動を表示するやうな語は使はれてない。寫生風に極めて平明に叙してある。然も人の感情に迫るところの多いのは、一に「へな〜橋」の主觀的描寫の力に依ると思ふ。

〔一七五〕石川はくわらり。稻妻さらり哉。（おらが春）

石川はたゞの多い川といふでなしに、水はありながらも、常は水筋が細く通つて居るばかりで、廣い河原一面、小石が白々と乾いた肌を曝して居るといふやうな川を云つたものだらうと思はれる。さういふ石の河原がサツと稻妻に照し出される刹那の、いかにもくわらりとした荒涼たる光景である。この句の生命はくわらりさりとといふ言葉のリズムにかゝつて居る。くわらりさりと、斷續する稻妻と、明滅する河原の景色が相互にめまぐるしく展開されて来る。

然し、贅澤を云へばこの句は餘り巧み過ぎる。巧みさが鼻につく。巧みにまかせて調子をつけ過ぎて居る憾みがある。

○

〔一七六〕秋の原知つたら何ぞ唄ふべき。（發句集）

「聲よくば唄はんものを櫻散る 芭蕉」の微醉を帯びて居るやうな柔かい品のよい調子と比べて、この一茶の句は野人にふさはしくぶしつけである。

高らかに澄渡る蒼空の下に斷雲の飛ぶやうな秋の野に行く旅人の、身も心も軽く、自らの軽さにそゝられるやうな、稍々亢奮した気分が感ぜられる。私達も野原や大海のへりに立つ時、どうかすると子供のやうに大聲を上げて見たくことがある。その、大自然と合致したい、大人の童心が生なまのまゝで投げ出されて居る。

この句の副産物として、江戸を中心として永らく放浪しながら節をつけて唄一つうたふ術オウも覚えなかつたやうな、ぎごちない一茶の姿の想像されるのも面白い。

○

〔一七七〕秋風やむしりたがりし紅い花。（おらが春）

「さと女三十五日墓」と前書がある。

「這へ笑へ」と離煮餅を祝つたさと女は、その年の六月末に滿一ヶ年餘りで疱瘡のため逝いたのである。一茶は子供を愛するためにいかなる讃辭も惜しんで居ない（おらが春参照）老後の情熱を一途に子供の上に注ぎ込んで居るやうに思はれる。私は一茶の書残したものゝ中で、子供に對する愛情だけはいかなる場合にも一貫したほんとうさを疑ふことが出來ないのである。さうした一茶が、次々に子

供を喪つて行つたこと、特に深く愛して居たと思はれるさと女を喪つたことは、就中ひどい傷手であつたらう。

この句の中七は發句集に「むしり残りの」となつて居る。後に訂正したものと思はれ。なるほど、むしり残りの方が景はハツキリして来るが、私はやはり原句の方により多く真情が籠つて居ると思ふ。折柄さら／＼と秋風の吹く頃で、墓のあたりには眞紅な蔓珠沙華が何か咲いて居る。死んだ子がよく目をつけてむしりたがつた花で、その度毒草の故を以て小言を言つたことなどを想起したと想像して見ると、一層堪らない作者の啜泣を聞くやうな氣がする。

○  
〔一七八〕 秋風や磁石にあてる故郷山（發句集）

「高井野の高みに上りて」と、前書がある。高井野は柏原の南東數里のところにある中野附近の平野を云ふ。一茶は屢々中野の門人知己を訪ね、そこから幽山峠を越して湯田中温泉に赴いた。

遠い旅にあつて遙に故郷の山に向つて磁石をふるといふやうな感傷的な場面ではないが、僅か數里の行き馴れた道にも、ふと故郷の山を見返つて物懐しく、磁石を取出して見るといふ軽い動作の中に、

いかにも秋風に衣を吹かれ、旅人らしい寂しい優しい氣持ちの出で居ることが、この句の捨難い味ひである。

○  
〔一七九〕 秋風やあれも昔の美少年（七番日記）

皮肉と惻隱と、何れにも解せられるやうな一茶一流の感懐が漏されてある。然し、この句を詠んだ一茶は最早五十に近く、決して若くなかつたといふ豫備智識にも依るが、この句は單に皮相な客觀でなく、浮世の實相に面した作者の心の寒さがうたはれて居ると思ふ。上五「秋風や」は、うらぶれた人の姿を其處に見出して居るばかりでなく、おのづから作者の主觀がにじんで居る。「未醒地塘春草」の詩の心も思ひ遣られる。尤も、この句は下手に行くと極く有りふれた感傷的な概念句に墮する傾向を持つて居るが、此處では、大まかな調子が撫然とした感じにふさはしい叙述を得て居る。

○  
〔一八〇〕 秋風や壁のへまムシヨ入道（七番日記）

同じ古壁に對しても、その時折々の人の氣分に依つて様々の錯覺の生ずるものである。例へば、雨夜のしめやかさに見入つて居ると、雨ジミが次第に物の形となつて、目鼻がついて來たり、或ひは地圖のやうになつたり……但、これは正しく無氣味な變化へんげが書付けられてあるのである。

同じ落書でもへまムシヨ入道には寂びがある。心の熱を失つて行くやうな秋風の中に晒されて居る入道の姿は、荒涼たる秋の表象のやうに、見て居る人の心に乾いた淋しさを誘ふ。

珍奇な取材であるために、この句を單に滑稽な句と見ることは當らない。壁に描かれたへまムシヨ入道と、それに對する作者の心との交渉が、折柄の秋風に托されて居る。といふよりも、作者とへまムシヨ入道と秋風との三つのものを通して、一つの氣分が形つくられて居る。滑稽といふよりも、寧ろしみぐとした寂びのある句である。

○

〔一八一〕 秋風に歩いて逃る螢かな (七番日記)

晝間の螢である。

夏の夜の景物である螢を、晝間、然も秋風の中に見出して居ることが既に珍しく、傷しい感じを伴

ふ。首筋の赤い黒い小さな虫が、何物にか追はれるやうに、それも飛ぶ性質を持つ螢が早足に歩いて逃げて行く姿は、いかにも秋風のすさまじさを思はせる。

この句は勿論盛者必衰といふやうな陳腐な寓意ではないが、然し、作者の頭の中には、夏の夜の闇に玉を散らすやうな螢の盛時の追想と、目前に見る哀れな小さな虫とを結び付ける、云はれぬ哀感が催されて居たと思ふ。然しその哀感を生のまゝで打出さずに、「歩いて逃げる」といふ極めて正直な、見たまゝの叙法を取つてあるところに、一層自然な効果を擧げて居る。

○

〔一八二〕 寢筵や野分を吹かす足のうら (發句集)

野分は野を吹分くる意で、二百十日以後の暴風を云ふ。然し「野分を吹かす」とある中七がいかにも悠長で、そんなにひどい風とは思はれない。たゞ、田も畑も不安にざわめく戸外の景色を見通す農家などの板間に、寢筵を敷いて寢そべつて、直接風に吹かれて居る足のうらの冷やくとする感じである。野分を吹かすと、逆手の叙法は、例の一茶の好みである。兎に角、この句の生命は坐五「足のうら」にある。足のうらを焦點として荒涼たる野分の氣分が全體に擴がつて居る。肢體の一部を捉

へて印象を鮮明にする作者の慣用手段で、この外にも多くの例を残して居る。

〔一八三〕 縁<sup>ゑ</sup>ば<sup>な</sup>や<sup>な</sup>二文<sup>ふ</sup>花<sup>な</sup>火<sup>な</sup>も<sup>な</sup>夜<sup>よ</sup>の<sup>て</sup>體<sup>てい</sup> (發句集)

二文花火は何れ線香花火のやうなものであらう。夕食後の手すさびに、縁先に出て花火を點する浴衣の主。はやし立てる子供。子供の母、姉と、花火を取巻く賑かなまどゐが、花火を中心として闇の中にぼかし出されて居るやうである。夜の體は「夜らしい」といふほどの意。但、寫生に即して寫生を離れて居るこの「夜の體」は、なか／＼老獪な辭句である。由來、説明なしに想像を呼ぶこの種の手法は往々思はせぶりの嫌味に墜し易いが、元々軽い興味で行つた作だけに、さうした難を逃れて、ほのかな情趣を傳へることに成功して居る。

〔一八四〕 虫<sup>むし</sup>鳴<sup>な</sup>く<sup>く</sup>キ<sup>き</sup>の<sup>の</sup>ふ<sup>ふ</sup>は<sup>は</sup>見<sup>み</sup>え<sup>え</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>壁<sup>かべ</sup>の<sup>の</sup>穴<sup>あな</sup> (旅日記)

恐らく、今になつて急に出來た壁穴ではないのであらうが、虫の啼く音に秋のおとづれをしみ／＼

と感じて、今まで暑さのためにだらけて居た心持ちも急に引締つて來て、家の中なぞも久し振りで事新しい氣分で眺め廻して見た時に、はからずも壁穴に注意が止つたのであらう。「昨日は見えぬ」は、實は昨日まで氣が付かなかつたの意である。

これから次第に寒い方に向つて行かうとする季節に當つて、この壁穴は作者の眼に殊に佗しく、作者の心を貧しくしたに違ひない。此處にも江戸に生活して居た時代の頼りない氣持ちがにじんで居る。

〔一八五〕 蟀<sup>せむし</sup>の<sup>の</sup>と<sup>と</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>や<sup>や</sup>唐<sup>から</sup>箕<sup>み</sup>の<sup>の</sup>埃<sup>ほこり</sup>先<sup>さき</sup> (おらが春)

唐箕は、穀物の糶<sup>しな</sup>や糶<sup>しな</sup>、塵等を選分けるための木製の具で、箱の上部の漏斗狀の部から穀物を入れ、箱の内部に仕かけられた風車やうの物を廻して烈しく風を起し、風の力に依つて、穀物が完全なもの糶破片、糶殻<sup>こ</sup>ゴミ等と重量に應じて三段に分つて三つの口から吐出される仕かけになつて居る。この句は季節から云へば農家の秋の收穫後である。

隙間漏る風の烈しい場合など「唐箕の口のやうだ」と云はれる位で、棘ツばい埃のサーツと吐出さ

れて居る先を、足の長い褐色の蟀がピョン／＼と飛ぶ刹那の光景で、晩秋の田家の縮圖と見られる。際どい捉へ方をして居る。

○  
〔一八六〕 庵の夜や棚さがしするきり／＼す (七番日記)

これも蟲の動作を叙したものであるが、歩いて逃げる螢よりも、唐箕の埃先にとぶ蟀よりも、「棚さがしする」といふ中七に依つて、きり／＼すが瘦脛を上げて忍ぶやうな恰好をしてのそ／＼歩いて居る姿が宛らに再現されて居る。いかにも草深さうな庵の様と、秋の夜永のつれ／＼に、偶々蝨の存在に注意を向けた主人公が、次第に蟲の動作に興味を引かれてほゝゑみかけて來る心持ちが、やはりこの「棚さがしする」といふ主觀的描寫に依つて不用意に語られて居る。これ等も一茶の特色の出た句である。

○  
〔一八七〕 お祭に赤い出立のとんぼ哉 (發句集)

都會の空でも赤とんぼの大擧して飛ぶ日があるが、この句の持つ氛圍氣は、やはり野のものであらう。鎮守の森にのぼりが立つて、賑かに太鼓が鳴り渡つて居る。黄金の波寄る野面を、老若男女それぞれに着飾つて打連れて祭をさして行く。その人達に交つて、赤とんぼの空高く交流する様が、恰度人間と共に着換えをしてよろこんで居るやうに見える。

理智的になりゆく近代人には次第に顧られなくなつて行く句だが、子供の世界にだけは永久に残されて居る可憐な句境であらう。

○  
〔一八八〕 づぶ濡にぬれてまじ／＼とんぼ哉 (七番日記)

この「まじ／＼」は、春の部「エタ寺の櫻まじ／＼」とは少し意味が變つて、ぬれしほたれていかにも困つたらしいとんぼの様子を活寫して居る。俄の大雨にまごついたとんぼが、葉かげなどに身を避けかねて、身體に比して大きな美しい翅に雨の粒々を宿しながら、ジツと思案に暮れて時折光る頭をチヨイと傾けるやうにして居るいぢらしい姿である。

微細な觀察眼と共に、小さな生命に對する愛情の流れて居ない限り、斯うした小さい句は一寸掴み



兼ねるものである。

○ 「一八九」 仰<sup>○</sup>向<sup>○</sup>けに<sup>○</sup>落<sup>○</sup>ちて<sup>○</sup>鳴<sup>○</sup>きけり<sup>○</sup>秋<sup>○</sup>の<sup>○</sup>蟬<sup>○</sup> (句帳)

蟬の命は僅に数日間のものださうで、物の哀れの譬へにも引かれて居るが、殊にやゝ露寒を覚える朝など、庭先の落葉を掃く手許などにバサリと仰向けに落ちて来て、落ちた拍子に鳴く、といふよりも、筋肉の伸縮に依つて發音板が振動してギイと軋むやうな音を立てることがある。なまじ音を立てるために、澄透る空氣の中に波紋のひろがるやうな淋しさの點ぜられるものである。

對象を靜かに見極めて、素直な客觀的描寫に據る晩年のよい傾向を行つた作である。

○ 「一九〇」 啼<sup>○</sup>き<sup>○</sup>な<sup>○</sup>が<sup>○</sup>ら<sup>○</sup>蟲<sup>○</sup>の<sup>○</sup>流<sup>○</sup>るゝ<sup>○</sup>浮<sup>○</sup>木<sup>○</sup>哉<sup>○</sup> (文通)

「八月二十九日洪水」と前書がある。多分千曲河畔の洪水を目撃しての作だと思ふ。晩年の吟である。この句には時が明かに示されていないが、目前に浮木の流れるのを見て居るのであるから、どうして

も晝である。僅に浮木に取付いて細く泣いて行く蟲の音が、あたりの荒涼たる光景の中に、作者の耳に特に哀れ深く響いたのである。

この句の解釋からは脱線して了ふが、私は、あの大地震の夜、對岸の炎を浴びながら、既に家も樹木も焼拂はれて了つた大川河畔に寢轉びながら、大地に頭をつけて、避難民の騒音と、怪我人の呻きと、血潮の腥さの中に、僅に焼残つた下草の中に途切れ〜に澄んだ蟲の音を聞いたことを、今はつきりと思ひ起す。

○ 「一九一」 虫<sup>○</sup>の<sup>○</sup>尻<sup>○</sup>を<sup>○</sup>指<sup>○</sup>して<sup>○</sup>笑<sup>○</sup>ひ<sup>○</sup>佛<sup>○</sup>哉<sup>○</sup> (おらが春)

「經堂」と前書があるので、この笑ひ佛は傳大士のことである。傳大士は初めて輪轉藏を作つた人で、寺院の經堂には其像が祀られてある。

「佛像圖彙」に「梁朝傳大士——名ハ翕<sup>ナツ</sup>字ハ立風亦善慧大士東陽大士ト號ス。十六歳ニシテ劉氏ヲ娶リ二千ヲ生ス。音成<sup>フジヤウケン</sup>普建<sup>フケン</sup>ト云是也。アル時大士影觀照<sup>カウケン</sup>水見<sup>スイミ</sup>ニ圓光寶蓋<sup>エンカウホウガイ</sup>普建指<sup>フケンササユ</sup>之<sup>ノ</sup>音成見<sup>フジヤウケンミ</sup>之<sup>ノ</sup>咲<sup>ノ</sup>。佛祖統紀曰東陽郡鳥傷縣<sup>トウヤウクンニヤウキョウ</sup>ト云フ所ノ双林寺ト云フ寺ニ居住シ給ヘリ、一切經目錄多クシテ諸人見ルニ苦勞

ナリトテ、箱ヲ一柱八面クル／＼メグルヤウニ拵へ、輪藏トシテ末世マデ残ル。大建元四月二十七日  
本州遷化(本朝欽明帝三十年己丑歲ニ當ル)とある。大士の左右には普成普建の二童子が立つて居る。  
普成が父の顔の水に寫るを見て笑つたといふ故事から、笑佛などの俗稱があるのであらう。そして、  
この句の「指して」もこの故事にからんで居る。

一茶獨特の飄逸な俳調であるが、そればかりでなく、軒近く、いとゞ馬追屁ツびり虫の飛び交ひ啼  
連れる草深い經堂の様を彷彿させる。

○  
〔一九二〕朝顔や人の顔にはそつがある (發句集)

「そつがある」は、物事行届かないところ整はないところのあるに云ふ。

朝顔を見て居る人の顔を傍らから觀察したのである。色とり／＼に美しく露を含んで咲出した花に  
對して、人の顔にはそれ／＼缺點、缺點といふよりも抜けたところがあるといふので、完全な自然物  
に對して不完全な人間の顔の目立つて來るところがこの句の見付け處である。吟味されるとも知らず  
に一心に朝顔を見て居るこそ、いゝ災難である。

○  
〔一九三〕外聞に朝顔咲かす町家かな (旅日記)

拭込んだ窓格子の下に氣の利いた竹の駒寄せでもして、朝顔を上手に這はせてある小ぢんまりした  
町家を思はせる。「外聞に朝顔咲かす」は、例の意地悪い觀察ではあるが、自分よりも兎角他人本位の  
見得で苦勞する都會人の生活様式の一つの見方として、残念ながら、この皮肉さに抗議する言葉を持  
たない。

この句は氣分に於ては穿ちを主とする川柳の域に踏込んで居る。一茶の作品には斯ういふ例が澤山  
ある。

○  
〔一九四〕人知らぬ朝顔も朝な／＼哉 (旅日記)

後世の所謂月並調を思はせるが、私はたゞこの句は一茶が特に巧んだものではないと思ふ。露の中  
などにこぼれ種の朝顔の咲き盛つて居る様でも見て、一茶は或時感傷的な氣分に觀じたのである。人

知れぬ朝顔さへ朝々美しい盛りを見せて居るといふ敬虔な感じ、或は人に知られなくとも斯うして不平も云はずに咲いて居ると、自分の榮えない生き方を自ら慰めて居るとも兩様に取れる。

特に短詩形の俳句に於ては、生なまな主觀をそのまま、作品の中に移入する態度は排すべきであるが、一茶のやうに一にも二にも作句の中に生命——生活を打ち込んで居た作者にあつては、この種の作品の残されて居ることも不思議でない。

作品としての價値は云はない。一茶の漏した溜息の一つとして玩味して見るだけの價値はある。

○ 「一九五」 朝顔や一霜添へてはつと咲く (發句集)

原本には送り假名がないが、他の作例から押して「添へて」と讀んでおく。

信濃あたりの實況であらう。未だ朝顔も衰へ切りぬ先に、急に氣温が下つて、朝起きて見ると板庇などに薄霜がして、ほつ／＼と吐く息の白いやうなことも珍しくない現象であらう。その、急に白けた朝景色の中に、寒さにめげず勢よく咲出した朝顔の花の美しさが、作者の心眼を通して非常に鮮かに印象される。「一霜添へて」は、無理な用法であるが、同時に根強く踏ん張る一茶の特調を示して居

る。兎に角、斯ういふ句は思ひ付きや巧みで出来る句ではない。

○ 「一九六」 うか／＼と出水に逢ひし木槿かな (旅日記)

出水に逢つたのは木槿ばかりではない。家も他の草木も一樣に水に浸されて居るのであらうが、特に木槿を捉へたのは、あの焦點を定め難いやうな輪廓の茫とした花が、曲のない枝ぶりで濁水の中にふわ／＼やつて居る様が、いかにも間の抜けたらしく、それだけに一種の哀愁を含んで作者の眼を惹いたのである。

擬人といふよりも、寧ろ作者の魂が對象の生命に働きかけて居るといふ方が適當である。木槿の性格を捉へた佳句と思ふ。

○ 「一九七」 寝る外に分別はなし花木槿 (旅日記)

こゝには、木槿の花にからまる茫然とした氣分が出て居る。

春の部「夕燕我にはあすのあてはなき」と同時代の作で、殆ど同じ境地をうたつてあるが、夕燕よりも露骨でないだけ、じんわりとした感じがある。たゞさへ夕闇に咲く木槿は淋しいものであるが、まして生詰つた一人の男が、恐らくひだるさへも手傳ふであらうほんやりとした氣持で、木槿の花を眺めて居る姿を想像して見ると、その人と木槿の花との間に黙々とした淋しさのひろがつて來ることが感ぜられる。だが、作者は「まあ寢て了はう」といふことでホツと息をついて居る。

失意や貧しさを打出して居るが、この句は人を苦しめはしない。比較的早期の一茶の句を例とすることは好ましくないが、俳味は、どういふものゝ中からも一脈の明るさを持ち來すものだといふことを、俳味といふものはさういふものだといふことを、私は信じて居る。

○  
〔一九八〕むだ花に景色とられし瓢かなひょうかな（發句集）

瓢の實景をよく寫して居る。肝心の瓢は形を作つて來ても青く小さく葉蔭に遠慮して、むだ花ばかり大威張りで、打敷いたやうな廣葉の緑と相應じて大輪の鬱金に咲誇つて居る。然しこの句は瓢の句である。むだ花の盛りの中で、特に葉蔭の瓢に注意を向けて居る作者の心持が坐五の「瓢かな」に領

ける。

さう思つて見直すと、第一印象のむだ花の美しさから轉じて、小さな瓢の姿が觀念に上つて來て、可憐な趣が出て來る。中七「景色とられし」は「むだ花」と「瓢」を繋いで一句を整へるために、理智的訓練を経た用語である。

○  
〔一九九〕みそ萩や水につければ風の吹く（旅日記）

四十二歳の吟である。

この句は魂迎への句と並んで居るから、やはり、みそ萩の穂を茶碗の水に浸して精靈棚に手向けることを云つたものであらう。緑の葉や赤紫色の花を水に浸すと一層艶々しくすがくしく、あたりの爽氣を呼ぶやうに思はれる。途端に、そよらと冷たい風が吹いた。その瞬間の感じを、主觀を強めてみそ萩の方から風が吹いたやうに言僻したのである。彼の交友夏目成美あたりの江戸風の影響を受けた軽い調子であるが、それよりも、一句の情趣が、近年一部の人々の間に試みられた情調俳句といふものを思ひ出させて、一寸ほゝゑまされる。